

MILF of STEEL

ミルフオブスチール

Don't
meddle in
my daughter!

TAMAKI NOZOMU
PRESENTS



DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

TAMAKIYA

TRIFFI-DOH

この世界は

一人の主婦によって
守られている。



ウチのムスメに
手を出すな！
これは2代に渡って
その豪腕で世界を救う
母娘スーパーヒーロイン
エイズワンダーの
活躍を描く

少年画報社
ヤングコミック連載中
(単行本2巻発売)
の物語である！

CONTENTS

- 05 環望 (漫画)
- 17 ブッチャーU (漫画)
- 23 チバトシロウ (漫画)
- 25 タカスギコウ (漫画)
- 31 ナッピー (漫画)
- 32 774 (漫画)
- 34 もっちー (イラスト)
- 35 一本木蛮 (漫画)
- 43 榊原瑞紀 (イラスト)
- 44 かのえゆうし (漫画)
- 48 Gemma (小説)
- 56 ティクラクラン (小説)
- 64 富士原昌幸 (漫画)
- 67 神野オキナ (小説)

ざまあねエゼ
エイスワンダー！

お前はこの俺
へビーメタル様にや
かなわねエんだ

今も昔もなあ



20年前もこうして
可愛がってやったなあ

思い出すぜ！

ポッコポッコに
したお前を

地図にも
載っていない
離れ小島に
引っ攫って

待ち構えてた
ヴィラン達の前に
放り出してやった！

みんなお前にや
いのようにポコら
れてたからなあ

ここぞとばかりに
ウサを晴らしに
かかりやがった！

忌々しいのは
お前のダンナ…

B・Mザ
シューターが乱入
してきやがって
お開きになっち
まった事だが…

無理…

みんな
で
噂しあつた
んだぜ

無理

ありやあ絶対
孕んでる！

今活躍してる
2代目ワンダー
お前の娘だよな

モッ

モッ

ありやあ一体
誰の子だあ？

あのパワー
あのガタイ

間違いね
よな~~~~

ゲッ

かぼ

鋼の女神エイスワンダー
に種を仕込んだのは俺達の
誰だろうってなア！

正直に言えや

ありや俺の娘だろ！

違う！

ちが…

違わねえ…

んぎっ

よっ！



傑作だぜ！あ

あ

天下の二代目
エイスワンダーが

地上最強のヴィラン
ヘビーメタル様の
ムスメと知ったら

あ



世間は、いや
ムスメは一体

グ
チュ

あ

あ

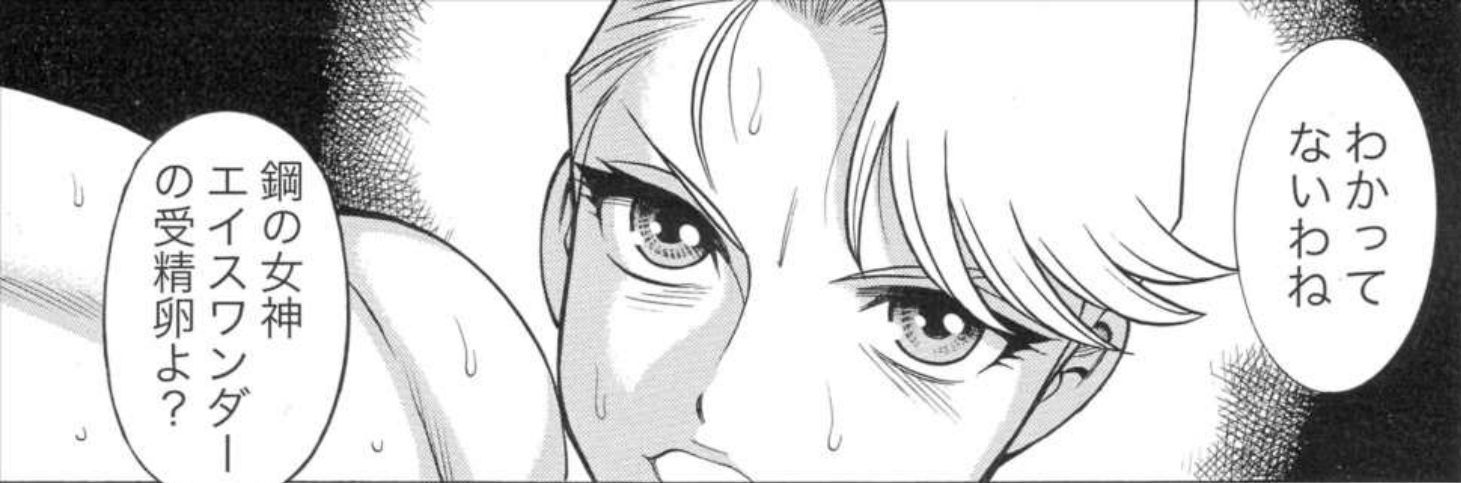
チュ

あ

どー思う
だろーなア!

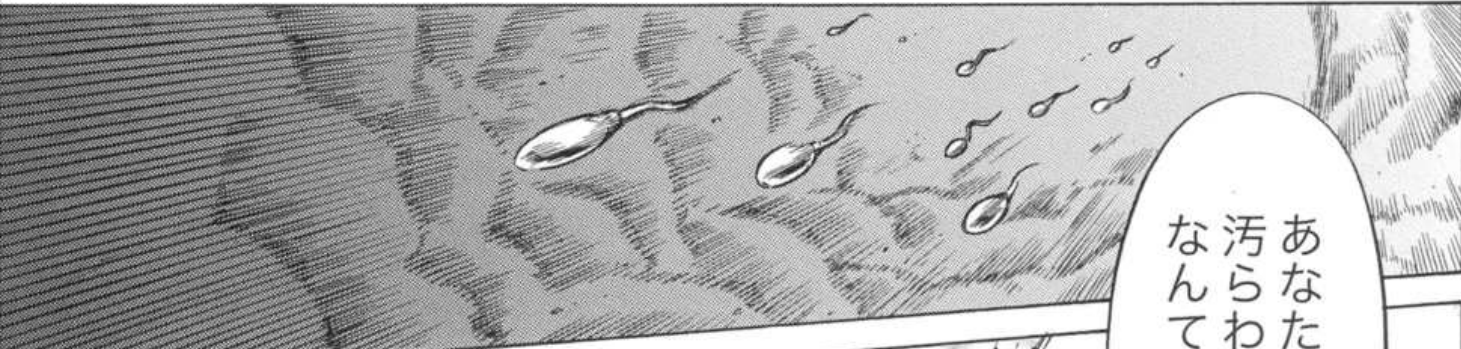




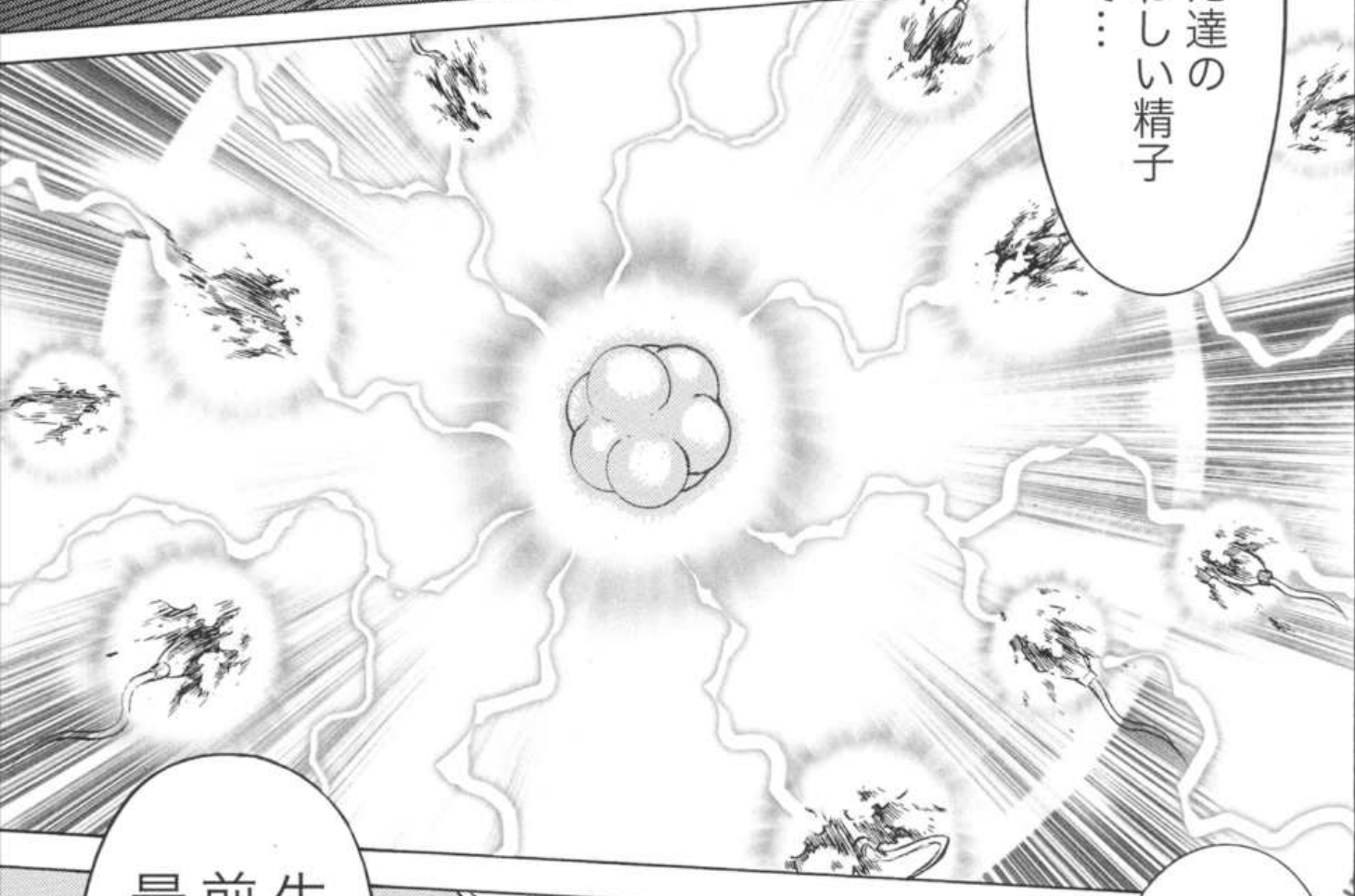


わかって
ないわね

鋼の女神
エイズワンダー
の受精卵よ？



あなた達の
汚らわしい精子
なんて…



ウチの
ムスメは

生まれる
前から
最強なの！

20年前は
あまりにシヨックで
反撃すら
出来なかったけど

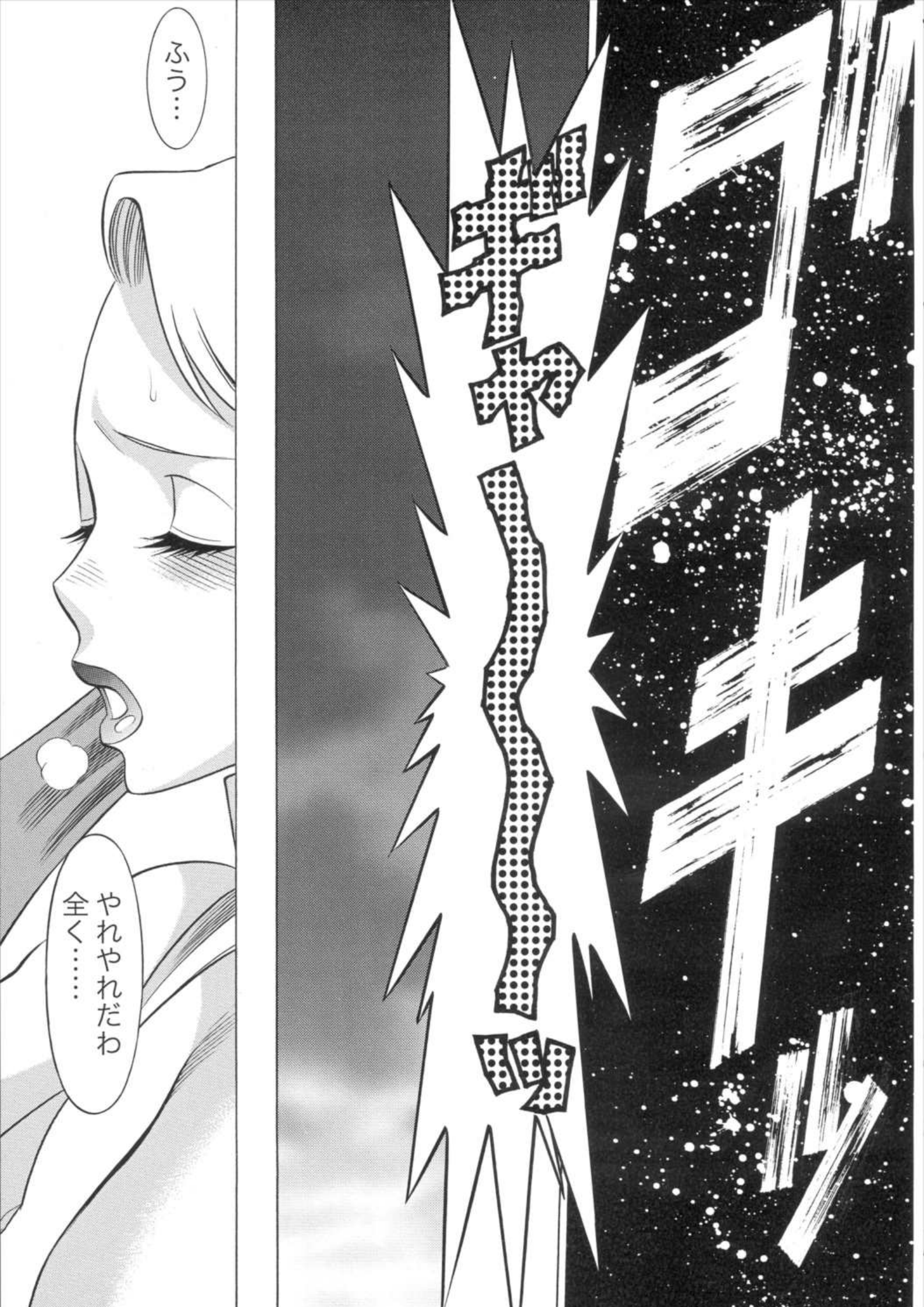
シグゼッ!

おかげ様で
私も随分
強くなったわ



ふじ...

やれやれだわ
全く.....



すっかり手間
取っちゃった

あらやだ

たれて
来ちゃった

クララが起きる前に
朝ご飯の支度しなきゃ！



くっ…貴様は
一体…!!?

これは何の
つもりだ!?

天界の戦士
アルテミス…

聞く処によると
お前はエイズワンダー
に近い存在らしい

何をするつもり
か知らんが…

**私は絶対に
屈しないぞ!!**

その聖布とやらも
大いに利用できそうだ

フフフ…お前には
奴を倒す為の手駒
とさせて貰おう

ブッチャーU



聖布の力と言うのは相当なものだ

貴様ら天界の者ですらその身の中へ流し込まれるば無事ではあるまい

エネルギーとして変換された精液を十分に受け取れ





捕えた時は
生娘だった
が……

今では両穴を
ほじくられ痛み
すら快感に感じる
肉壺と成り下が
ったようだな

全く……
聖布の力も
大したものだ

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

フフフフ：
聖布のエネルギータが
体内に行きわたった
様だな

ま…倍々

これより次の
段階に入る

ハッ
ハッ
ハッ

まだ抵抗の意識が
少し残っている
ようだが…
新しい衣装が出来る
までの間好きに
使って良いぞ

姉…さま

お…え…

フ…フ…
フ…フ…

ハッ
ハッ

ハッ
ハッ

ハッ
ハッ
ハッ

ハッ
ハッ
ハッ

記録はここまでの
ようだな

どうだ
エイスワンダー？

お前の事を
慕っていた
アルテミスは
我々の手に
堕ちた

無様な
格好だな

自身がエイスワンダーで
ある事を理解しながら
快楽に吞まれていくが
良い

エネルギー化した
聖布の力…
貴様の中に流し込み
侵食していく感覚が
解るか？



はあ...はあ...
ごめんなさい
姉様...

姉様の胎温...
このスーツの力で
大いに感じます♡

こんな感覚...
いけないと解って
いるのに抗えない

それに...この聖布の力も
姉さまに流し込む度に
一緒に流れていく
のを感じます...!!

ひとつに...
ひとつになり
ましよう
姉さまアア

スーツ...♡

スーツ...♡

スーツ...♡

スーツ...♡

スーツ...♡

スーツ...♡

スーツ...♡

スーツ...♡

追憶

チバトシロウ

私はプロウツヨブの
残党達と
戦い続けていた



あのヨがヒロイン業を
辞めてから



苦戦し
蹂躪され

時には
汚された



主力が居なくなつた
とはいへ



だって
あのヨは...

しかし
私はあのヨを
恨んではない



あっ♡

ガッ!!

そこまで
よ!!

私の友:

私のヒロイン

ああ

大丈夫?

うなされてた
けど...

ハンナ?

辞めると言ったのに
助けにくるお人好し

彼女の名は
エイスワンダー

ちょっと夢で
昔を思い出してた
だけよ...

今も昔も...



N.U.D.E.
特殊技術二課

え、ではこれより
特技二課定例会議を
はじめる

今回の議題は
エイスワンダーの
戦闘コスチュームに
ついて

N. U. D. E. の特殊な人々

タカスギコウ



ご存知の通りプロウジョブとの
戦闘は苛烈極まりなく

エイスワンダーが受ける
ダメージは年々増加している

それに伴いエイスワンダーの
戦闘コスチュームの破損率も
大幅に上がってしまっている



破損の度に修繕をし
補填をしていくコストを
考えると正直な所
頭が痛い

そこで本日は
エイスワンダーの新しい
戦闘コスチュームを
いくつか提案したい

サンプルとして
三案用意した
シミュレーション画像で
ご覧頂きたい

まずはこちら

おお…
なんかゴツいな

しかし高機能な物には
それなりのコストが
当然掛かってしまう

上から経費削減という
釘を打たれている現状では
導入の可能性は
低いかと…

露出も
少ないしね…

そうっ！
それっ！

本来エイズワンダーの
肉体は外部からの攻撃に
対する耐久性は
非常に強い

耐久性は勿論
エイズワンダーの肉体的
パフォーマンスを向上してくれる
パワードスーツだ

コスチュームはアイコンとして
必要とされているのであって
戦闘時においては全く意味を
持たないのではないか…
じゃあこんなものでも
いいんじゃないか…

つてのがコレ!

只のエロ水着!

通販でも
購入出来るし!

えええ〜…
これはちよつと…

クララはともかく
アテナが着るには

かなり無理が
あるんじゃないか…

君は何を
言っているのだ

うわっ…

おばさんが年甲斐もない格好で
羞恥に顔を歪ませながら
悪者と戦う姿が醍醐味
なんだろうがっ!

滾るんだろうがっ!

まっ…まあ
落ち着けっ!



失礼…
少々興奮を…

では気を
取り直して…

おおっ！

コストも見た目も
絆創膏レベルツ！

最後の提案が
こちらっ！

ええ〜〜〜っ

一見全裸と見紛うハレンチ
極まりない衣装！
ちよつとの弾みで剥がれてしまう
かもしれないというスリル！

どおろろするアテナア！
戦う前から大ピ〜ンチツ！



エイスワンダーに
出撃要請



シークレットゲート
開放



は〜い

いい加減ブツクサ
言わないの



なにか
特技二課よ...

まったくもう...



エイスワンダー
出撃しました

誰が何と言おうと
これが私の姿…

これがっ

エイスワンダーよっ！

END



環望先生。
「ウチも」同人誌おめでとう
ございます!!!
ゲストに秀で頂いて非常に感謝
しております。ニヤほど創作意欲を
刺激する作品はありません。
今後ともヒロインものだけを描き続け
下さい!!!
ナッピー

一般市民の個人情報をも盾に取り
エイズワンダーを呼び出した
パパラツツオ

エイズワンダー
大ピンチだ！

ノコノコ出てくるとは
良い度胸だエイズワンダー
こいつでお前の秘密は
全て暴露してやる

ご自由にどうぞ！

私オナニー大好きで
一日5回してるわ！

ただし暴露され
ちやう前に私から
教えてあげる！

こんな太つといバイブ
も入れちやうし！
外で素っ裸になって
空飛びながらオナニー
した事もあるし！

これ入れながら登校
した事もあるの！

流石あなたの娘
良い思い切りね

うう…あの人に
顔向け出来ないわ…

それにしても…
一日5回はちよつと
多すぎないかしら…

え？

……

はい私の人生

終わった

いいぞエイズ
ワンダー！
ステーキ！
エイズワン
ダー最高！

あれ…？何か
受けちやつてる…？



このコスチューム…ちよっと
恥ずかし過ぎるんだけど…

え？ちよ
ちよっと！

そ、そんなの
入ら…あ！



あなたエッチなのと
相性が良いみたいね
パワーが5倍にも
アップしてるわ

とわお

あはは…人前で
エッチな格好で
オナニーしながら
戦うのって…

キモチいいかも！

適応力高いわね

ああ…あんな
いやらしい
格好で悦んじやつ
てるなんて…

誰に似たの
かしらね…



プロウジョブ傘下のフロント企業、とある
企画モ/AV会社にクララが拉致された
との報をN-U-D-Eから知らされたアテナ。
その正体がアイスワンダーと知られたら
クララの貞操はピンチ!
熟女コスプレモ/AVのオーディションに
参加する振りをして接近するつもりが、
いつの間にかジャケット撮影の段取りが!
このままAVの撮影に突入してしまうのか?!

二人の関係がバレてリアル親子井モ/AVに
企画がシフトしてしまう事は何としても避け
なければいけない!
ここが正念場だ、アテナ!!
意外に女系高生コスプレが似合ってた
可愛いぞ、アテナ!!

え…

こ…
こうですか?

はい、
もつと笑顔で!
笑って、笑って!

両手ピース
でね!

そうそう
いいねえ!!

奥さん
可愛いよ!

もっちゃん

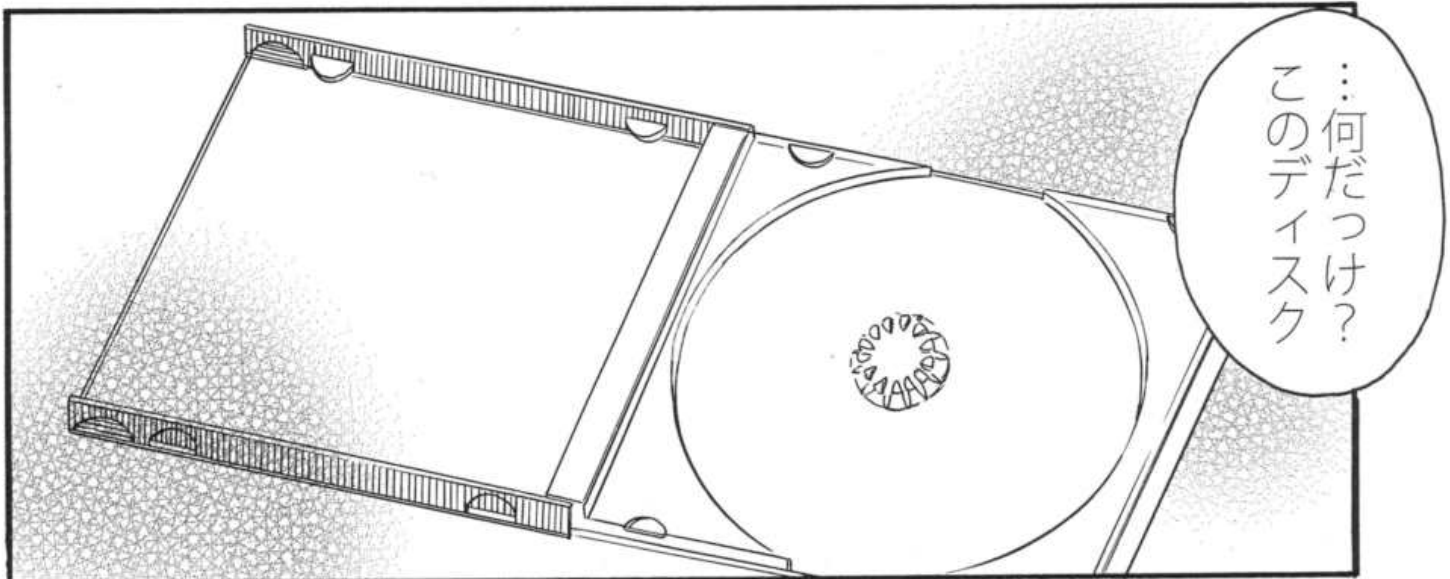
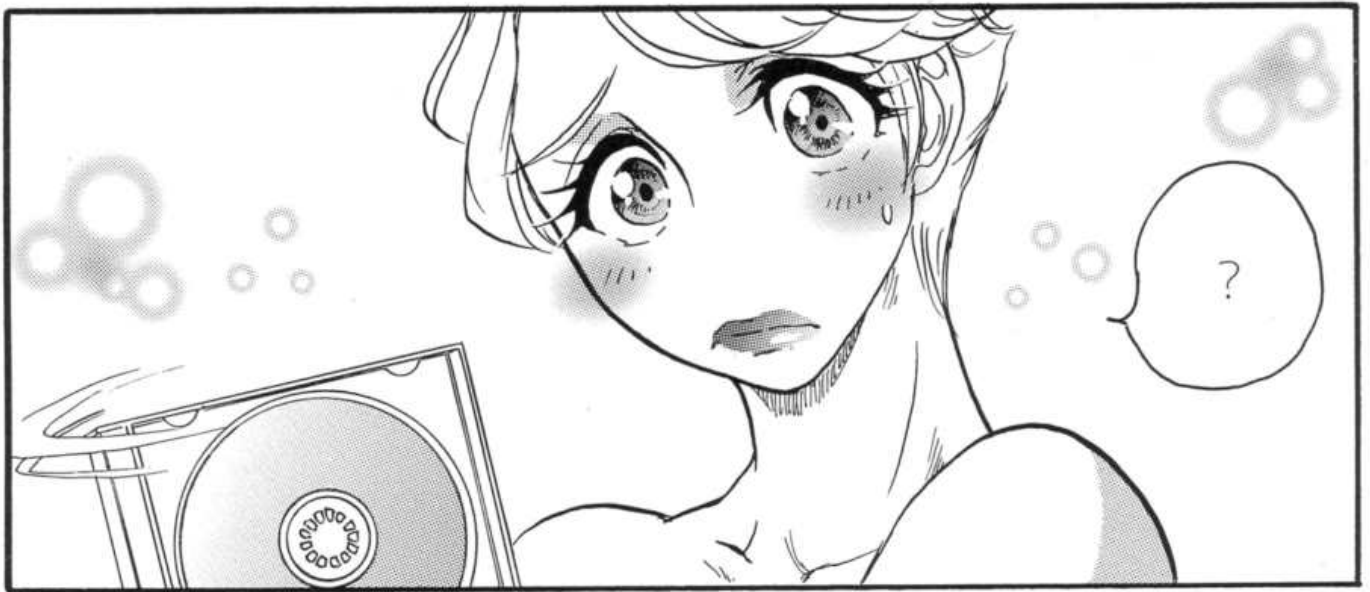
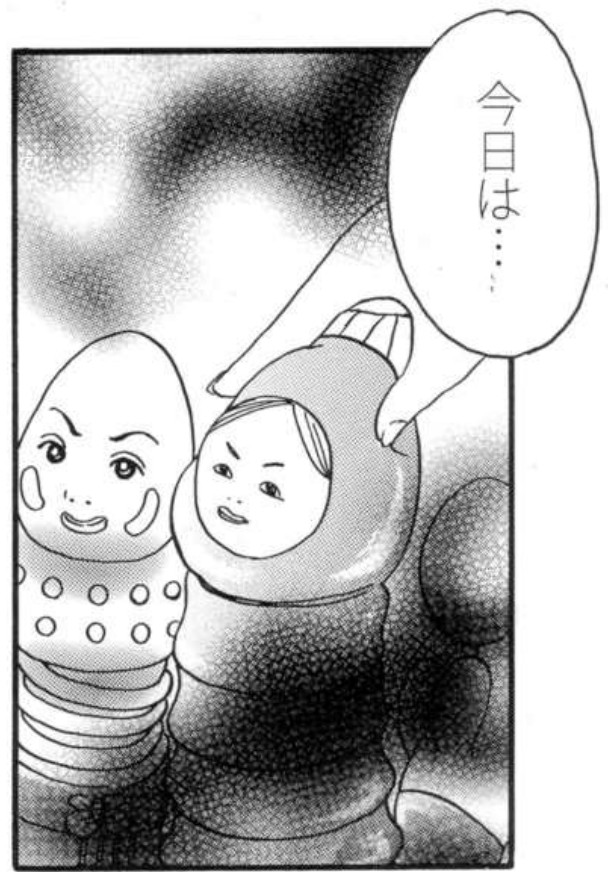
様は
巨根が
お女

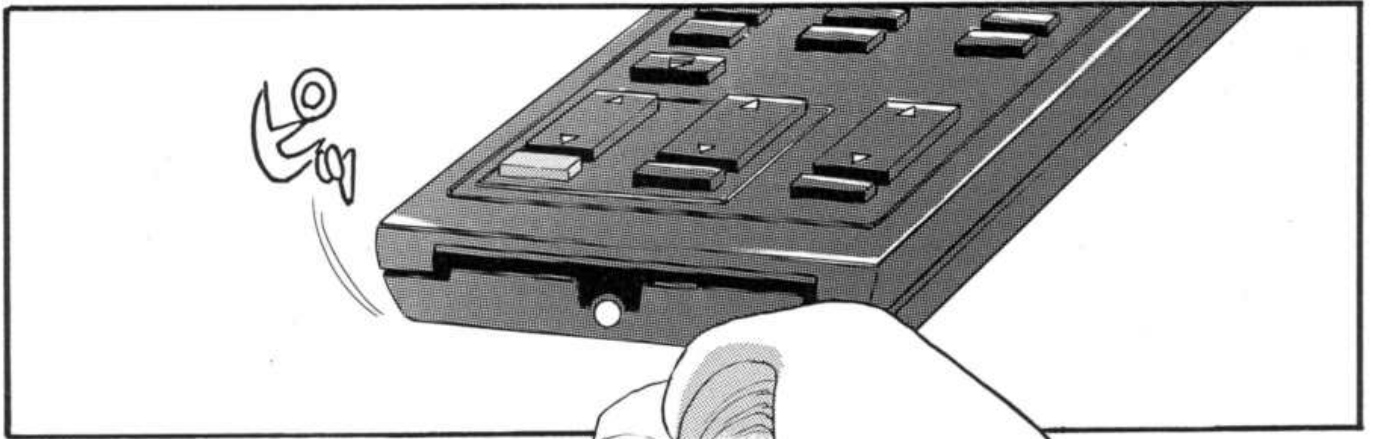


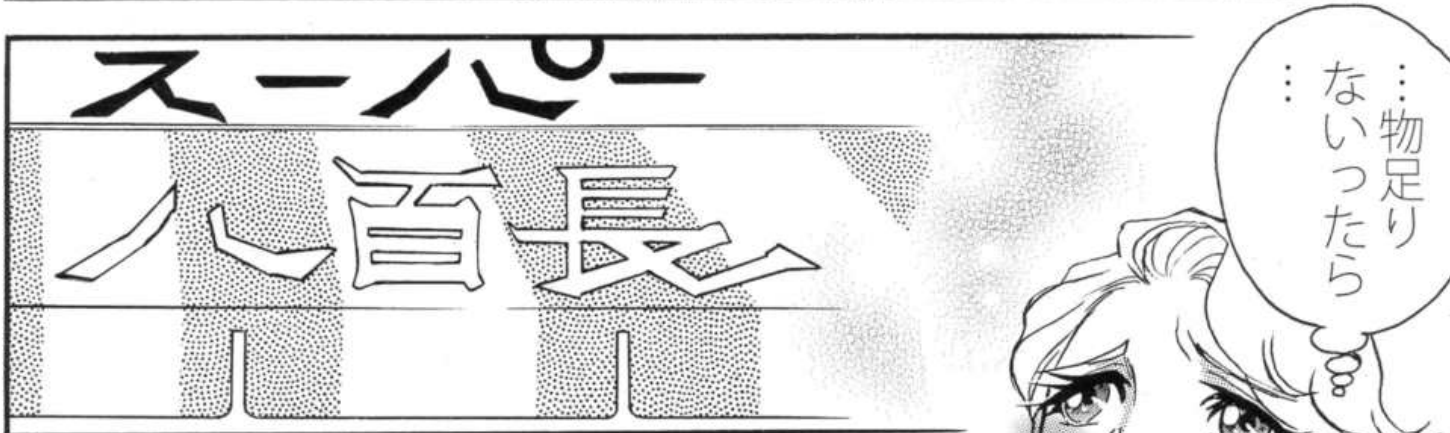
ゆっくり
観るなら…

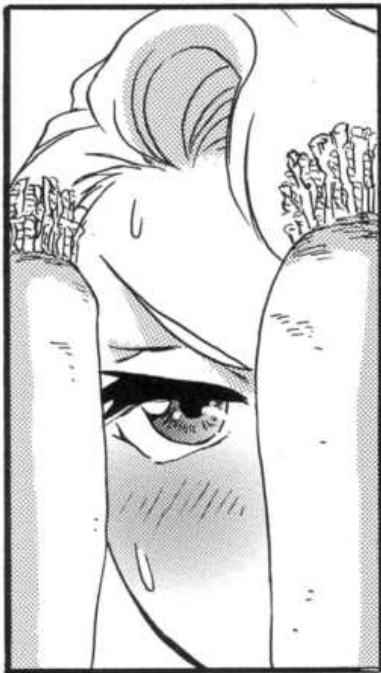
——昼下がりに！

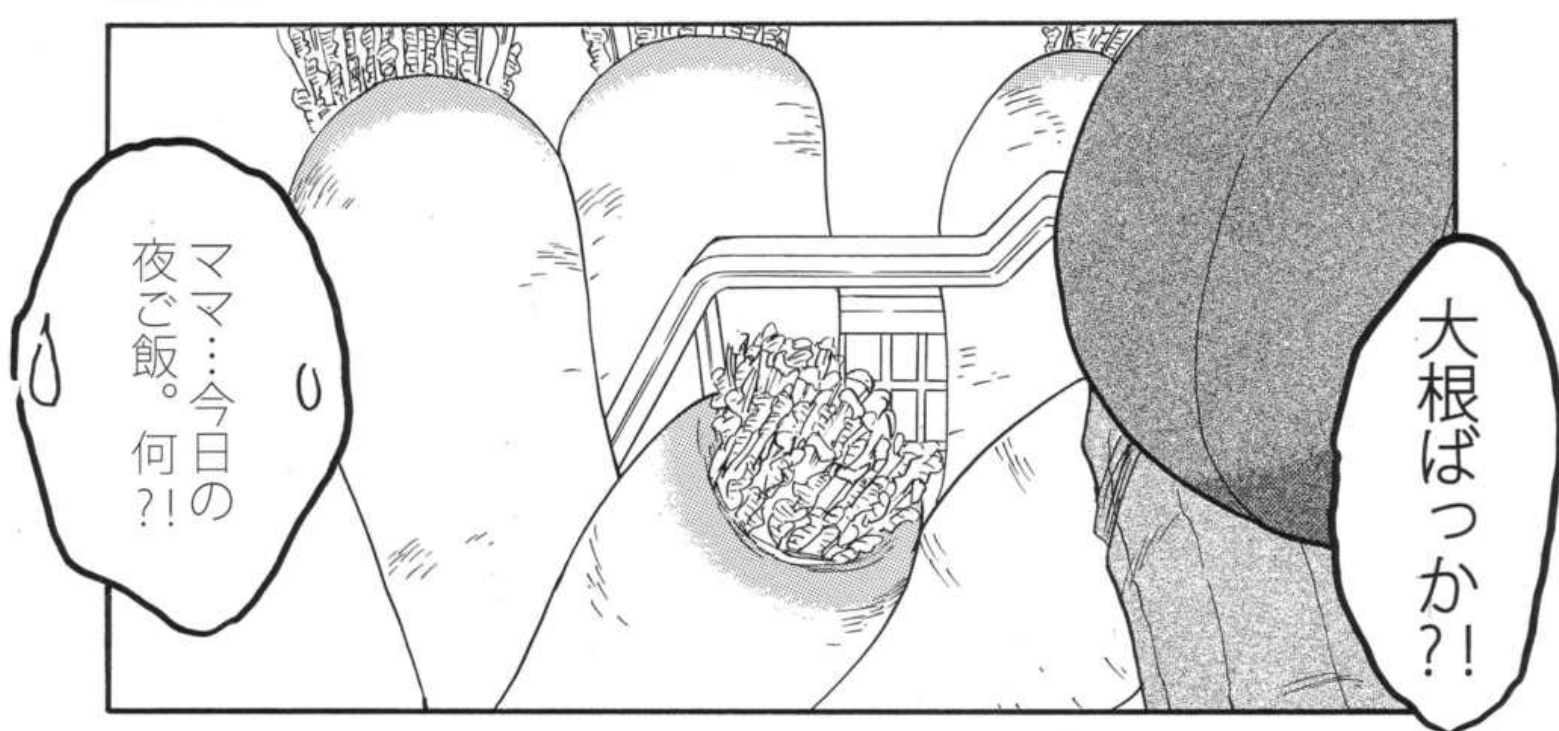
一本木楽
IPPONGI ☆ BANG!













えーと
えーと！

おでんよ！！

ダイコンは
肝だからね！
一番いいの
選んでたの！

おっでーん♡

結果！
これが一番
でした〜！！

あとは？

ユタタタ



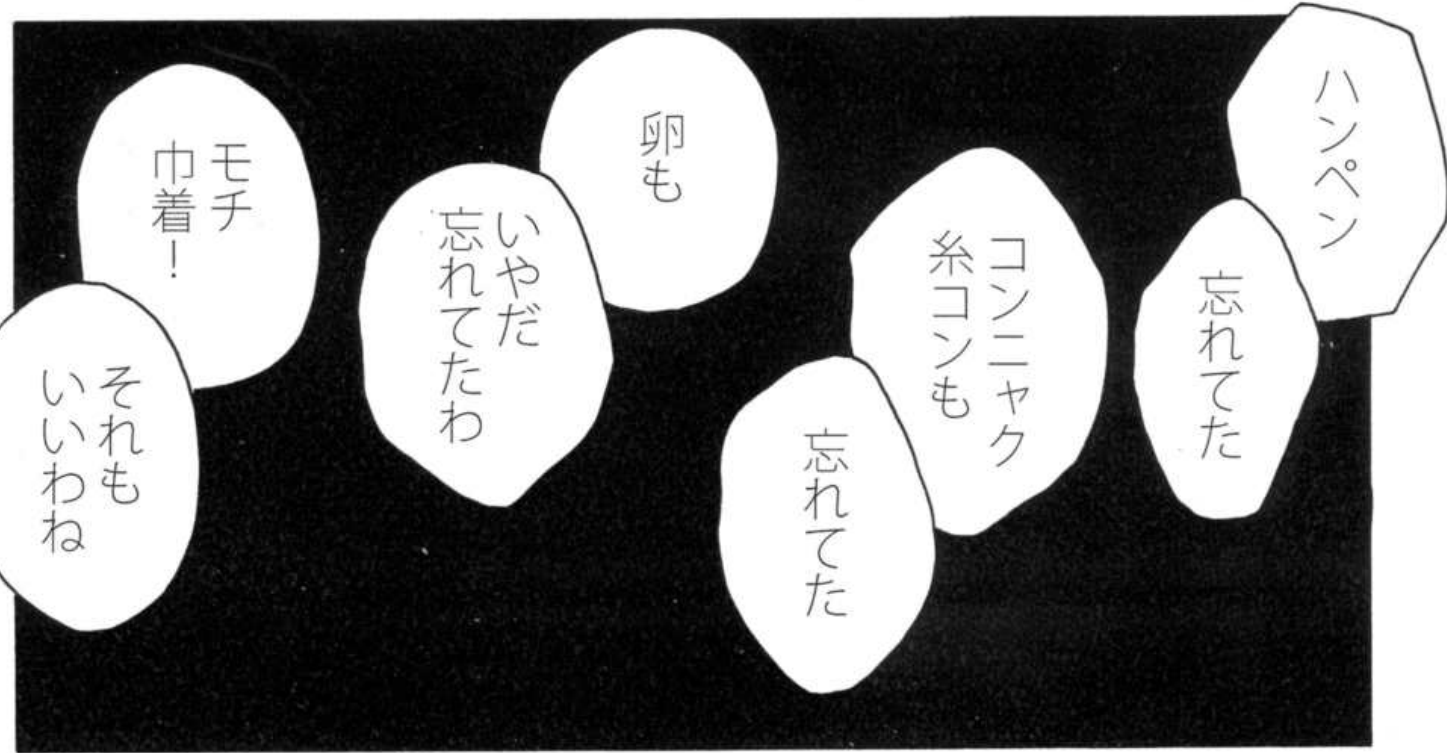
ちくわぶ

ウィンナー

ゴボ天

ユタタ

ママ、長物
ばっかり！



ハンペン

忘れてた

コンニャク
糸コンも

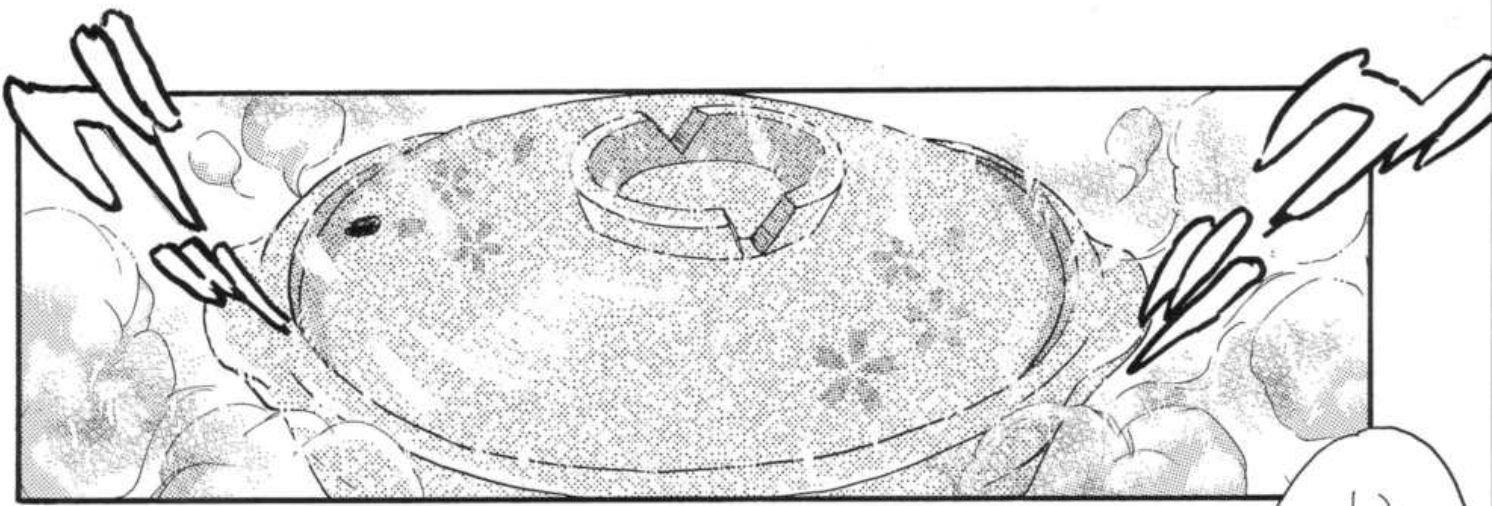
忘れてた

卵も

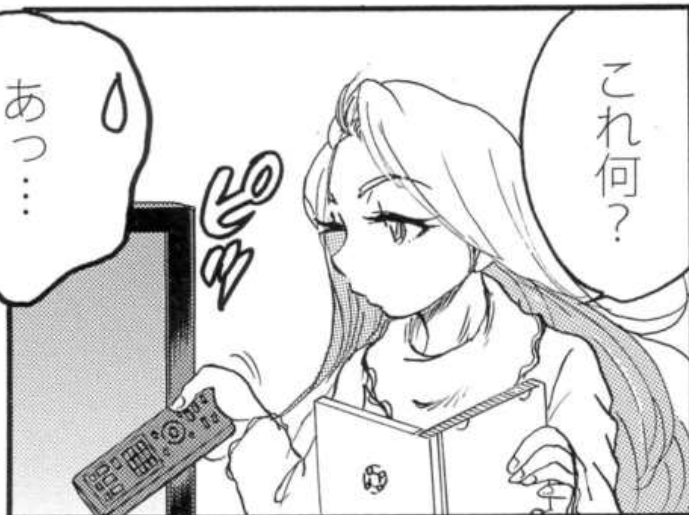
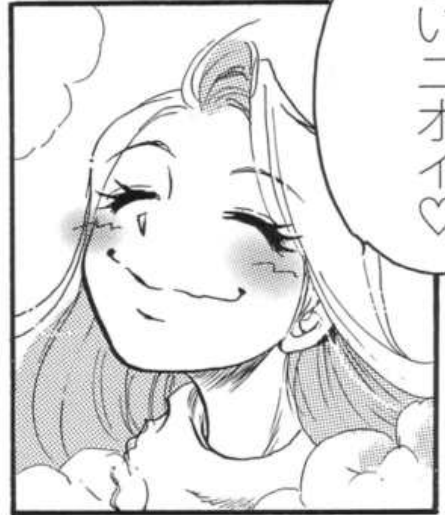
いやだ
忘れてたわ

モチ
巾着！

それも
いいわね

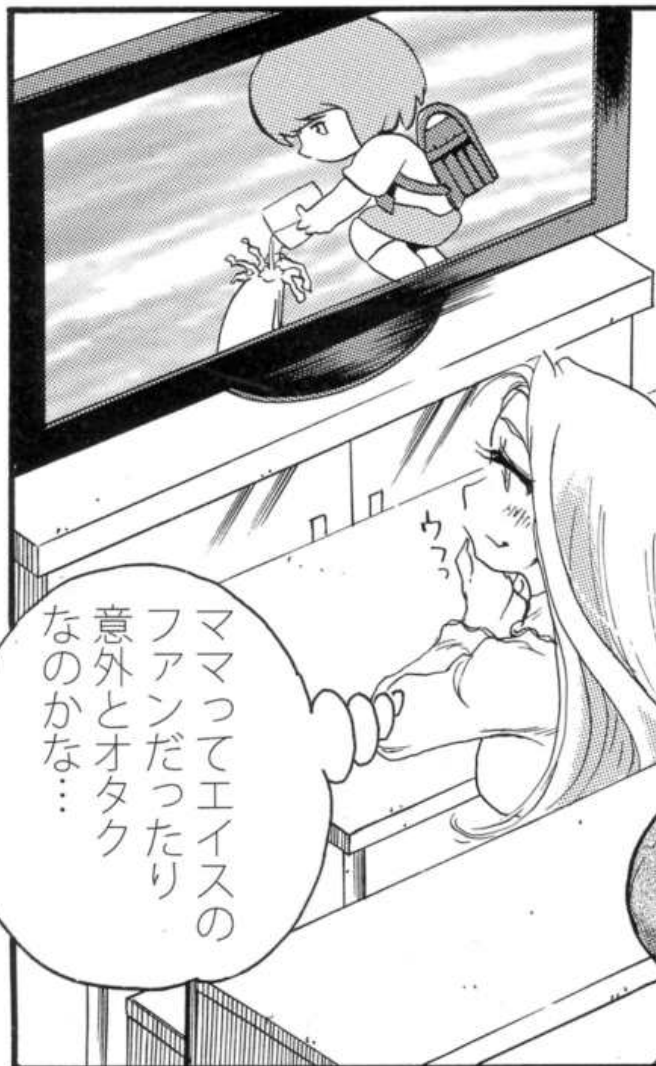


いいーオイ♡



これ何？

あっ…



ママってエイスのファンだったり意外とオタクなのかな…

それは大昔のダイコンのビデオ！

巨大なダイコンが…

もう一本のやつの方が… スツゴクイイのよ…！

へー

そっち観ちゃうとこれが物足りなくなるんだから！



by かの文ゆし

リリイ・タリカの N.U.D.E 研修♡旅行

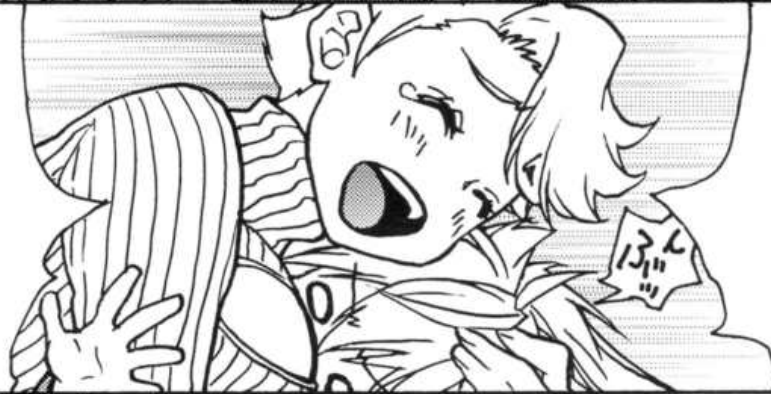
MI-Xの
新生チームだ

イギリスから
研修に来た

く聞みん
れいてな



なあ〜んて
カワイイ
チームなの!?



ようこそ
日本へ!!
大歓迎よ♡

リリイ?
リリイ?

キャー
タリカ
タリカ



おきてえ
えええ!

ごめん
ねええ!!

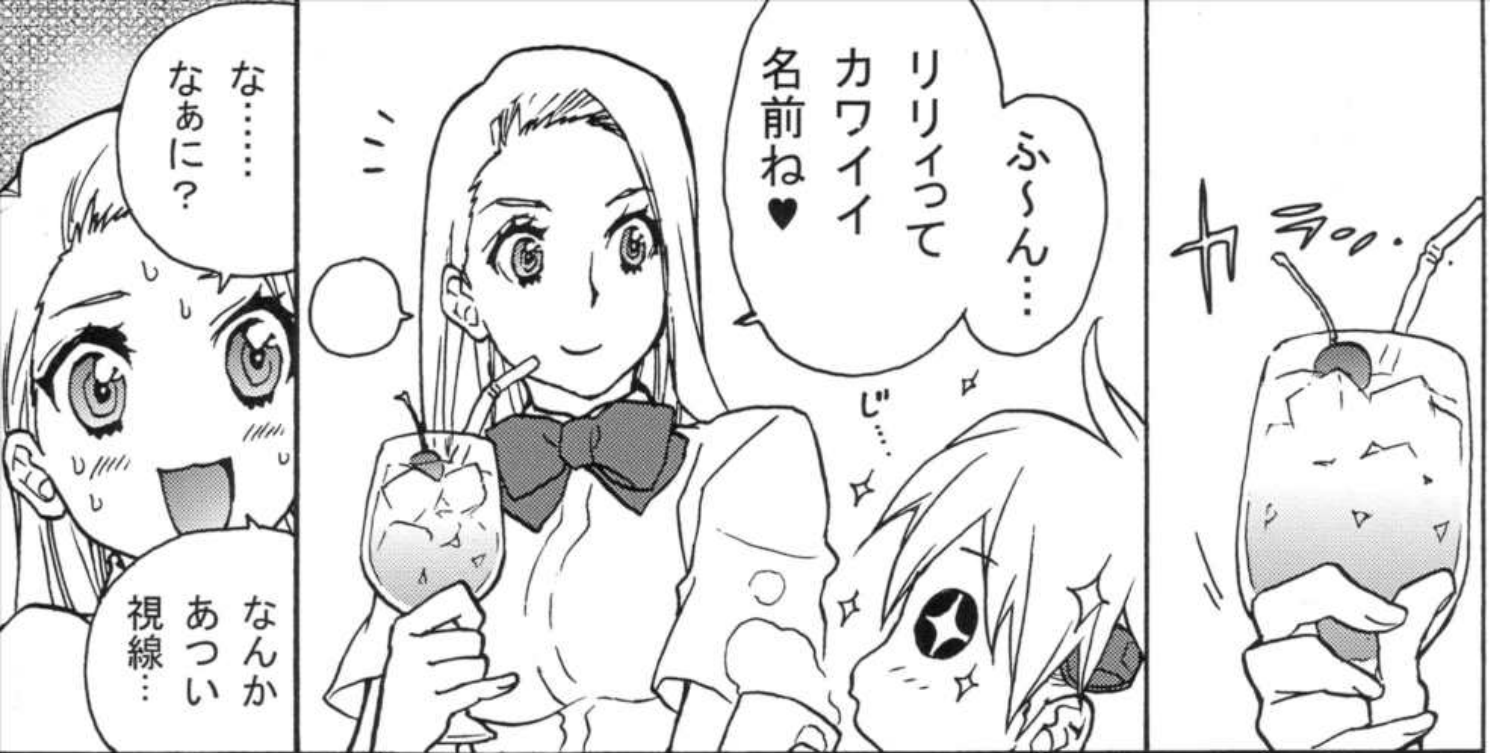


大丈夫
……?

?

ほろ
タイ...





TAMAKI'S AMAZING COSMIC WORLD

君は「ウチムス」が
幾多のヒーローコミックと作品世界を
同じくしていることをしているか!?

ミス・マーベリック

『ミス・マーベリックにはさからうな』より

シスター・ヴェロシティ

『ウチのムスメに手を出すな!』より

スターゲイザー

『STARGAZER』より

キティ・ファントム

『STARGAZER』より

リディア・ザ・クラッキーン

スピーディーワンダー

ブレインストーム

リリィ・トゥリガー

M.I.X

『リリィ・トゥリガー』より

幾多のアメコミ作品と同じく、「ウチムス」も私環望の創作した複数のヒーローコミックと同一の世界線上に存在しクロスオーバーしている。名付けて「タマキ・アメイジング・コスミック・ワールド」！（嘘。今考えた）ここではその「アメコミワールド」に住む住人達を紹介しよう！

◎ミス・マーベリック

普段は冴えない女教師、真鍋エリカ先生が高機動戦闘服アームドスキンを装着して変身するスーパーヒロイン。

実験企業都市「サエグサシティ」を超科学技術で混乱に陥れる現役「スヴィラン」「ディアブロンナ」の三人組と戦う。

アームドスキンを発明した心優しい天才科学者「ウチムス」第2話（単行本1巻収録）においてN.C.D.E.の囑託科学顧問として登場する。



特性が判明しました!!

出典はパンダイ系ウェブコミックに連載された「ミス・マーベリックにさからうな」（エモーションコミック刊、全一巻）。作画担当は「TIGER & BUNNY」でおなじみ榊原瑞紀さん。

◎スターゲイザー

その榊原さんとタッグで最初に手がけた4コマ漫画「STAR GAZER」に登場するヒーロー。エイスワンダーと比肩する能力を駆使しヒーロー界の頂点に君臨する最強の男。ただし壊滅的な程そそっかしいという弱点があり、お隣のキクエさん他、多くの市民から生暖かく見守られている。本来は宇宙を彷徨う精神生命だが、たまたま地球で目にした漫画の「友情・努力・勝利」に感動、自らもつ無限のパワーを人類の為に使うと決意。「ウチムス」7話（単行本2巻収録）にて一コマだけ、N.C.D.E.の作戦に協力する姿が描かれた。



「ミス・マーベリック」単行本のおまけとして巻末により抜き版が収録されているが全エピソードの約半分がカットされている。いつか完全版を世に出したいものである。

◎キティ・ファントム

同じく「STAR GAZER」に登場するスーパーヒロイン。

分子間のつながりを操ってあらゆる物質をすり抜ける「透過能力」を持つ。以前はその能力を悪用して怪盗まがいの騒ぎを起こすヴィランだったが、スターゲイザーの度重なる説得（説教とも言う）を受けて改心、今ではゲイザーが活動不能に陥る「魔の金曜日」にのみ彼の不在を補う為に出動するヴィジラティ・ヒロイン。その正体はゲイザーの恋人キクエさんの親友、O「のねこみちゃん」である。

◎M.I.X（エムアイエックス）

英国情報部が誇るスーパーヒーローチーム。世界有数の能力者達が結集していたが、その過酷な任務により二度に渡り壊滅。現在のメンバーは全員15歳以下の少年少女である。スーパーヴィラン・テロ組織「サクリファイ」の世界の命運をかけて戦う。

出典はパンダイ系ウェブコミックに連載された「リレイ・トゥリガー」（エモーション・コミック刊行 全2巻）。

作画担当は「ウチムス」で孤高のダークヒーロー「ポイント・ブランク」のデザインを手がけたかのえゆうしさん。

「ウチムス」本編では7話において会話の中で「パペット・マスターを逮捕した」チームとして語られている。

（なお「ウチムス」4話に登場し、クララと仲良くなる昆虫人間「ゼクトロン」は「サクリファイ」の一員で、人材交流で日本に来ている。リレイ単行本2巻にて彼の活躍する姿を観る事が出来る。リレイ（コードネーム・トゥリガー）あらゆるヒーローの能力を模倣する「コピー能力」の持ち主。しかもコピーされた力はオリジナル能力者のそれを遥かに凌駕する。「サクリファイ」によって人間兵器として育てられたため、感情といったものを一切持っていないが、仲間達と行動をとるにすることで人間性を取り戻す。

○リディア（コードネーム・クラックイーン）特殊な生体エネルギーによってありとあらゆる電子機器を自在に操り、いかなるシステムにも侵入する最強のクラッカー少女。チーム最年長だが、双児の兄を作戦中に失い、その原因がリレイにあったため、彼女に複雑な感情を抱いていた。「ウチムス」4話でアテナのサイト「ヒーロー知恵袋」にお悩み相談している「電撃少女」とは彼女である。

他のメンバーが皆「下手の子供ばかり」

「特に一人すごく性格の悪いのがいて」

ムメイトについて悩んでる

ローチームに所属しているメンバーが皆下手の子供ばかり。一人すごく性格の悪いのがいて。私もいつかは私の兄が死ぬ原因をみても仲良くなれる要素があり

マダムB、私はどうしたらいいでしょう。

イギリス 電撃少女 さんよりの相談です。

「私が死ぬ原因を作ったりとどーみても仲良くなれる要素がありません」

「マダムB 私はどうしたらいいでしょう」

イギリス 電撃少女

○ケント（コードネーム・スピーディーワンダー）超高速で縦横無尽に飛行、走行する少年ヒーロー。気取り屋で自信過剰気味のボウヤだったが、戦いの中で成長し、リレイを支える。

○ブレインストーム（本名不詳）生まれながらに脊髄に損傷を持つため車椅子から立つ事が出来ないが、その天才的頭脳が生み出す「超演繹能力」すなわち超推理により、悪の陰謀を暴き作戦を立案するチームの頭脳。戦闘の際にも「人型戦闘用車椅子」に乗り込み、肉弾戦を展開する。

星を見るひと

Gemma



JR中野駅北口を出て正面、中野サンモールをまっすぐ進み、ブロードウェイに入る手前を右に折れる。細い道なりに少し歩くとT字路に突き当たり、狭いが活気のある商店街が左右に伸びている。この商店街を早稲田通り側へ少し進んだ右手に、星生花店はある。店構えは小さいが清潔で、いつ訪れても季節の花が品良く店頭を飾り、通行人の目を楽しませる、地域に愛される花屋だ。

その星生花店の店主、星ジョナサンは目下悩んでいた。

このところ、店の売り上げが思わしくない。

客足が鈍っているとは思わない。今日び、花屋というのは決して引きも切らずに客が来るような商売ではないが、それでも星生花店には常連もいれば、数日に一人は新規の来店者も必ずある。そうしたお客様の来るペースはここ数ヶ月大きく変わっていない。やって来たお客様が買いたい物をしてくれるかどうかやその購入額、要するに客単価も特に減ってはいない。少なくとも、自分が店に立っている間は、にもかかわらず、売り上げが減っている。何を見落としているのか、ジョナサンにはまったく見当もつかない。

とにかく、店の魅力を上げていくしかない。店頭のディスプレイが悪いのだろうか。先週から、花の名前と簡単な育て方だけでなく、花言葉もカードにして鉢に添えているが、あれがうるさかったらどうか？ 店に来る女の子には好評だったのだが。いやそれとも、温室の照明を昼光色系から白に変えたのが冷たい印象になってしまったらどうか。あるいは……

ジョナサンの思考はそこで止まった。帳簿とペンを置いて椅子から腰を浮かし、耳を澄ませる。

かすかな、ほんのかすかな叫び声と、サイレンの音。人間の耳には決して聞き取れるはずのない、遠い遠いどこかの誰かの声。

だが彼には聞こえる。彼が、星ジョナサンが、助けを求める声を聞き逃すことなどあり得ない。そして、その声に応えないということも。

椅子をはねのけて立ち上がり、シャツを引きちぎるように脱ぎ捨てる。聞こえた声の感じからして、一刻の猶予もない。ズボンのポケットからマスクを取り出すと、ズボンも脱いで放り出す。裏口のドアを静かに開け、人目がないことを一瞬だけ確かめると、ジョナサンは空の彼方を睨んで腹の底に力を込める。次の瞬間、彼は青白い一条の閃光となり、天へと駆け上っていく。

猪瀬カツ代（58歳・主婦）は、真っ赤に燃える円盤型の何かが自分に向けて降ってくるのを、まるでスローモーション映像を眺めるような引き延ばされた視覚で見つめていた。その円盤型のは爆発で吹き飛んだホイールキャップで、燃えているのはガンリンをたっぷり浴びていたせいだが、彼女にはそんなことはわからない。ただ、あれに当たれば死ぬな、という奇妙に冷めた他人事のような思考だけがあった。

その思考が全身に染みわたり、恐怖へと変わるほんの少し前に、稲妻のように伸びてきた手が横合いからホイールキャップを捕まえた。

「アチっ。大丈夫ですか、ご婦人」

明るい青の瞳に見下ろされ、金色の髪が風に煽られて揺れる。マスクに覆われたその笑顔を見て、猪瀬カツ代はようやく理解した。ここは高速道路で、さっきまで二台前を走っていたタンクローリーが横転して爆発したのだということ。そして、自分はずっと今死ぬところを彼に救われたのだということ。一人ですぐ歩けますか？ そう、ガードレールの向こうまで下がって下さい。じきに救急ヘリも来る

でしよう」

今頃になって震えだした膝を何とかなだめて、猪瀬カツ代は何度も頭を下げながら歩道まで駆け戻る。見れば他にも巻き込まれて横転したり、立ち往生したりした車が多数あり、それらに乗っていたらしい人がすでに道路脇の土手の上に待避していて、カツ代を引っぱり上げてくれた。それを見届けて彼はもう一度微笑んでから向き直る。真紅のマントがひるがえり、スーツに染め抜かれた黄金色の流星が鮮やかに目を射る。彼が来たからにはもう大丈夫だ。

そう、世界最強のヒーロー、スターゲイザーが来てくれたからには。

炎の塊と化したタンクローリーへ、スターゲイザーは何のためらいもなく突っ込み、誰かを抱えて飛び出してくる。タンクローリーの運転手らしい。遠目にも全身真っ赤に焼けただれいるとわかる運転手を抱えたまま、スターゲイザーは流星のように飛び去っていく。おそらく最寄りの病院へ向かったのだろう。一分もたたずに戻ってきた時には、両手で巨大なダンブカーを頭上に支えていた。そのダンブカーを、炎を上げるタンクローリーの上空でゆっくり傾けると、荷台から滝のように水が降り注いで炎を消していく。

「すぐそこに工事現場があつてね。快く貸してもらえてよかつたよ」

カツ代とその他の見物人に向かって、スターゲイザーは笑顔を見せる。わざとらしくに爽やかなのに嫌味がないのは、彼が本当に善良な人間だとわかるからだ。心から、愚直なほどに善良であることを、彼はその姿で体現している。

ダンブ二往復分の水で炎が完全に消えると、まるで積み木でも片付けるようにタンクローリーを道路の脇へ寄せ、転倒した車を起こし、中にいた人々を助け出す。その頃になってようやく、救急と報道のヘリのローター音が聞こえてきた。

誰からともなく、土手の人だから拍手が上がると、最後の車から家族連れを助け出すと、スターゲイザーはもう一度爽やかに微笑み、ふわりと宙へ舞い上がった。彼が再び閃光となって飛び去る寸前、たった今助け出されたばかりの子供が、スズだらけの指をさして叫んだ。その場にいた誰もが気づいていながら、口に出さなかったことを。

「あのお兄ちゃん、靴はき忘れてる！」

星生花店へ帰ってくると、菊笑が出迎えてくれた。

「おかえりなさい、ジョナサン」

マスクを脱ぎ、スターゲイザーから星ジョナサンに戻る。かつて、ヒーローになりたてだった頃はこの瞬間、何とも言えない不安定な気分になったものだが、彼女がいる今は逆に我が家に戻ってきたような安心感を覚える。

「すまない、緊急だったものでね。声をかけるヒマがなかった」

西藤菊笑。星生花店の隣にある「サイトー金物」の一人娘で、星生花店の頼もしい助っ人であり、ジョナサンの愛する女性であり、そしてスターゲイザーのパートナー、ゲイザーガールでもある。

菊笑の淹れてくれたローズヒップティーを飲み干す。少し困ったような笑顔が足下の方をチラチラ見ているので、ジョナサンはようやく、ブーツを履き忘れていたまま出動していたことに気がついた。

「どうりで足がスースーすると思った」ジョナサンは額を叩く。「このところ治まったと思っていたのに、やっぱり菊笑さんがいないと駄目だなあ」

「気にしないの、ジョナサン」菊笑がくすくすと笑う。「お仕事はちゃんとやっただけですもの、誰にも恥ずかしがることなんかはないわよ」

元通りのシャツとズボンに着替え、事務机に座る。

帳簿の前にすると先ほどの悩みが蘇ってきて、また深々とため息をつくジョナサン。その背中を見つめて、西藤菊笑は考える。

彼の目下の悩みを、菊笑は知っている。実のところ、その原因もわかっている。

ジョナサンには数限りない美点と、ほんのわずかな欠点がある。と、菊笑は思う。そのわずかな欠点の第一は、彼がたいへんな粗忽者であることだ。ジョナサンはいまだに、自分の正体が商店街のほとんどの人にバレていることも、自分がスターゲイザーとして出動している間に近所の有志が集まって、代わりに花屋を切り盛りしていることにも気づいていない。

はず向かいの豆腐屋の権太郎さんが、先月から腰を痛めて寝込んでいます。彼こそは星生花店のもう一人の店長と言っても過言でない人物であり、その彼が寝込んでいるせいで、ジョナサン不在中の店がうまく回らないのだ。売り上げが落ちているのはそのせいである。

だがそのことを教えれば、せつかく秘密にしている正体が実は秘密でも何でもないとということ、彼に知らせることになってしまう。そんな残酷なことは菊笑にはできない。

「あのね、ジョナサン」迷ったすえ、菊笑はおずおずと切り出した。

「わたしね、しばらくゲイザーガールをやめて、お店のお手伝いに専念したいと思うんだけど」

ジョナサンが振り向く。しばらく呆然と菊笑を見つめてから、不安げに立ち上がった。「もしかしして君を、危険な目に遭わせていただろうか」

「そんなことはない」菊笑は慌てて首を振る。

ゲイザーガールなどと名乗ってはいるが、菊笑自身は何の超能力もないただの平凡な娘である。ジョナサンが作ってくれたコスチュームのおかげで、空を飛んだり少しばかりの怪力を発揮したりはできる

が、戦いにおいて大して役立っているわけではない。それならば、今は銃後で彼を支えるのも、パートナーの大切な役割のはずだ。

「ほら、あなたがいない間も、誰かがこのお店をやらなきゃいけないし。そっちのお手伝いも必要だと思おうよ」

「そうか、その通りだな。どうして今まで気づかなかったんだらう。売り上げが落ちたのはそのせいかな。君は今までも、ずっと僕を助けてくれていたんだね」

今初めて気づいたようにジョナサンが顎をさする。こういう所がこの人は本当に可愛いと思う。

「すまない、菊笑さん。それじゃあ僕がいない間、この店をよろしく頼む」

にこやかにうなずきつつも、菊笑には一抹の不安があった。

私が一緒に行かないで、ジョナサンのうっかりは大丈夫かしら。

結論から言うと、菊笑の危惧は当たった。

翌日の早朝、獣人ブレデタークイーンを退治に向かったスターゲイザーは、派手に寝癖のついたままの頭で出動し、子供ばかりか当のクイーンにまで笑われた。その翌週、奥多摩で銀行強盗を捕まえた時はタイツの下に下着をはき忘れ、一緒に戦ったサージェント・キャンディに大目玉を食った。宇宙の兵器商人リピングアーセナルと戦った時にはマントの丈を詰めるのを忘れたせいで、戦闘中に裾を踏んで派手に転倒し、エイズワンダー（最近復活した方）の形のいい胸の谷間に突っ込んでしまっただけで、真っ赤になった彼女から全力でぶん殴られた。スターゲイザーが不死身でなかったら死んでいたかもしれない。身だしなみの問題だけならまだ大した害はないのだが、荒川区の怪人騒ぎを解決に向かった時には、

ゴミが人の姿をとった異形のヒーロー・ガビー・ガイを、怪人と早合点して叩きのめしてしまうという大失態を演じた。幸い彼は優しい心根と再生能力の持ち主で、平謝りに謝ったら快く許してくれたが、一歩間違えば大惨事になっていたところだ。

その翌日には逆に、電波人間アウトキャストのニセ報道に騙されて、再びエイズワンダーと取っ組み合いを演じた挙げ句、彼女の股間に顔面を突っ込んでしまった。この件でエイズワンダーからは完全にセクハラ男認定され、スポーツ紙にまで「スターゲイザーのラッキースケベ」等と報道される始末である。

「もう自分が信用できない……」

頭を抱えるジョナサンの背中を、菊笑はやさしく撫でてくれた。彼女の笑顔と無言が、今のジョナサンの何よりの癒しである。また間の悪いことに、ミスをやる現場に限って声の大きい野次馬がいるのだ。「僕は本当にヒーローにふさわしいんだろうか」「当たり前じゃない！ 少しくらいドジだって、あなたは多くの人を救っているのよ」

「君も僕のことをドジだと思っていたんだね……」

「もう！」菊笑は嘆息すると、横に置いた紙袋の身を事務机にどさりと乗せた。「ほら、これでも読んで元氣出して。今週の『少年パーティーゴ』『少年タークホース』買ってきましたよ。あと今月の『少女リアウインド』も」

ジョナサンの目がたちまち輝く。漫画こそは、彼の唯一にして最大の趣味である。否、「星ジョナサン」としての彼の生みの親であるとすら言える。

彼は地球人ではない。人間ですらない。そもそもその始まりは、肉体を持たないアストラル生命体である彼が、星々をめぐる旅の途中でたまたまこの地球に立ち寄った時。右も左も分からぬ地で、たまたま手に取ったのが一冊の少年漫画雑誌だった。

その衝撃は計り知れなかった。友情、努力、勝利、

正義、恋、勇気。彼が夢想だにしたことのなかった概念、文化、精神がそこにあった。一瞬で日本の漫画文化の虜になった彼は、必死に地球の文化を学び、自らを変化させて地球人式の肉体を作り出し、「星ジョナサン」という名前も自分でつけて、ここ東京都は中野区の住人となり、そして学んだばかりのすばらしい事柄を実地に活かすために、ヒーローとして活動することにしたのである。その後の地球が数々の侵略者、異星人、魔族の手から守られて無事を保てたのは、実にただ一冊の『週刊少年パーティーゴ』のおかげとも言えるのだ。

菊笑がそつと部屋を出たのも気づかず、夢中になつてジョナサンはページをめくる。今週もヒーロー達の戦いがそこにあつた。何度敗れても、失敗しても、決して諦めず、最後には必ず勝利する不屈のヒーロー達。そうだ、ヒーローとはこうでなくてはならない。一度や二度の失敗でくじけてはいけないのだ。萎えかけた氣力がみるみる盛り返すのをジョナサンは感じた。今日失敗した分、明日はもつと頑張ろう。明日失敗したら、明後日はさらに頑張ればいいのだ。

「この私の地元で、随分と大胆なことを企んでくれたものだな、インブローダー！」

ヒビだらけのゴグルの下で、狂気をはらんだ目が細められる。「何度も言っているように、私が場所を選ぶのではない。場所が私を選ぶのだ。芸術とはそういうものだ」

中野駅からほど近く、四季の森公園に隣接して建つ帝京平成大学中野校の講義室の一つ。スキンヘッドの頭部以外、全身をタイルのような長方形の金属板で覆った異様な男がスターゲイザーと対峙していた。

「何度も言っているように、ビルを勝手に爆破するのは芸術とは言わない。まして、まだ人のいるビルではな」

インブローダーは爆発物のエキスパートであり、建物を中の人間ごと爆破解体することに情熱を燃やす狂人である。彼自身は特に超能力などを持たない、いわゆる古式のヴィランだが、厄介なのは彼が自ら設計した多種多様な爆弾だ。中でも「デイクペンデン・ペイビー（甘えん坊）」と呼ばれるタイプは、インブローダー自身から一定以上離れると自動的に起爆するようになっており、「これを仕掛けられる」という、一般市民を好んで巻き込むテロリスト型ヴィランを相手にする時の共通セオリーが使えない。

今回も地元の警察・機動隊と協力しつつ、学生達の避難が済んだフロアだけを使って戦うという、慎重な戦いを強いられることになった。スターゲイザーにとっては苦手なタイプの敵だが、ヒーローが悪を選び好みなどできない。彼の全身を覆うタイル：攻撃を加えるたびに爆発し、装着者の受ける衝撃を軽減すると同時にこちらにダメージを与えてくる特製の爆発反応装甲……に手を焼き、校舎の壁と床に何力所か穴を開けつつも、着実に敵と爆弾を無力化していく。追い詰められたインブローダーが最後のあがきで大型爆弾を使うのを見越して、スターゲイザーは廊下の壁をぶち抜いて窓の広い講義室へ追い込んだ。

講義室の隅には青ざめた顔の学生が数名、寄り添うように固まって震えていた。

頭が真っ白になった。「ペーイ」というわざとらしい電子音声がかえり、それがインブローダーが使う逃走用の広範囲爆弾の起動音だとわかったが、体が咄嗟に動かない。

視界の横から、さっきまで無線で会話していた機動隊員が飛び出してきて、学生達を押し倒して覆い

被さった。その直後、爆風と煙と炎で何も見えなくなった。

「四階から上は避難完了と、確かに聞いたと思っただ……」

土気色の顔をして、譚言のように繰り返すジョンナサンに、今度は菊笑がかけられる言葉はあまりにも少なかった。

結局、今回の事件で死者は出なかった。インブローダーは爆発のすぐ後に捕えられ、学生達も軽傷ですんだ。だがそれはスターゲイザーではなく、あの機動隊員のおかげだ。彼は一命を取り留めたものの、背中一面に重度の火傷を負い、今も入院中だ。

（あのスターゲイザーを手助けしたなんて、妻や子供達に自慢ができますよ）

再生ジェルガーゼに全身を覆われ、まだ枕から顔を上げることができない彼は、見舞いに行ったスターゲイザーに、それでも弱々しく笑ってくれた。

『五階から上は避難完了』というアナウンスなら確かにしたと、現場の通信担当者も、爆発物処理チームも証言した。四階はまだ避難誘導の途中で、あの学生達以外にも複数の民間人がいた。

（ああいうギリギリの状況でしたから、聞き間違いもあるでしょう。次から注意してくれば）

爆発物処理チームの責任者は、そう言っ苦笑いをした。

（命が助かっただけで十分です。本当にありがとうございました）

ある学生の母親は、涙を流しながら深々と頭を下げた。

ミスくらい、我々がフオローしようじやないか。誰も彼を責めなかった。ただ一人、彼自身を除いては。

「疲れているのよ、ジョンナサン。このところ、特に忙しかったもの」

「それを言い訳にはいけないんだ、菊笑さん。僕はヒーローなのだから。諦めることと、手を抜くことだけは、ヒーローはしてはいけないんだ」

ジョンナサンは青ざめた顔を上げる。机の上には、ポロボロになるまで読み込まれた『週刊少年パーティゴ』があった。

「でも……僕には本当に、ヒーローの資格なんてあるんだろうか」

それからスターゲイザーは出勤し続けた。悪人を退治し、事故から人々を救い、世界の破滅を防いだ。

だが、彼の様子がそれまでと違うことに、やがて誰もが気づいた。

危険物を見落としていないか。避難が遅れている一般人はいないか。何かもつと別の、見逃していることはないか。「自分がまだ気づいていない何か」を彼は常に、執拗なほどに気にするようになった。

もちろん、注意力というのは持って生まれた性格に左右される所も大きい。自覚したからといってすぐに改善はされない。彼の変化は注意深くなったというよりは、不注意に臆病になったという方が正しい。ミスは減りはしてもなくなりはず、ミスを意識しすぎた結果、かえって普段ならしないようなミスをすることさえあった。

「最近のスターゲイザーは生彩を欠く。どうしてしまったんだろう」

「なんだか及び腰になったように見える」

そんな声が、ニュース上でも、現場でも囁かれるようになった。そんな評価を聞くたびに彼の焦りは大きくなり、焦りはさらなるミスを生んだ。彼の不

安はぬぐい去られることなく、じわじわとふくれ上がり続けた。

一台の観光バスが、東京湾アクアラインを走行中、居眠り運転で側壁を突き破り、きわどい所で道路に引っかかって転落を免れた。駆けつけたスターゲイザーはたやすくバスを押し戻し、乗客が口々に感謝を述べ、握手を求めのこたえた。救助手順はこれでよかったか、バスは本当に安全か、忘れていただけでどこかに危機に陥っている人がいないか、ずっと頭の隅で考えながら。

上の空のスターゲイザーは気づかなかった。何人目かに握手をした少女が、バッグから注射器を取り出し、握手したままの彼の腕に突き立てるまで気づかなかった。

突如、全身に激痛が走り、スターゲイザーはもんどり打って後頭部から地面に倒れた。痛みがあまりに激烈すぎて、その発信源が右手であるということさえ、気づくのにしばらくかかった。

痛みだけではない。冷たくて酸っぱい、吐き気に似た感覚が、右手首からじわじわと腕を這い上ってくる。人間には決して理解できない、アストラル体にか感じ取れないこの感覚。この感覚をスターゲイザーは知っている。

「ドロロゲンよ。もちろん知っているわよね、生理学的に？」

かすむ目をどうにか上に向けると、先ほどの少女が笑顔で見下ろしていた。少女はバッグから取り出した白衣をバサリと広げ、マントのように肩にはおる。あどけなさの残る顔立ちと、冷たく湿ったトカゲのような表情がひどくアンバランスに見えた。

「この顔で会うのは初めてになるわね。私はドクトレス、お久しぶり。歴史的ね」

その名前と、妙な口癖には覚えがある。かつて、ブラザーフッド・オブ・イビル・サヴァンツというマッドサイエンティストの集団を倒した時に、幹部

リストの中にあつた名前だ。確か、こんなに若い女性ではなかつたはずだ。

「加齢は女の敵だもの。敵は克服してこそよ、老年医学でしよう？」スターゲイザーの思考を見透かしたようにドクトレスは微笑む。「貴方の方はお変わりなくて？ 弱点まで変わっていないなんて、進歩がなくて安心したわ。進化学的に」

ドロロゲン。「苦痛素」とも呼ばれ、人間が苦痛を感じる時に脳内で作られる神経伝達物質の一種。スターゲイザーの無敵の肉体にとつての、ただひとつの弱点である。本質がアストラル体、すなわちなかなば精神的存在であるスターゲイザーにとつて、苦痛を意味する物質は肉体的存在である人間よりもはるかに大きな効果を及ぼすのだ。

彼の弱点がドロロゲンであることはもちろん秘密にしているが、幾人かのヴィランには知られてしまつている。今までも何度か、ヴィランにドロロゲンを使われてピンチに陥つたことはあるが、注射ほどの微量でここまで苦しめられたのは初めてだ。いやそもそも、本来なら彼の肉体にそこらの注射針などが刺さるはずはないのだ。

自分のせいだ。痛みと吐き気で朦朧とし始めた意識の中で、スターゲイザーは再び自分を責めた。意識が散漫で、不安定になつていたが故に、肉体の強度までが不十分になり、微量のドロロゲンでもこれほどの影響を受けてしまった。

左手で右手首を握りしめ、涙をにじませて這いつくばるスターゲイザーをドクトレスはしばし冷静に見下ろしていたが、やがておもむろに口を開いた。

「ねえ、ドロロゲンって貴方の精神状態がネガティブになるほど効果を増すのよね。大脳生理学的に。だったら教えておくけど、貴方最近、うっかりミスが多くなかつた？ というより、ミスを指摘されることが増えてなかつた？」

スターゲイザーは応えない。激痛をこらえるのが

精一杯で、返事をする余裕などないのだ。構わずにドクトレスは続ける。

「あれ、全部私よ」

一瞬、痛みも忘れてスターゲイザーはドクトレスを見上げた。トカゲの瞳が、眼鏡の奥で笑つている。

「ドジを踏むたび誰かが大声を上げたでしょ？ あれ、私の仕込んだサクラ。インブロージョンがあのチャチな学校を襲つたのも、もちろん私がやらせたの。変な放送があつたせいで、避難済みの階を一階間違えたでしょう。あれも私」

激痛でバラバラにちぎれてしまふような腕を伸ばして、ドクトレスを捕まえようとした。その手を蹴飛ばして、ドクトレスはまた笑う。

「貴方は一ヶ月前からずっと、私の掌の上で転がされていたの。世界最強のヒーローが聞いて呆れるわ。ねえ、スターゲイザー？ 馬鹿はいくら頑張つても馬鹿のままなのよ。絶望した？ それじゃあもうしばらく、そこで転げ回つていて。私、前からやつてみたい実験があつて、貴方に邪魔されたくないのよ。社会的なね」

それだけ言うどドクトレスは白衣の裾を翻して去つていった。バスの乗客達……ドクトレスの部下だろうか……が後に続く。遠くからかすかに、救急車のサイレンの音が近づいてきていたが、スターゲイザーの耳には聞こえていなかった。

絶望していたからではない。

自分を責めていたからでもない。

この一ヶ月の出来事すべてが、ドクトレスの企みだつた？

あの大学の事故も？

怯えていた学生達も、大怪我をした機動隊員も。すべてはただ、スターゲイザーを陥れるために。

ただそれだけのために、彼らはあんな目に遭わされた？

ドクトレスは一つ思い違いをしていた。どれほどドジで、粗忽であつても、スターゲイザーは本物のヒーローである。

友情も、努力も、勝利も、『週刊少年バードイゴ』も、何も関係ない。

ヒーローが心の底から怒りに燃え上がるのはいつだって、たつた一つの場合だけだ。無力な人々の幸せが、踏みにじられるのを目にした時だ。

府中超人刑務所は大混乱に陥つていた。

日本最高のセキュリティを誇るシステムが何者かにハッキングされ、警備網が一時的に無力化したのだ。すぐに復旧したとはいえ、第一級の超人犯罪者が大勢収容されていることで名高い府中刑務所である。限りなく貴重な十数分の間に、最も凶悪なヴィラン数十名が脱走を果たしていた。刑務所長は即座に、連絡可能なすべてのヒーローに支援を要請した。

「タラッタッター、ター、ターー♪」

「うるっさいわね、もう！」

ハイボルテージの繰り出すプラズマ球を、エイスワンダーは矢継ぎ早に払い落とす。電気の球ごととき、何発食らおうとエイスワンダーの肉体はびくともしないが、スーツは別だ。すでに青年誌のグラビアだつて飾れそうな格好になつてしまつている現状、あと一発だつてあれを食らうわけにはいかない。

超人テロ組織「サクリアイス」の戦士だか何だか知らないが、今時裸ジャケットにアフロヘア、サングラスに葉巻などという時代錯誤なおっさんにやられたとあつては天駆ける最強天使の名がすたる。

「ラッタ、ター♪」

「ダサイのよ、あんた！」

「どけ、小娘。マッスルロックはお前に用がない」
「あたしだってあなたに用なんかないわよ、この脳筋。アンタが大人しく檻の中に戻りさえすればね」

マッスルロックの丸太のような腕をかわし、蹴りを叩き込む。鉄製のピンヒールの痕すらついていない胸板を見て、キティファントムは舌打ちをした。今日は金曜ではないが、肝心のスターゲイザーがどこで油を売ってるのかいまだに現れない状況では、彼女が出動するしかない。

「マッスルロックは大首領さまの元へ戻る。邪魔をするな」

こいつの攻撃を一発でも食らったら命に関わる。身軽さと手数で勝負するのが持ち味の彼女としては、いささか相性の悪い相手に当たってしまったものだ。「ああもう、何やってるのよアイツは！」

春川椎子、またの名をマッシブガールは困惑していた。NUDE所属のヒロインの中でも、筋力だけなら並ぶ者のないこの自分が、力で押されている？ 見えない腕がマッシブガールの肩を押さえつける。目の前の黒髪の少女が、うつろな笑いを浮かべる。

「他人の能力を増幅して逆用する」という特性以外、素性も本名も、能力の正体すら不明な謎のウィラン・ファイアリングハンマー。イギリス情報部の切り札「トゥリガー」のクローンとして生み出されたと噂で聞いたが、なるほど恐るべき力だ。

「……ってことは何？ イギリスはこんなのをあと一人抱えてんの？ おっかないわあ」

肩を締め上げる力がますます強くなる。力を込めれば込めるほど、それに倍する力で押し返される。まるでマッシブガール自身の筋肉が、この少女に従って反乱を起こしているかのようだ。足下のコンクリートがめりこみ始め、治ったばかりの脇腹の傷が、また痛み出すのを感じた。

首筋を狙って繰り出された鋭い蹴りを見切り、ブーツを掴んで路面に叩きつける。土煙と共にアスファルトの破片が飛び散ったが、その中心から何事もなかったかのように立ち上がるミスター・マーベリックを見て、遥アテナはため息をついた。旧型とはいえ、相変わらずこのアームドスキンというやつは手強い。ミス・マーベリックももう少しちゃんと管理しておいてほしいものだ。

ちらりと左右を見渡す。向こうではサージェント・キャンデイが重油人類ベトロールメンに絡まれて苦戦している。西の方ではザ・ゲイシャが、何とかいう昆虫人間とその配下を相手に立ち回っているのが見える。そのさらに向こうには、クララがいるはずだ。

「アテナ、手エ空いてる？ スターフェアリーのフオローに回ってほしいんだけど」

「空いてるわけないでしょ！ こっちが加勢欲しいくらいよ」

襟元の通信機に怒鳴りながら、目に力をこめてワンドービジョンを叩き込む。だがミスター・マーベリックは掌から黒い霧を噴き出して、たちまち熱線を吸収してしまった。まだ野放しになっているウィランが大勢いる。一人にかかずらっている場合ではないのに。

その時、突風のようなものがアテナの眼前を通り過ぎた。

一瞬呆然としてから、慌てて風の去った方を見る。そこには彼がいた。

風を受けて翻る真紅のケープ。たくましい胸を斜めに横切る黄金色の流星。手の甲にきらめくステラ・コアギュラム。
「遅れてすまなかった。大変なことになっているようだね」
「……スターゲイザー。あなた、その腕！」

片腕には、さっきまでアテナが戦っていたミスター・マーベリックを抱えている。びくりとも動かないところを見ると、たった今通り過ぎた一撃で失神させられたらしい。そして、もう片方の腕。アテナの視線はそこに吸い寄せられた。

スターゲイザーの右腕は、付け根から無くなっていた。肩口がばつくりと、パンをちぎった後のようなささくれだった断面になっており、そこから血液のような、光のような、青白いものがかすかなシューシューという音を立てて飛び散っている。

「ちよつとドジを踏んでしまったね。毒が全身に回るのを防ぐために、腕をもぎ取らなくてはいけない。マスク越しにもスターゲイザーの頬がやつれ、消耗が激しいのがわかる。だが、その笑顔の爽やかさ、力強さは変わっていなかった。

「私はどうも、うっかりが多くて困る。気をつけているが、そう簡単に治るものではないらしい」
「……そうね。あなたは、昔からそうだったわね」

遥アテナとスターゲイザーは古い付き合いである。二十年前、彼女が現役だった頃は、何度もタッグを組んで世界の危機に立ち向かったものだ。実は、スターゲイザーがコスチュームや名前を決めるにあたり、参考にしたのはエイスワンダーだと、以前に教えてもらって面はゆい思いをしたことがある。

「それよりも頼みがある。君は透視能力とテレパスを組み合わせて、監視カメラの類を捜し当てることができたかな？」

「え、ああ……」確かに、かつて何度かそういう使い方をしたことがある。目に負担がかかるのか、頭痛がするのであまりやらないようにしているが。
「それを使って、このあたり一体を探してほしい。この状況を仕組み、見物している者がいる。必ずいる」

スターゲイザーがそう言うと、ゆらりと彼の背後の風景が歪んで見えた。怒っているのだ、とアテナ

は理解する。スターゲイザーの怒気が、熱となって空気を歪ませているのだ。

「急いで頼む。その間、逃げ出した連中は私が引き受ける」

それだけ言うと、スターゲイザーはミスター・マーベリックを抱えたまま、矢のように飛び去っていった。その姿を見送って、アテナは通信機を叩く。

「ハンナ？ 監視衛星のデータをちょうだい。このあたりの赤外線マップが欲しいの。うん、こっちはまだこたついているけど……もうじきカタがつくと思うわ。」

あんなに怒ってるスターゲイザー、久しぶりに見たもの」

ハイボルテージが頭上に抱えた特大のプラズマ球を、エイスワンダー目掛けて投げつける。咄嗟に防御姿勢をとったエイスワンダーの目の前に誰かが割り込んできて、全身でその雷球を受け止めた。岩山にシヤボン玉がぶつかるように、雷球はあつてなく弾けて消え、あとには傷一つないスターゲイザーが立っていた。

「……！」

すでに成人向け雑誌のグラビアに載りそうな格好になってしまっているエイスワンダーは慌てて胸元を隠す。スターゲイザーは苦笑いすると、呆然としているハイボルテージを一瞬で殴り倒し、ジャケツトを脱がせてワンダーに差し出した。

「この間は本当に済まなかった、エイスワンダー。これはせめてものお詫びだ。では急いでいるので、これで」

雷のような何かが突然天から降って来たと思うと、両肩にのしかかる力がふいに消えた。顔を上げると、ファイアリングハンマーが倒れていた。

「見た相手の力をコピーするなら、意識を向けられ

る前に倒せばいい。怪我はないかい、マッシブガール？」

マッシブガールはほとんど力の入らなくなった両腕を何とか動かして、瓦礫の中から立ち上がる。彼女に微笑みかけた後、スターゲイザーが少し困ったような顔で額をかいた。

「とはいえ、いたいけな少女を殴り倒すのは少々気が引ける。この子を連行する役目は任せていいかな」

マッスルロックの両腕の筋肉がふくれ上がる。キティの胴回りより太い腕が二本がかりでも、スターゲイザーの片腕を折り曲げることはできない。かえってマッスルロックの方が、じりじりと押されて腰を落とし始めていた。

「キティ、私が至らないせいでまた迷惑をかけてしまったね」

段々のけぞっていくマッスルロックの上体を地面にねじ伏せながら、スターゲイザーが振り返る。その横顔が笑顔だったが、相当消耗しているのが、付き合いの長いキティにはわかった。

「いいわよ、いつものことだもの。早く片付けましょう、ゲイザー」

それでも、彼はスターゲイザーだ。彼女の懂れた男なのだ。

ドクトレスの思い違いはもう一つあった。スターゲイザーは単なるヒーローではない。世界最強のヒーローである。

本気で激怒した彼を止められるものなど、この宇宙に存在しない。

画面の中で見る間に片付けられていくヴィラン達の姿を見ながら、ドクトレスは深い落胆を味わって

いた。

「大量のヴィランが狭い市街地に密集したらどうなるか、それを調べるのが今回の実験の目的だった。一般市民やヴィランが府中市の外に逃げ出さないよう、電磁障壁の準備までしていたというのに、市境にたどり着いた者すらいはないとは。」

スターゲイザー。彼さえ無力化しておけば何ともなるはずだったし、それは大して難しくはないはずだった。一体どこで手順を間違えたのだろうか。

まあいい、失敗は次に生かせばいいだけだ。ドクトレスはため息をついて、実験ノートにエンドマークを書き込もうとした。

その時、基地内に轟音が響き、モニタのいくつかが暗転した。続いて間を置かず、もう一度轟音と振動。室内の照明が、一斉に非常電源のオレンジ色に切り替わる。

コンソールを叩く。内部カメラの相当数が駄目になっていて、状況がわからない。基地の動力炉に異常が起きたのは確かなようだ。漠然とした不安に駆られて、ドクトレスはコマンドルームを飛び出した。動力炉へ向かう通路を走る。ドクトレスが拠点にしているのは東京都心地下、四百メートルに位置する秘密研究所である。地上に核爆弾が落ちても平気なよう設計されているのに、どんな攻撃がこれほどの衝撃を与えられるのか。角を曲がると、土埃のまじった熱風が吹き付けてきて、ドクトレスは一瞬目を閉じた。

「なるほど、考えたものだ。NUDE日本支部基地の真下とはね。ここなら大電力を使っても目立たない」

そして目を開けると、彼がいた。真っ赤なスーツとケーブのあの男が。

「スターゲイザー……」

「チェックメイトだ、ドクトレス。大人しく私と来たまえ。そして罪を償うんだ」

「罪って何？ 私は研究を進めただけよ。純粹に社会心理学に基づいてね。貴方ごときに連行されるなんてご免だわ」慎重に後ずさりながら、ドクトレスは言葉投げける。

「私ごときにも、連行された方が君のためだと思うね。さつき、この先にあつた原子炉を太陽に放り込んできた」

ドクトレスは耳を疑った。ジョークか比喩かと思つたが、すぐに思い直す。何トンもある原子炉を抱えて太陽まで一億五千万キロの距離を飛び、数分で戻ってくる。スターゲイザーならそれくらいのことではある。天文学的に、できる。

「この基地はもうじき機能停止する。徒歩で地上に出るのは、少しばかり骨が折れるんじゃないかな」

「……」
無言のままドクトレスは少しづつ距離をとる。スターゲイザーは動かない。非常電源だけでは、基地内の機能はせいぜいあと三十分ほどしか保たない。床に書かれた白いラインを爪先が越えようと、ドクトレスは即座に袖に仕込んだスイッチを入れた。ドクトレスとスターゲイザーの間に、耐熱耐爆シャッターが落ちる。

この隙に体勢を立て直すため、きびすを返したドクトレスは、一秒後には自分の判断の浅はかさを笑つていた。四百メートルの岩盤を突き破ってくる相手に、たかが二十センチの特殊鋼が何の役に立つというのか。粉々に吹き飛んだ耐爆シャッターの破片が肩口とみぞおちにめり込み、ドクトレスは意識を失つた。

「いらつしやいませ。はい、お墓参りですか。そうですね、ちょうど綺麗な千両が出ています。あまり派手でない方が、はいいらつしやいませ。プレゼン

トですね、少々お待ち下さい」
「よう、キクエちゃん！ 長いことすまなかつたね、手伝うぜ」

星生花店の軒先にふらりと現れた人物を見て、コマネズミのようにくると慌ただしく立ち働いていた菊笑はパッと笑顔になつた。「権太郎さん！ 腰はもういいの？」

「おかげさんでな、ばつちりよ」
「よかつた！ てんでこまひだつたの。バックヤードお願いできる？」

あいよ、と頷いてそのまま奥へ行きかけた権太郎が、ちよつと戻つて小声で菊笑にささやきかけた。
「今日も若大将は休みかい？ 出勤でもないようだが」

「ちよつとね……怪我しちゃつて、療養中なんです。しばらくは私一人でやるしかなくて。あ、そういうわけだから奥の部屋には入らないで下さいね」

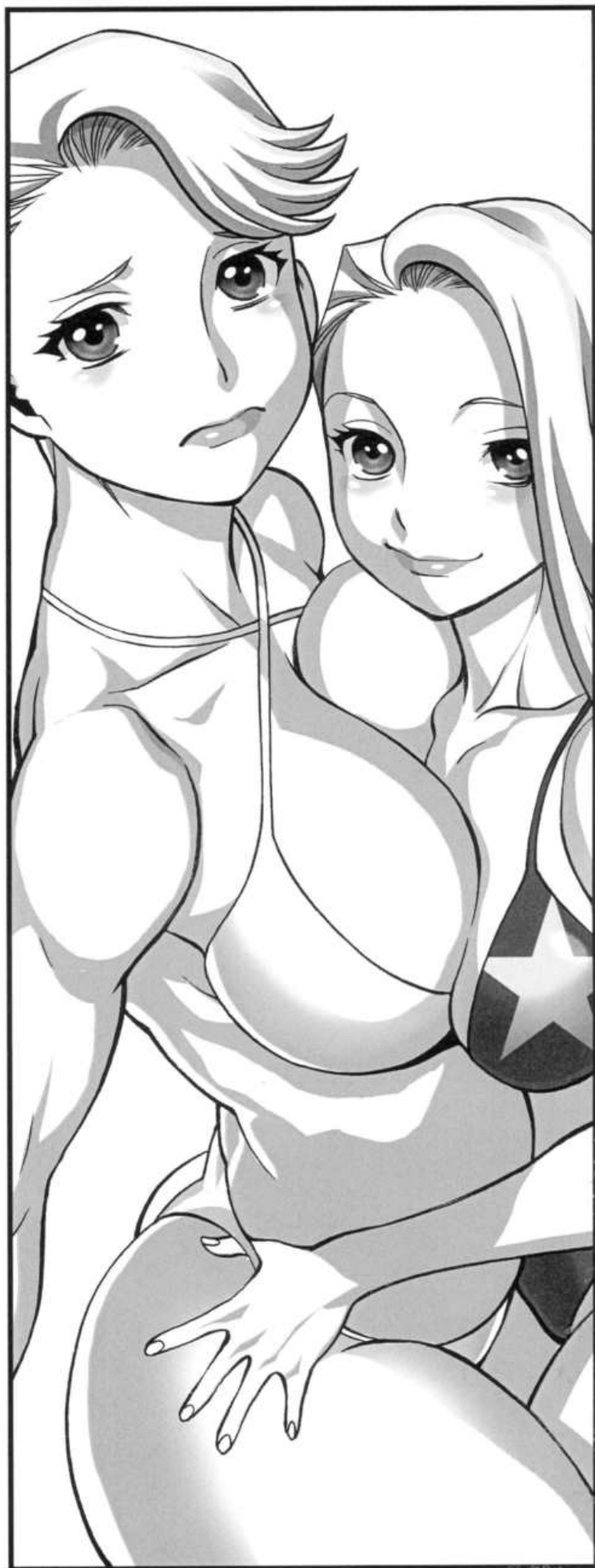
「あんな人でも怪我なんかするんだねえ」

首をふりふりバックヤードへ入っていく権太郎を見送つて、菊笑はそつと肩をすくめる。星ジョナサンがスターゲイザーだということは、この商店街の古株なら誰でも知つている公然の秘密だが、彼の本当の姿が不定形のアストラル生命体だということは、彼と菊笑の二人だけしか知らない本物の秘密である。アストラル生命としての能力を使えば、失つた片腕を再生することもできる。ただしそのためには、いったん肉体を捨てて本来の姿に戻らなくてはならない。星生花店の一番奥にある自室で、星ジョナサンは青白くゆらめく光の塊となり、はるか星々の間をめぐるエネルギーを吸収して、失つた質量の再生に努めていた。

菊笑に買つてきてもらった『うっかりミスはどう減らす——漫画で分かる・デキるサラリーマンの仕事術』を熟読しながら。

**HEROINES
&
VILLAINS**

ティクラクラン



人々がもはや為すすべもなく眺めているうちに、竜巻は次第に海面下に身を沈め、やがて跡形もなく消え去った。ミサイル駆逐艦も一緒に姿を消していた。

耳に焼け付くほど繰り返されていたあのメロディも、いつの間にか途絶えていた。

「……やられた」出席していた海軍提督のひとりがつぶやいた。「駆逐艦が奪われたぞ！」

その声で我に返った人々は、ようやく組織だった対応で動き始めた。

陸上の狂騒とは裏腹に、サンディエゴ湾は元通りの平穏さを取り戻し、静かに青く光っていた。

「……と、これが先月初めの出来事よ」ハンナ司令は司令席をぐるりと回して向き直った。彼女の背後の大型スクリーンには、サンディエゴでの事件の記録映像が静止画で大写しになっている。

遙アテナは司令の説明にじつと聞き入っていた。彼女が着ているタイトなVネックセーターはボリエームのあるバスタの輪郭をくつきりと浮かび上がらせ、ゆっくりとした呼吸のたびに豊かな膨らみを上下させている。一方、彼女の腰を包むデニムパンツも、内側からの肉の圧力ではち切れそうになっていた。

ここは防衛機関『N・U・D・E』の中央作戦司令室。悪の超常怪人軍団『プロウジョブ』から世界を守る最前線を担う組織の中核である。ここで司令はアテナへのブリーフィングを行っていた。

「アメリカ第三艦隊が総がかりで捜索したけど、奪われた駆逐艦を発見することはできなかった」司令は説明を続けた。「そして、これは始まりに過ぎなかった」

「他所でも同じことが？」アテナが訊ねた。「サンディエゴを皮切りに、この一か月の間にオーストラリアのブリスベン、中国の湛江でも各国の新造船が同じ手口で強奪されている」司令は答えた。

司令室の壁面を埋めるモニター群に各国での事件の記録映像が映し出された。

「中国では、奪われたのが初の国産空母だったもんだから、いきり立った人民解放海軍が危うく周辺国に戦争をしかけるところだった」

「あんな奇妙な津波を起こせるのはプロウジョブのヴィランしかいないでしょうね。ところで……」アテナは言った。「このメロディは結局何なの？」

彼女は例の旋律を繰り返し再生し続けているスピーカーを指差した。

「万能科学研究所の荒野博士の分析では、この音はテルミンという楽器の音色らしいわ」司令が答えた。

テルミンとは二十世紀初頭にソ連で発明された楽器で、手の静電容量を使って「触らずに」演奏する楽器として知られている。のこぎりを叩いて出す音に似た奇妙な音色を持つ。

「敵は何らかの干渉波を使って海水を操っている。メロディ自体には意味はないと博士は見ているわ。」

『未知との遭遇』で宇宙人との交信に使われたピ・ボ・パ・ピ・ポーってやつと同じ」

「うーん、どこかで聞いたような気もするんだけど……」アテナは首を傾げた。腕を組んだはずみで巨大なバスタがゆざりと揺れた。

「それよりアテナ」司令は言った。「今まで事件が発生した場所を見て、何か気づくことはない？」

アテナの表情が引き締まった。

「太平洋沿岸諸国を順番に巡っているみたい。つまり次は……」

「察しがいいわね。今週末、横浜で最新鋭の省エネルギー大型客船が就航する予定なの。当局はこの船が次のターゲットだと考えている」

モニターの一つに横浜港の地形図が映った。パースの一つを取り囲むようにしていくつかの光点が配置されている。「私たちは敵に気付かれないよう分散して待機し、

海面に不審な動きが見られたら直ちに迎撃する。作戦目的は船の強奪阻止とヴィランの撃退よ」司令が光点を指し示しながら説明した。「あなたにはここで不測の事態に備えてもらう。そして我らがエイスワンダーは……」

「あれでしょ」アテナは即座に光点の一つを指差した。その光点はなぜか一つだけ港から離れていて、ちょうど横浜中華街のあるあたりで点滅していた。

「娘が言ってたわ。週末は久しぶりに友達と一緒に横浜へ遊びに行くって」

「本当に察しがいいわね」司令はにやりと笑った。アテナはため息をついた。

「もう少し鈍感なら悩みも少ないんでしょうけど」遙クララにとつて横浜中華街は文字通り『食のパラダイス』だった。

土曜日の午前中、親友のメイと共に中華街に到着するや否や、彼女は焼き小籠包・パンダまん・タピオカミルクティー・胡麻団子と立て続けにこなしした。

そして今は食べ放題ランチの行き先を選んでるところだった。

小食のメイは、自分ではほとんど手をつけずクララの食べっぷりに見とれるばかりだったが、それはそれで楽しかった。自分が持っているものを沢山持っていて、自分にはできないことを軽々とこなす、そんなクララが嫉妬を通り越して大好きだった。

メイはそのクララにべしべしと肩を叩かれて我に返った。

「見て見てメイ、あの北京ダック、ムチャクチャ素敵じゃない？ここにしようかなあ」クララはジョーウィンドウに張りつかんばかりの勢いだった。

北京ダックに素敵も何もないものだど苦笑しながら、メイは答えた。

「どこでもいいよ、クララが食べたいところなら」
「もー、あたしが決められないからメイにも意見聞

いてるんじゃない。どの店見ても食べたいものだらけだよ」

クララはさんざん迷った挙句に声を張り上げた。

「よし、ここはキープしてもう一軒だけ見て決めよう！」

メイは笑いをこらえ、そのセリフを言うのは五回目だ、と指摘するのはやめておいた。

不意にクララのスマートホンが鳴った。彼女は電話をカバンから取り出し、画面に表示された文字を見た。

『N.U.D.E. EMERGENCY CALL』

クララは思わず天を仰いだ。

「うっそでしょお！ よりによってこのタイミングで！」

クララはその場であたふたと八の字に走りまわった挙句、メイの前で立ち止まって手を合わせた。

「ごめーん、メイ！ どうしても行かなきゃいけない急用ができたの！ すぐ戻るから、その辺でお茶しててくれる？」

「いいよ、待ってるから」メイは二つ返事で承諾した。

「ごめん！ ホントごめんね！」

クララはメイに向かって合掌しながら後ずさり、キュロットスカートをひるがえして雑踏の中へ走りこんでいった。

メイはクララの『急用』が何なのか知っていた。

クララが安心して戦えるよう黙って見守ってあげるのが自分の『任務』だと、彼女は思っている。

メイはゆっくりと歩き出し、自分好みの静かなカフェを探し始めた。

エイスワンダーになったクララがマントをはためかせて横浜港の上空に到着した時、例の津波はすで

に海面から盛り上がり、新造船に向かって進みだそうとしているところだった。周辺にはあのテルミンの単調なメロディがBGMのように響き渡っている。

津波の中に必ずヴィランが隠れているはずだった。そのヴィランを倒せばメロディは途絶え、津波も崩壊するだろう。

「えーい、まずは当たって砕けろ！」

クララは津波に向かって急降下し、頭から猛然と突っ込んでいった。

「あの子何やってるの！ 待ち伏せされてるかもしれないのに！」

司令室でアテナは歯噛みした。司令室の中にもBGMがしつこく鳴り響いている。通信がテルミンに占領されているため、司令部からクララに警告することもできない。

「四回目の、それも日本での犯行で、エイスワンダーの出現を想定してないとは思えないわね」司令が言った。

クララの登場を見透かしていたかのように、津波は船に達する前に竜巻状態に移行した。クララは轟々と回転する海水に突入しようとしたが、あえなく弾き飛ばされてしまった。

「きゃっ！」くるくると宙に舞い上げられたクララはかろうじて態勢を立て直した。

勢いに任せた攻撃が一蹴されたことでクララは冷静さを取り戻した。

落ちていて上空から横倒し竜巻の全体を見渡す。竜巻は直径が五十メートルほどで、幅は三百メートルくらいだろうか。

幅があるということは両端があるということだ。人工的に生み出されただけあって、竜巻の両端はロールケーキの断面のようにほぼ垂直に切り立っている。断面では大量の海水が渦を巻いているが、渦

の中心に近づくほど速度が落ちていくように見える。あの渦の中心なら。

クララはあらためて竜巻の断面めがけて飛び込んでいった。

滝に打たれているような激しい抵抗を感じながらも、渦に合わせて体を回転させてねじ込むと、どうにか断面を突破することに成功した。

竜巻の内部には円筒形の空間があり、弧を描いて高速で流れる海水が壁を形成していた。

その空間でクララが見たのは全く場違いな光景だった。

一人の男がサーフボードに乗り、湾曲した海水の表面でサーフィンをやっていた。金色のメタリックなウェットスーツに身を包み、風変わりな形のゴーグルで顔の上半分を隠していた。よく日焼けした肌とニカッと笑った白い歯が際立ったコントラストを見せている。

いわゆるチューブライディング（波が崩れる時にできる空間の中をサーフィンすること）をノンストップで続けている風情だった。

空間内には例のフレーズがわんわんと繰り返して鳴り響いている。

男は愛想よくクララに手を振った。

「よく来たな、エイスワンダー！ さあ、ブリーズ・レット・ミー・ワンダー（俺を驚かせてくれ）！」

「この音にはもううんざりなのよ！ 今すぐ止めなさい！」

クララは拳を突き出して男に飛びかかった。

「おおっとお！」

男はサーフボードを水面に滑らせて移動し、きわどいところでクララの攻撃をかわした。

「自己紹介がまだだったな。俺の名はココモ。海とサーフィンを愛するごく普通の男さ。よろしくな！」

「ふざけるな！」

クララは何度も攻撃を繰り返すが、そのたびにコ

コモは海水の曲面を滑らかに動き回り、彼女の攻撃はことごとくいなされてしまった。

いつの間にか、クララはコモの後を追いかけ、形で竜巻のほぼ中央部まで入り込んでいた。

「そろそろだな」コモはにとつと笑って鋭く口笛を吹いた。

「出番だぜ、弟たちよ！」

コモと対峙していたクララの真後ろと真上の水面から、別のサーフアーたちが不意に姿を現した。クララは三人の男たちが形作る三角形の中心にいる格好になった。

真上の男は銀色、真後ろの男は銅色のウェットスーツを着ていて、サーフボードのデザインもコモと色違いだった。

「次男ドコモ！」銀色の男が叫んだ。

「三男ソコモ！」銅色の男が叫んだ。

「そして俺が長男ココモ！」最後にココモが高らかに名乗りをあげた。

「三人そろって、ザ・ピーステイ・ボーイズ！」

クララが呆気にとられている間に、三人のサーフアーたちは彼女を包囲して水面を高速で上下に回り始めた。

誰から攻撃したらいいか迷った一瞬の隙を突かれ

サーフアーたちは回りながら一斉に手からワイヤーを発射した。

三本のワイヤーはクララの両手首と右足首に絡みついた。

「あつ！」クララはすかさずちぎろうとしたが、ワイヤーはわずかにきしむだけだった。

「プロウジョブ特製の単分子カーボンワイヤーだ！そう簡単には切れねえぜ！」ドコモが野卑な口調で叫んだ。

ピーステイ・ボーイズはなおも回転しながらクララをワイヤーでぐるぐる巻きにしていく。更に、彼

らは徐々にワイヤーを巻き取ってクララに接近した。

やがて、三兄弟はクララの身体に接するところまで近づき、ワイヤーにがんじがらめにされたクララを彼らが三人がかりで抱きかかえる形になった。

ドコモがクララの身体に手を這わせ、ワイヤーの隙間からはみだした彼女の肌をまさぐった。クララがびくつと身体をひきつらせた。

「すげえ、びちびちしてるぜ。こりや遊び甲斐がありそうだ」

「ちよつと、俺にも触らせてくれよ」ソコモが言った。

「任務が先だ」コモが弟たちをたしなめた。「遊ぶのは後にしろ」

「あつ、どこ触ってるの！ 放して！」クララが叫んだ。

「放してやることも」コモが言った。「ただし、予定通り船とお前をプロウジョブの本部に持ち帰った後でな」

三人の男たちは声をそろえていやらしく笑った。

クララは歯を食いしばって全身に力を込めたが何の変化もなかった。

司令室では、アテナたちがスクリーン越しに見守るばかりだった

「海水の回転速度は落ちていません。クララが突入する前の勢力を保っています」オペレーターが報告した。

その時、警報がやかましく鳴った。オペレーターがコンソールに目を落とし、顔色を変えた。

「津波が再び動き始めました！ 船に向かっています！」

アテナはいてもたってもいられず、司令室を飛び出していった。

アテナが津波の上空に到達するまで三十秒もかか

らなかつた。

彼女は津波の断面に接近し、クララと同じように津波との回転に同期するよう身体を高速でひねりながら、ためらいなく津波に飛び込んだ。

津波の中の空間に入ったアテナは一瞬で内部の状況を見てとり、まったく減速せずにクララと三人の男たちがけて突つ込んでいった。

「おわあつ！」

ピーステイ・ボーイズはアテナに蹴散らされ、あわてて散開して態勢を立て直した。身動き取れないクララの身体は円筒の奥へ弾き飛ばされ、海水の中へ消えた。竜巻が消えない限り、クララは海水と共に回り続けているだろう。

クララに顔を見られないための非常手段だった。

娘を助け出すのは男たちを倒してからでいい。

「おふくろさんの登場だ！」コモが不敵に笑った。

「俺、年増は好みじゃないぜ！」ドコモが不遜に言い放った。

「俺は女なら誰でも……」ソコモが恥ずかしそうにつぶやいた。

「黙りなさい！ セクハラ男どもにはお仕置きあるのみ！」

アテナは鋭い一喝とともに再び男たちに襲いかかった。

コモたちはクララにしたのと同じように、巧みに逃げ回りながらワイヤーを繰り出してアテナの手足を狙った。しかし、アテナは接近するワイヤーの動きを見切り、片っ端からはらいのけた。

「あの子のようにはいかないわよ！」

「じゃあ、これはどうかな？」コモが言った。

ひーういーういーひいーひいー
ひーういーういーひいーひいー

テルミンの音が急に大きさを増した。同時に、轟

音と共に竜巻の内部空間が傾き始めた。

「なに？」アテナは思わず周囲を見回した、

竜巻がなおも傾きを増していく中、ピースティ・ボーイズはサーフボードを器用に操って海水の表面を滑るように回っている。

ついに円筒は垂直になった。いまや竜巻は完全に直立していた。海水の回転速度はさっきより格段に早くなっている。

さすがのアテナも動揺してひるんだ時、彼女の左手にワイヤーが絡みついた。

「やったぜ！」ココモが叫んだ。

アテナがワイヤーをちぎる間も与えず、ココモはワイヤーを巻き取って彼女を海水の表面に叩きつけようとした。ワイヤーに振り回されたアテナの身体が海水に激突しようとした瞬間。

「くっ！」

アテナは和式トイレにしゃがみこむような姿勢で両足を水面に押しつけて踏ん張り、ココモが引く張る力を利用して水上スキーのように滑り始めた。

彼女はたくましい太ももと引き締まったふくらはぎを大きく開き、高速のため硬い板と化した水面に必死で抗っている。ブーツの踵が水面を切り裂き、どっしりした臀部に水しぶきを激しく叩きつけた。

「M字開脚でベアフット（裸足での水上スキー）かあ、エロいねオバちゃん！」振り返ったココモが白い歯をむき出して笑った。

アテナは思わず顔を赤らめた。

「じゃあ、こんなのはどうかな？」

ココモがそう言った途端、彼のボードが足の下から抜け出し、独自の意識を持っているかのようなスムーズな動きで横滑りした。

ボードを失ったはずのココモは、身体一つになってもバランスを失うことなく、アテナと同様に踵で海水を削りながら疾走した。

ドコモとソコモのボードも彼らから離れ、縦横に

走り始めた。

『一対三』のはずだった戦いが、突然『一対六』になってしまった。

ドコモとソコモ、そして三枚のサーフボードが一斉にワイヤーを放った。

左手と両脚が自由にならないアテナは、ついに彼らのワイヤーに絡めとられてしまった。

「ああっ！」アテナは呻いた。

「いやっほおおお！」「やったぜええええ！」ドコモとソコモが雄たけびをあげた。

三兄弟は自分たちのワイヤーを入念にアテナの身体に巻き付け、身動きを取れなくしてから切り離れた。一方、三枚のサーフボードは水面上を移動しながらそれぞれのワイヤーの長さを調整し、アテナを内部空間の中央に宙づりにした。

「ぐぐぐ」アテナは全身の筋肉に力を込めてワイヤーを引きちぎろうとしたが、ココモたちの縛り方は絶妙で、アテナがかけた力をうまく逃がしてワイヤーに負担がかからないようにしていた。

ココモは水面の上を軽やかに移動しながら弟たちに呼びかけた。

「お前たち、準備はいいか？」

「おお！」弟たちが声をそろえて応じた。

三人は同時にジャンプして水面を離れ、竜巻の中心にいるアテナめがけて飛びかかった。

竜巻は横浜ベイブリッジのすぐ脇で猛然と回転し続けていた。その裾野から海水を絶えず巻き上げ、勢いが衰える様子は全くない。

N・U・D・Eの人々はただ待つしかなかった。

「アテナさんもクララも依然として通信不能です」通信士が報告した。

「司令、中はどうなってるんでしょう」オペレーターが不安げに訊ねた。

「神のみぞ知る、よ」司令は厳しい表情で答えた。

三兄弟は先ほどクララにしたように、アテナの身体を包み込むようにしがみついた。

「ちよっ、何するの！」アテナはもがく以外に抵抗の術がなかった。

男たちの六本の腕がアテナの全身をうねうねと這いまわった。ワイヤーが食い込んで砲弾状に絞り出された巨乳、優美な曲線を描いてむっちりとした腰、海水に濡れてテラテラと輝く白いヒップ、その全てが好き放題に蹂躪された。

「やめなさい、やめなさいったら！」アテナは顔を真っ赤にして身をよじった。

ココモはアテナの腰を撫でまわしながら言った。「最後のダメ押しだ。グッド・ヴァイブレーション・アタック！」

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる

「えっ、あっ、なに？」

アテナは突然全身を走り抜けた刺激にうろたえた。ココモのウェットスーツの表面に無数のイボが浮き出し、細かく振動してアテナの肌を揺さぶり始めたのだ。

でろれんでろれんでろれんでろれんでろれん

「いやっ、あっあっ！」

ドコモのウェットスーツからは女性器の内部を思わせるヒダが浮かび上がり、アテナの身体に吸い付くように密着していやらしいうねりを送り込んだ。

うによんうによんうによんうによんうによん

「うっ、あうん」

ソコモのウェットスーツはローションのような粘

液を大量に分泌し、優しくこすりたてるような動きでアテナを愛撫した。

「どうだいオバちゃん。あなたの無敵のパワーでも、この気持ち良さには勝てないだろ？」
ココモはそうそぶいてイボイボの振動を更に激しくした。

「あああつ！」

振動でアテナのスーツの胸元が徐々にずれていき、とうとう量感のある双乳がまろび出してしまった。露わになった先端の赤い蕾がちまちまちココモの指に捕えられ、揉み潰される。

「ひいっ！ やっやめっ！」

アテナは身体をのけぞらせた。
長兄だけでなくココモの指までが加わって、胸肉を容赦なく揉みあやしてきた。その上にローションをまぶされると更に快感が増す。

「すげえぜ、この柔らかさ。手が肌をめり込んでいくみてんだ。あの娘っ子の肌もよかつたけど、こういうのも悪くねえな」ドコモが下卑た笑い声をたてた。彼の手はアテナの尻たぶに回され、Tバックでむき出しの臀丘をぬめぬめと撫で回している。

「娘の方は本部にお持ち帰りしてからゆっくり楽しめばいい。まずはこのオバちゃんを堪能しようぜ」娘の方は本部へお持ち帰り……。

快感のあまりピンクの霧がかかったようになっていたアテナの脳裏に、ココモの言葉が引っかかった。
娘を思う気持ち、快感に身をゆだねたくなる誘惑に優った。急速に霧が晴れ理性が戻ってきた。

アテナは歯を食いしばって右手に全神経を集中した。手のひらを外に向けてワイヤーの一本を握り、男たちに気付かれないよう快感に悶えるふりをしながら、徐々に引張る力を強めていく。

手のひらにワイヤーが食い込む痛みをこらえながら更に力を送り込むと、ついにワイヤーがぶつりと切れた。

「さあて、いよいよオバちゃんの大事なところを堪能させてもら……」

ココモがついにアテナの股間に手を伸ばした瞬間、自由になったアテナの手が彼の手首をつかんだ。

「あ」

「ほら、捕まえた」アテナが凄絶な笑みを浮かべた。

そして、彼女の左手もワイヤーを断ち切り、そのままの勢いでココモの股間を掴んで握りしめた。
ココモの絶叫は、内部空間全体をびりびりと震わせるほどの大ききだった。

あらゆる電波を占領していたテルミンの信号が突然断ち切られた。

同時に、竜巻が急に形を崩して傾き始めた。

「竜巻が崩壊していきますす！」オペレーターが報告した。

「通信か回復しました！」通信士が叫んだ。

「アテナ！」司令は指で自分の首をかき切る仕草をみせた。「ワイプ・アウト（なごん）！」

「うおりやああああああああ！」

「ひええええええええええええ！」

アテナは三兄弟の足を一本ずつまとめて掴み、ジヤイアントスイングの要領で猛然と振り回した。回転速度は次第に増し、音速に達しようとしていた。

アテナに掴まれていない方の足と両手が遠心力で外側に伸び、三人そろってY字バランスをやっているような状態になった。

「消え失せろ、変態どもお！」

アテナは気の済むまで振り回したあと手を離れた。
「ああ……れ……れ……れ……！」

ザ・ピースティ・ボーイズは悲鳴の尾を引きながら縦一列になって天高く舞い上がった。三つの点は大空の果て目がけて一直線に飛んでいき、やがて見えなくなかった。

「ふん！」

アテナはばんばんと手を叩くと、眼下の海を見た。クララはすぐに見つかった。まだワイヤーに縛られた状態で気を失ったまま海面を漂っている。

アテナはクララを助けに行こうと姿勢を変えた途端、びくっと身体を震わせた。

「……あつ！」

ハイレッグの食い込みが思わぬ刺激を送り込んできた。三兄弟にいたぶられた余韻が両脚の奥に色濃く残っていた。股間のじっとりした濡り気は海水だけではなかった。

あの子が帰ってくる前に……。

アテナはクララの元へ急ぎながらも、ふらちな考えを振り切ることができなかった。

メイは読み終わった文庫本をテーブルに置き、ほつと息をついた。彼女はほんのり湯気を立てる菊花茶のカップを持ち上げ、一口飲んだ。

クララと別れた後、メイは中国茶がおいしい自分好みのカフェを見つけた。陽当たりのよい窓際でゆっくりと読書を楽しんでいた。

もうかなり日が傾いてきたが、クララはまだ帰ってこない。

メイは鞆の中から別の文庫本を取り出した。こういう時に備えて、いつも未読の本を予備として持ち歩いていた。もともと一人でいるのが嫌いではない彼女にとって、長く待つことは全く苦にならないのわかつた。クララが自分を置いて帰るわけがないのはわかつたので、いつまでも待つつもりだった。

不意に携帯電話が鳴った。

メイは微笑んで携帯を手を取った。

「もしもし……うん、大丈夫だよ、ちゃんと良い店見つけたから……もう夕方だし、晩御飯食べて帰ろうよ……わかつた、また電話して……」

メイは携帯をテーブルに置き、窓の外を見た。

昼間と変わらず多くの人が街路を行きかう中、早くも看板の明かりが点りはじめていた。

横浜での戦いから二週間後。

アテナはN・U・D・Eの司令室に呼ばれ、深海探査艇が最近撮影したという映像を見せられた。

サーチライトの光が暗黒の深海を缺のように切り裂き、埃のような有機物がちらちらと漂う中、カメラは砂と岩が散在する海底を這うように進んでいく。カメラの視界の先に、黒い壁のようなものがぬつと出現した。

探査艇がいくら横移動しても、その壁はどこまでも途切れることなく続いていた。

やがて探査艇は上昇を始めた。しばらく上昇を続けたところで、探査艇は照明弾を発射した。

照明弾が破裂すると、まばゆい光が広い範囲を照らし出し、カメラの視界が一気に広がった。

カメラは驚くべき光景を見下ろしていた。

先ほどまで探査艇がいた海底には、幾つもの巨大な船体が折り重なるように横たわっていた。

照明弾の光が消えるまでの短い時間で、ズムウオルト級ミサイル駆逐艦の特徴的な形状や中国の新造空母の広大な甲板がはっきりと確認できた。

撮影場所は日本海溝の近く「ハンナ司令が言った。「詳しく調べたところ、どの船も抜け殻同然で、残っていたのは外側の船体だけだった。エンジンも、航法システムも、構造材も、中にあったものは一切合財取り外されていた」

「じゃあ、プロウジョブの目的は……」アテナはつぶやいた。

「パーツ取りよ」

司令の口調はあくまでも冷静だった。

アテナは眉をひそめた。

「パーツって……何の？」

司令は煙草をくわえ、ライターの火をつけた。彼

女は高々と噴き上がる炎に煙草の先端を当てて深々と吸い込んだ。

「……正直、あまり考えたくないわね」
司令が吐き出した煙草の煙は、複雑な渦を描いて天井へ立ち上っていった。

完



サイキック
戦車だ

きゅらららら
ずどーん
ずどーん

はまだまだ
はぼほ



くっ...
何て威力

けど所詮は
指鉄砲

気合いで
突っ込んで
やるわっ!!

ばん

ばん



シヨック
カノン
発射!!

ぶあしゆるるる
ぶあしゆるるる

サイキック
宇宙戦艦



ふっ
青いな

俺のサイキック
バレットは
こんなもんじゃ
ないぜ

なんで
すって!



シヨック
カノンが
効かないぞ

よし
サイキック
波動...

あっ
バラノドンだ



サイキック
マシンガン!

どどどどどど!!

きやあっ!!



ああ
あの人に
そっくり

一人上手じゃ
ねえよ

なんだよ
やめろよ
その眼



しゅぼーん
しゅぼーん

サイキック
ロケット
ランチャー!

うああっ!



でも
それなら!!

威勢は無いけど
動きは速い
なるわつら
な



これでもう
サイキックは
使えない
でしょう!

苦戦したけど
両手両足
へし折って
やっめたわ!



何??

どびゅー
どびゅー
どびゅー



ふっ
青いな

男にはまだ
大砲が
あるんだぜ

なんて
すって!



お
お
お
お
う!!



見る!!

サイキック
息子銃!!



勝った!
やったーん!

これぞ必殺
ワンダー・
トルネード!!

324発か
まだまだ



どびゅー!

きやあつ!

ハッ



やはりあのものを
分身しなければ
封じなければ
駄目だっ!!

くそっ!



あの分身を
封じなければ
……

くそっ!
どうやったら
勝てるんだ!



作り出す源を
断りば
いいんだっ!!

そうだ!
あの技を



閉鎖空間に
誘い込めば
いいんだ!!

そうだ!
奴が
分身
できない



切り前に
ウチのPCと
コピー機を
のっぴりした
のはぶっ!!

ああっ
誰だよ!?

環望 宅



やめさせたければ
このトイレの中
来るんだな!!

はははは
というわけで
エイズワンダー
俺はこの
でかいウ○コを
流さずに
出る



盗撮機、わいせつ物所持で逮捕

空手道の練習で
家に入った警官が発見

休載に
なっちゃった
じゃねーか!!

何ってんのよ



あっ……!!

ワンナイト・メモリー

(ユニバース0244→ユニバース0422)



神野オキナ

A C T O エピローグがプロローグに繋がる時

☆

おお世界八番目の奇跡

僕の最初の不思議

全ては君と共に天から来たりて、君と共に去る
取り残された僕は、ひとり孤独に旅をする

いつか君に会うために

いつか君の特別な男になるために

君のためだけの男になるために

もしも君の特別な男になれるなら

永遠の友になれるなら

命だつて要らない

魂だつてくれてやる

だから神様

もういちど彼女にあわせておくれ

おお世界八番目の不思議

世界の女神

K・ラットルズ作詞

「My First Wonder」より

☆

それは、いつもの簡単な任務の筈だった。

「罪深き者よ、おののけ！ 裁きの時は今！」

神より与えられた槍を振りかざし、シスター・ペ

ロシテイは声を張り上げる。

「父なる神に変わって、このシスター・ペロシテイ

がおのれらに裁きの鉄鎚を下してくれよう！」

プロウジョブが魔導技術で作り上げたオークの群

れが、その大音声で一気に怯む。

「いつい、口が軽くなった。」

「近頃はエイズワンダーなる若輩者が幅をきかせて

おるが、真の正義の守護者たる資格をもつは我にあ

り！」

ぐるりと錫杖と槍を合体させた愛用の武器「ジャ
ツジメントランス」を振りかざし、踏み込む。

「いくぞ、天罰できめーん！」

瞬間、どん、と胸を見えない手がついたように、

彼女は上半身を反らせ、バランスを崩して倒れた。

「な……」

起き上がろうとして、心臓を走る激痛。

「え………？」

全ての時間が停まり、自分の豊富な胸の谷間の始

まるやや上、鎖骨の真ん中を見る。

一度上がった血しぶきがゆっくりと収まりながら、

こぼれて地面にしたたつていくのがスローモーショ
ンのように見えた。

あとは胸にトマトジュースの蛇口が出来たように、

とろとろした液体が後からしたり落ちていく。

「撃たれ……た？」

その傷の深さより心臓を撃たれたという事実から

来る驚愕が全ての集中を解いた。

「どこ………から？」

彼女の中に埋め込まれた「聖なる十字架」は恐れ

ず、疑わぬ者に真の力を与えるが、それが「撃たれ

た」ことで揺らいでしまった今、全ての奇跡の効力

は失われた。

神の力で満たされた身体から、みるみる力が抜け

ていく。

一瞬、殺されると思い身をすくめていたオーク達

がゆっくりとこちらを見る。

そこにいるのは無敵の神の意志の権化たるシスタ

ー・ペロシテイではなく、ただの無力な、二十歳の

OL、ペロニカ・ライエンバーク・山科。

獣たちのうめき声が聞こえる。

先ほどの無力で無害なオークは、本来の凶暴凶悪

な生物へと戻っていた。

じわじわと、迫ってくる。

先ほどまでの恐怖が怒りに転じている。

そしてペロニカの脳裏にオークの習性のひとつが
浮かんだ。

オークにはメスがいない。故に他のほ乳類の雌を
犯して子を産ませる。

「ひっ……」

普段、会社ではお堅いお局様で通っているペロニ
カは、未だに男を知らない。

そして、家の事情で同居しているいとこの、高校

生の少年に淡い思いを抱いていた……敬虔なクリス

チャンである彼女は、それを忌まわしい思いとして

封印していたが。

それがこの状況になって全てがフラットになり、

純粹な思いだけが露出した。

生臭いオークの息の匂い。

その指先が、シスターの意匠を残した、スキンタ

イトな戦闘服の破れ目に掛かる。

防弾防刃を誇る特殊繊維も、一度ほころび、オー

クの怪力が加われば引き裂かれてしまうことを止め

る事は出来ない。

白い乳房が露出し、汗ばんで震える。

「いやあああああああ！」

彼女の叫びは殺到してくるオークの群れの中にか
き消えた。

☆

I C Uの中、少女の細い、ガラスで出来たような
透明な指先が、首をギプスで固定され、包帯とガー
ゼでほとんどを覆われた美女の額にそつとあてられ
る。

十歳になるか、ならないかの横顔が真剣そのもの表情を浮かべ、目を閉じる。

指先が淡く、青白く光った。

「……………」

大きめの白衣を袖まくりして着用した少女は、ゆつくりと目を閉じて指先を美女……………シスター・ペロシテイに押し当てていたが、五分ほどしてガラスの指を離した。

「どう？」

彼女の横、ロングヘアをアップにまとめた隻眼の美女が呟くように尋ねる。

世界平和を守る秘密組織NUDEの総司令官、ハンナ。

「……………オークの習性に感謝ね。彼らは得物をいたぶり、徹底的に無抵抗にだからじゃないと生殖行為が出来ない。貴方たちが来るのがあと五分遅かったら、彼女は完全に壊れていたわ」

少女はそう言つて、ガラスの手首に時計型の偽装装置を巻き、スイツチを入れた。

透き通ったガラスの手首が、一瞬で通常の皮膚を持つたそれに見えるようになる。

「いくら私が『アスクレピオスの手首』を持っているとはいえ、壊れ果てた精神（こころ）にまでは及ばないもの……………それと、彼女自身の想い人のおかげね」

「？」

「病室の外で待つてる彼よ」

「ああ、やつぱりね……………肉体関係はあるの？」

「あつたらもう少し楽だったでしょうね……………彼女は自分が処女を奪われたと思ひ込んでたもの。彼と先に肉体関係を結んでいたらもう少し回復する余地が出来ていた。奴らに暴行を受ける寸前に自分の素直な想いに気づいていたのね、きつ……………だから、精神の殻に閉じこもつてた」

「その殻、開きそう？」

「開けたわよ。あとはあの少年次第」

「なら大丈夫……………きつとね」

「ただ、ヒーローとして復帰出来るかどうかは別……………彼女は心を折られた。少年は二度と彼女がこんな目に遭うことを望まない、となれば……………」

「それはそれで幸せな話よ。寿退社は女の本懐のひとつだもの」

欠片もそんなことを信じていない声でハンナ。

「で、子供が出来たらアテナの娘みたいにくっすり引つ張り込むの？」

「まさか。あれは彼女が『エイズワンダー』だからよ」

「どうかしら。NUDEの司令官様はプロウジョブ退治の為なら何でもするから」

「……………」

ハンナは何も言わず肩をすくめた。

「さ、あとは愛に任せて、邪魔者は退散しましょう」

そう言つて少女が指を鳴らすと、ICUのスタッフ専用の通路口が開いた。

その中に入り、二人はしばらく歩いて行ったが、

「そういえば司令官、性生活の方は、まだ後ろ（バック）オンリーなの」

と不意に切り出した。

「何よ突然」

下世話な話題にもかかわらず、ハンナは顔色ひとつ変えない。

「そろそろ年齢が年齢だから、前（ヴァギナ）も使わないとホルモンバランスとか色々あるわよ。確かにアナルは第二の性感帯かもしれないけど、第二であつて一番じゃないわ。前も使わないと、幾らM75型血清で肉体的には二十代を維持しても……………いえ、それだからこそ、色々問題が生じるかもしれないわ」

「いいじゃない、貴重なデータになるわよ。それに妊娠はイヤなのよ。第一、私はSだから、痛いのは嫌いな。第一あなたはどうかなのよ？」

「……………やれやれ」

少女は肩をすくめる。

「ところで『それで思い出したけど』、変な予言をこの前聞いたわ」

少女は話題を変えた。

「予言？」

なぜ、今までの話題で思い出したのかと訝しげな表情になるハンナに、少女は構わず続けた。

「ええ。アイソシステムが……………」

「ああ、そういえばまだあのガラクタ、動いてたんだっけ」

NUDEの先々代の司令官が宇宙人から譲り受けた予言システム……………のだが、未来予測をひとつ行うのに五年かかり、それがまた曖昧な内容なので、倉庫に放り込まれ、新人で「使えない」と判断された職員がそのレポートを毎日書かされるといふ、いわば懲罰部署と化しているしろものだ。

「予算の要らない自己増殖自己改良システムだからね……………で、そのアイソシステムがこの前、変なことを言ったのよ」

「？」

「時の弾丸（タイム・ブレット）が戻ってくる、乙女たちを救いに」つて」

「！」

ハンナの顔色がこれほど変わるのを、部下達は恐らく見たことがないだろう。

それは驚愕であり、僅かな歓喜であり、同時にそれを押し殺す絶望と怒り。

だが、その場にいたのはガラスの手を持つ少女だけだった。

「本当なの、詩乃（しの）」

詩乃と呼ばれた白衣の少女は、こくりと頷いた。

「いつかは判らないけど、本当だとしたら二十年以上、時空の彼方に消えた存在が戻ってくる世界初の

例になるわ」

「え、ええ」

「それに、あなたの貞操の近いも無駄にならなかったことになるわね」

「な、何を馬鹿なことを！」

「真っ赤になるハンナの姿を見たら、部下は恐らく卒倒するか、自分の記憶を消去するように技術部に駆け込んだかも知れない」

「でも………まさか………時空の渦の中で、彼は………」

「消えただけよ。死体は確認されてないわ」

「……………」

足を止め、じっと考え込むハンナの横顔はすでにNUDEの指揮官の顔に戻っていた。

ACT1 女ふたりの思い出話

☆

大分昔、そうかなり昔。

そう大人達が呼ぶような「以前(あのころ)」。

善と悪との戦いが最高潮、世界を二分して行われていたそのころ。

少女は意を決してその衣装を身に纏い、大空を舞った。

世界を救うため、人々の涙を笑顔に変えるため。

エイズワンダー。

世界八番目の不思議と呼ばれた少女。

悪を打ち砕き、闇を引き裂き、世界に光明と福音をもたらす奇跡の乙女。

少年は彼女が世界に現れたその日、破壊されたビルの残骸の上に立ち、驚きの目で少女を見つめていた。

同じ「ヒーロー」と呼ばれるジャンルの中に居ても、少年は少女のように輝いていないと自覚していたから。

ほんの数メートルを瞬間移動出来るだけの自分は、せいぜいコン泥と潜入捜査ぐらいしか能がない。

だから、派手な戦闘能力や複数の能力を持つ仲間が苦手だった……嫌い、と言えるほど少年の性根は腐っていなかったし、だからといって素直な憧れを抱くには頭が良すぎた。

コンプレックス。

思春期ならでは、と言うには、彼の精神(ころ)は大人になりすぎていた。

さらに肉体的な負い目が彼を人から遠ざけていた。人と必要以上に関わらないことが、少年の人生の通常航路となっていた。

が、それを打ち砕くぐらい、少女は輝いていた。

落下してくる2機の大型旅客機を目から出る熱線で溶接した鉄骨五本で繋いで支え、空港に優しく降り

ろして微笑む姿をテレビで見た瞬間、少年……タイム・プレット、「時の弾丸」という勇ましい、そして自身にとってはあまりありがたくない名前倒れのコードネームの「ヒーロー」………は「ヒロイン」に対して、恋に落ちていた。

とはいえ、矢も楯もたまたまらずそのそばに行くほどの脳天気さも持ち合わせていなかった。

彼自身が持っている能力の反動がもたらす「問題は男女問わず、彼を人間からある程度遠ざける結果になっていたせいもある。

美人で、スタイルも良く、そしてその身体の露出面積の凄さは瞬く間にエイズワンダーをマスコミの寵児に押し上げていった。

だが、彼らの所属するNUDEの技術は地球最先端だが万能ではない。

通常の人間なら困らないが、超音速で移動し、戦車の主砲数十発分の打撃を一瞬で受けて、なおかつ破れない衣装は作れなかった。

そのことに少年が気づいたのは、彼女が華々しいデビューを飾って間もなくのことだ。

敵の触手メカに彼女が人質を盾に囚われ、衣装を破り取られた瞬間だった。

彼はその時、別の場所にも確保されていた人質を奪還するべく、密かに瞬間転移を繰り返しながら(距離は短い)、それが可能なのがタイム・プレットの長所だった)、移動している最中だった。

少女の裸身に気を取られた一瞬の隙を突いてエイズワンダーは逆転したが、最後に彼女の身体を覆っていた衣装の残骸がその瞬間に粉みじんに消えた。

「きやああ！」

悲鳴を上げて身体を覆った瞬間、飛行能力も失われたのか、落下した彼女に上空のヘリのマスコミが容赦なくカメラを向ける。

土煙が収まればその姿は全国に晒されるに違いない。

生まれて初めて見る異性の全裸の衝撃とその美しさよりも、「見ないでえー」と叫んだ少女の涙の方がタイム・プレットを動かした。

瞬間移動を繰り返して、彼女を近くのホテルの中、リネン室へ連れ込むと、そのままシーツを身体に巻き付けさせた。

「……あ、ありがとう」

しゃがみ込んで涙を拭くエイズワンダーの横顔に、少しだけ、タイム・プレットは誇らしくなった。

「大丈夫？」

「ええ。あなたは……タイム・プレットさんでしよ？」

「……！」

花形スーパーヒロインである彼女が、自分のことを知っていたのに、タイム・プレットは驚いた。

何しろコスチュームも派手派手しいものではなく、黒をメインにスキンタイトな特殊繊維のスーツに拳銃とナイフ、顔を覆う金属のマスクこそメタルカラーだが、そこにはナイトスコープという、どちらかと言えば限りなく「ザコ戦闘員」に近い出で立ちである。

「よく、知ってるね」

そのマスクを外して、タイム・ブレットは大きく息を吐いた。

緊急の連続テレポートで些か息が切れている。

一応自分もヒーロー登録はされているが、その衣装と裏方仕事が多いため、同じ仲間達でも覚えていく者は少なかった。

「とても、綺麗な人だから……」

言われて苦笑が口元に浮かぶ。

小柄で、しなやかな体つきと中性的な顔のおかげで、よく女性に間違われるが、彼女もそうらしい。胸を見れば判ると思いたいが、潜入任務がメインの彼の上半身はボディーマーとパウチで固められているから、一見すると判らないのも無理はない。

「悪いけど、僕は男だよ」

「え……？」

きよとんとした顔でエイズワンダーは彼を見上げ、それを見てタイム・ブレットは笑った。

不愉快を笑い飛ばそうとしているのではなく、本当に楽しかった。

任務が終わったというのもあるし、エイズワンダーをマスクミミの無粋なカメラから守ったという満足感もある。

それ以上に、他人と話しているのに、まぶしいと思っていた少女の前なのに、いつの間にかリラックスしている自分に気づいて驚いていた。

「あ、あのごめんなさい、ごめんなさい！」

シートを身体に巻き付けたまま、べこべこと謝るエイズワンダーに、

「十六歳にしてはチビなのは自覚してるし、性別を間違えるのは君が初めてじゃないから」

そう言っただけでタイム・ブレットは微笑んだ。

☆

それから、ちよくちよく、タイム・ブレットはエイズワンダーの「全裸の危機」あるいは「貞操の危機」を救った。

プロウジョブはその名前の通り、下世話にして下劣な作戦と行動で、まだ十代半ばになるかならないかの少女を、徹底的に辱めることで戦意を折ろうと画策したのである。

NUDEもエイズワンダーの士気を下げるわけにはいかないで、上手くマスクミミ対策を立ち回ったのと、まだ携帯電話にカメラが搭載されていない時代だったというのもある。裸に剥かれた彼女の涙ぐむ姿は一切マスクミミには流れず、「無敵の少女」はますます名を高めていった。

その人気の高さを示すのに、マテルのバービー人形のエイズワンダーと並んで引用される当時の有名バンド、イギリスのウエン・リー・ラットルズ(バンドの名前をそれぞれ引用したバンド名)が作った「マイ・ファースト・ワンダー(僕の最初の不思議)」という歌がある。

「世界八番目の奇跡、僕にとっては最初の不思議」という歌詞で始まるこの曲は、自身がエイズワンダーの熱狂的なファンであったK・ラットルズのラブレターであり、当時、同じように感じていた男性や女性から熱烈な支持を受けて、当時のヒットメイカーであったM・ジャクソンやT・ターナーを圧倒する売れ行きを見せたものだ。

さて、翻って現実での展開。

当初はそのスター性と勝手の分からぬ世界で孤立していたエイズワンダーは、次第に本人自身の持つ公明正大さと誠意と明るさで、やがてNUDE内外

のヒーロー、一般職員に足るまでの人気を獲得していった。

タイム・ブレットたちを含めた一般部隊が敵の組織の地道な資金調達ルートや、兵站を潰していったというの大きいのが、何よりもエイズワンダーを始めとした派手なスーパーヒーロー、ヒロイン達の活躍がマスクミミで報道されることで、組織内にいる下っ端構成員の間に動揺が走る……巨大な非法組織だっただけに、揺らぎ始めると一枚岩ではいられなくなる。

もう少して、敵にとどめを刺せる……のちにそれは大きな間違いであると判明するのだが……誰もがそう思い始めた、エイズワンダー登場から一年目のその日。

☆

「せ、先輩」

タイム・ブレットは自分のヒーローネームを呼ばれるのを好まず、かといって機密保持の観点から本名で呼ばれるわけにもいかなかったため、自分のアシストをしてくれる親しい一般職員には「B」と呼ばせることを好んでいたが、一人だけ彼を「先輩」と呼ぶ少女がひとりいる。

「やあ、君か」

エイズワンダーとほぼ同年代の、ハンナと呼ばれる少女だ。

エイズワンダーが現れた翌月、就任初日に片目を負傷しながらも高層ビルを爆破しようとしたプロウジョブの下級エージェント六十人を一人で倒し、一歩も先に行かせなかったという勇気と機転、戦闘能力のある少女で、タイム・ブレットは潜入任務で相棒が必要な時は彼女を指名することになっている。

「目の具合はどう？」

「先輩に貰った眼帯のおかげでばっちりです」

にっこりと少女は微笑んだ。

「よかった。でも格闘戦の時は死角に注意するんだよ……まあ、君の場合はほとんど心配しなくてもいいけど、それでも、言っておかないとね」

「はい！」

素直ない「後輩」にプレットは微笑む。

「で、どうしたの？」

「はい、例の金塊と人身売買の輸送ルートとスケジュールを調査室が掴んだと……今夜、かなりの金額の取引があります。一般戦闘班の全員で当たることになるそうです」

「……判った。どれくらいの規模になる？」

「金塊が三百トン、麻薬が二千トン、さらに気象兵器の設計図を始めとした国家機密の取引もあるみたいで」

「大きすぎるね」

「ですから、上層部はスーパーヒーロー達は本部に控えて貰って、先輩に協力を仰ぐ他は、我々一般捜査官だけで対応しようと言うことになっているそうです」

「ありがとう」

時折一般捜査官もスーパーヒーローも、プレットがスーパーヒーローの側だと言うことを忘れる。この後輩はちゃんとそのことを気にしてくれているのだ。

それが少し嬉しい。

「とりあえず、これが本ネタなら、プロウジョブだけじゃなく、かなりの数の犯罪組織が撲滅出来る。頑張ろう」

「はい！」

こつくりとハンナは頷く。

「あ、そ、そのさういえばその、せ、先輩……」

「？」

「こ、今度の定時休暇なんですけれど……」

おそらく、一般捜査官同士の飲み会だろうということとは判っている。

「あ、ご、ごめん……ちよつと溜まってる案件があつて、それを処理しないといけないから、ごめん」

そう言つてプレットは頭を下げた。

「まさか、本当の事は言えないし……このころますます「強く」なつてきてるしなあ……」

「今度の長期休暇の時は必ずそのスケジュール空けておくよ。みんなによろしく言つておいて」

「毎回ですよ……あの、そんなに大変なら手伝いしましょうか？」

「いや、あのこれはその、こ、個人的なコトでもあるから、君に手伝つて貰うわけにもいかないんだ！」

そう言つて少年は手を振つた。

「ヒーローつて大変なんです……」

「あ、う、うん。一応機密扱いの項目もあるしね」

「あ、プレット！」

脳天気なピョンピョンと跳びはね、エイズワンダーがこちらへ駆けてくる。

「この前は、ありがとう」

「いや、あの、うん、大丈夫だから」

無邪気にプレットの腕に抱きついて、豊富な胸をむにゆりと押し当てるのに、ハンナの目が一瞬つり上がった。

「これから待機なの、みんなと一緒にゲームでもしない？」

「悪い、ボクらこれから別件出勤なんだ」

プレットは赤くなりながら答える。

「……手伝おうか？」

「結構です、エイズワンダー」

そう言つてハンナはプレットの腕を取つて引きは

がした。

「我々は我々だけでやります、貴方たちは万が一に備えていてください」

「……うん」

何故に自分に敵意が向けられているのか判らず、

エイズワンダーは首を傾げた。
そして、そのことを、ハンナはかなり長い間後悔する事になる。

☆

ドクター・レグザリアは、元プロフェッサー・ラングリアこと、哲学者から工学博士になったネオナチ信奉者のジェームズ・T・エリクソン教授であり、その脳を移植されたマウンテンゴリラの、その首を培養して遺伝子操作をしたことで人間と同じ遺伝子を持ちながらゴリラのタフさとクロコダイルの皮膚と水中行動能力、優秀な頭脳を持つという大変やらしい出自の悪党（ヴィラン）である。

だが、同時に当時のプロウジョブ屈指の物理学者であり、それを応用した兵器の第一人者でもあった。

そして、プロウジョブの作戦立案者の頭脳がこれと融合したことから、のちに「コンマ一秒ズレても成り立たなかつた奇跡の罠」とNUDE、プロウジョブ双方から呼ばれる「プレット喪失（プレット・ゴーン）事件」が起こる。

有り体に言えば、この日一般戦闘班員を全て投入した摘発作戦は半分は本物だった。

金塊は一五〇トン、麻薬は二〇〇トンが本当で、

だが、同時にNUDE本部（当時）の上空に、ド

クター・レグザリアの作り上げた「因果律逆転結果装置」が現れ、基地の中に地底から掘削式ミサイルで毒ガスを流し込んで一般職員を抹殺した後、スーパーヒーロー達の能力を無効化してしまつたのである。

さらに、結界を発生させて外からの応援を遮断した後、人工重力を操つてヒーロー達の抹殺を目論んだ。

プレットとハンナがそのことに気づいて引き返したものの、すでに自体は決着していた……かに見え

た。

結界の向こう側には能力を失い、人工重力に押しつぶされる寸前のヒーロー、ヒロイン達がいて、こちら側の一般人では結界を破壊するには時間がかか

る。しかも、プロウジョブの援軍が上空を旋回して攻撃を仕掛けてくる有様だった。

すでに時間は真夜中。
因果律マシンの影響で、気温が下がり、雪が降る寒さとなった。

空を埋め尽くすプロウジョブのヘリや機動ユニットが地上のNUDE関係者を捜索し、片っ端から撃ち殺す中。

破壊されたビルの一隅、闇の中にハンナとブレットはいた。

「先輩、撤退しましょう」

ハンナの提案は当然と言えた。

「これ以上、私たちがまで殲滅させられたら、誰がプロウジョブと戦うんです！」

「判った」

ブレットはそれを受け入れた。

「君たちは撤退しろ、僕はやれる事がある」

「え？」

「あの中に入って、ドクター・レザリアと奴の機械を止めてくる」

「そんな、無茶です！ だって……」

「『あなたはただのテレポーターで、ヒーローじゃない』ってこと？」

言われてハンナは言葉に詰まった。

あの時、エイズワンダーにも来て貰うようにいえば、こんな事にはならなかったかもしれない、という後悔の念が今更ながらに顔を覗かせた。

「そうじゃないよ、ハンナ」

寂しそうに、ブレットは微笑んだ。

「能力があるからヒーローじゃないんだ、やれるこ

とをやるからヒーローなんだ……忘れないで」

「でも！」

「大丈夫、勝算はある……少しだけだね」

「先輩、行かないでください！」

ハンナは少年の背中にしがみついた。

「私……私……」

「ありがとう、ハンナ」

背中に隻眼の少女をしがみつかせたまま、静かにブレットは言った。

「でも、あの中には僕の大事な人がいる。だから逃げられない」

「私は！」

「さよなら、ハンナ」

声を上げようとするハンナの腕の中から、少年は消えた。

「ほぼ……いや、完全に同時に、そこから数メートル感覚にタイム・ブレットの姿が現れ、それはドクター・レザリアの待ち受ける空中の巨大な要塞まで続いて、消えた。

その一瞬のうち、ブレットが行ったテレポートの回数は数十キロ分……数万回を超えていたという。

「先輩！ ブレット！」

叫ぶハンナの声をかき消すように、空中要塞に閃光が走った。

因果律を弄ぶ機械の最後は、己そのものの滅亡だった。

一瞬で内側に折りたたまれた巨大な、三十階建てのビルに匹敵する体積の機械は、そのまま世界から消滅した。

エネルギーの痕跡すら残さず。

そして、プロウジョブはドクター・レザリアと莫大な資金を失い、NUDE側は一般戦闘班員多数と、

たったひとり、ヒーローを失った。

それから数年後、さらなる激闘を繰り広げた果てに、プロウジョブはついに壊滅することになる。

この戦いは「リヴァルサー事件」「モデル・クロウラン暗殺事件」「ゼロ・イジエクション事件」「カイン革命」とその後が続く大事件の前に「小さな出来事」として忘れ去られた。

ふたりの少女を除いて。

☆

「……………」

あれから二十年ちかくが過ぎた。

ハンナは、かつてのNUDE本部があったとある街のビルの屋上に立ち、夜空を見上げる。

転売され、一部を立て直され、現在は廃墟になった三十階建ての屋上に毎年、決まった日時に来るのは彼女だけの習わしだった。

今日がその日で、その日にまさか「タイム・ブレット」の名を聞くとは思わなかった。

「あなたも来てたの」

空の彼方から声がして、ショートヘアの美女がマントを翻してそのそばに降り立つ。

自分はそれから五年後の姿で固定されているが、この美女は違う。

長かった髪の毛はぼっさりショートにされているし、胸も腰も、あの当時からすると二倍以上の容積を誇る。

それが無駄なデブに見えないのは、一七五センチの長身と、鍛え上げた身体の上に脂肪が乗っているからだ。

むしろ今の彼女の体型を「美しい」と呼ぶ人も多いだろう。

「あなたはどうしてここへ？」

「このコスチュームにもう一度袖を通すようになってから、何となく、彼のことを思い出して」

そういつて初代エイスワンダーこと、遙アテナは空を見上げた。

「スーパーヒーロインやるようになって、初めて出来た友達だったから」

「……」

ハンナは無言で煙草に火を付ける。

「私、ここで突っ伏して、彼が空にある因果律マシンの所まで昇っていくのを見てたわ」

アテナの目が細められる。

因果律マシンは全ての原因と結果を操る。

その時、全てのスーパーヒーローはその能力を全てマイナスにされ、身動きすら出来ない病人同然の状態でされるがままになっていた。

「あの時、彼……一瞬だけ私の方を見て、微笑んでくれた。私の身体は因果律マシンのおかげで鉛みたいに重くなって、泣きながらそれを見送って……後は閃光が走って」

反対に煙草の煙を吐き出しながら、ハンナが続けた。

「因果律マシンが結界内にいるスーパーヒーローの能力を変換して無能力にするまで二秒、タイム・プレットはその間に七万回のレポートをして、ドクター・レグザリアを倒し、私たちを救ってくれた」

「そういえばあの頃のあなた、プレットのことを『先輩』って呼んでたわね」

くすつとアテナは微笑む。

あの頃の自分たちは未だ十代で、世界も自分自身のことでもまだよく分からないまま、一生懸命頑張るだけの存在だった。

その当時のことが頭を色々過ぎっていったからである。

だが、ハンナは無表情のまま、煙を吐き出す。

「複雑な心境だったわ、あの当時は。あなたのことが好きで悪党をやめてNUDEに入ったけど、先輩

は私のデータラメの経歴を信じてくれた人で……それに……」

「それに？」

「タイム・プレットは……先輩は、あなたの事が好きだったのよ。LIKEじゃなくてLOVEって意味で」

「……」

「気づいてた？」

僅かな沈黙。

やがて、観念したようにアテナは溜息をついた。

「知らなかった……その時はね」

目を伏せ、己の罪を告解するように続ける。

「でも、ダンナ(B・M・シューター)に出会って恋に落ちたとき、気がついたの。プレットが私を見る優しい目は、そういうことだったんだ、って」

「……あの頃のあなた、本当に鈍感だったわよね。裸に剥かれてすぐビービー泣いてたくせに」

「し、仕方ないでしょ！ 十代だったのよ！ 裸に剥かれて恥ずかしい目に遭わされたら、そこから立ち直るので精一杯だったもの！」

「先輩の前で何度絶頂して潮吹いたと思ってるのよ。普通、それでもかばってくれて、イヤらしい目で見ないような優しい相手には恋心抱くでしょうに！」

珍しく、ハンナの声のトーンが上がる。

がつくりと、アテナは項垂れた。

「……子供だったのよ。自分の恥ずかしさから立ち直ることだけで精一杯で。親切にしてくれるレポートに感謝するだけで手一杯で……彼の心まで察してあげられなかった」

素直にしよげかえるアテナの前に、ハンナは表情を緩め、溜息をついて煙草をくわえなおした。

「私は、もう一步踏み込めば良かったと、今でも思ってる……たとえそれが不可能な事でも」

「時は……巻き戻せないものね」

「たとえ巻き戻しても、先輩は私の思いには答えてくれなかったと思うし、あなたに思いを打ち明けることもなかったと思う」

「？」

ハンナは折りたたんだ古い紙を上着の内ポケットから取り出した。

「これ」

「何？」

「先輩の医療記録……昨日、廃棄される前にくすねてきたの。感傷的な気分だったから。ここで燃やそうと思っただけど、最後にあなたに見せてあげる」

「……身長一六〇センチ、体重四五キロ……そうそう、本当に綺麗だった、女の子みたいで……能力の初発動は両親の死に際して。身体能力の強化、再生能力、適応能力の増強が認められるものの、短距離テレポート・レーション以外の能力が発芽しなかったため、ランク〇として分類される……懐かしい言葉ね」

懐かしそうに目を細め、真正面を向いたプレットの顔写真に指先で触れていたアテナが、その先を讀んでいて眉をひそめた。

「これ……どういうこと？」

「誹謗中傷とか、そういうのじゃないわ、極秘事項で、事実よ」

アテナの方へ向きもせず、ハンナは素っ気なく告げ、煙草を靴底で踏みにじった。

「能力の使用と増大に正比例して、性器と性欲の増大……定期休養時には二四時間特別室での自慰行為が必要で、普段も性欲抑制リングを男性器に装着、当人は数回におよんで性器切断、あるいは性転換を希望するも、状況が変わらないと医療チームの説明により理解納得、現状維持を選択……なによ、これ！」

アテナの声は悲鳴に近かった。

彼女もすでに少女ではない。世俗の裏表を見てきている。

だが、それでも少女だった頃の思い出の、しかも自分たちを救ってくれた人物の「追加項目」はショクだったらしい。

「だから先輩は、私たちに必要以上に近づかなかつたし、他の異性も、同性も近づけないようにしてたのよ……嘘だと思ふならそれ、最後に当時の記録動画が入ったマイクロカードが貼り付けてあるから、再生するといいわ」

「……………」

アテナは項垂れた。

「いつ知ったの？」

「去年……………先輩に幻滅した？」

ふたりの間に沈黙が落ちた。

秋の星空は冴えて、そのふたりを見守る。

やがて、アテナが口を開いた。

「ウブで潔癖だっただけの娘時代ならね」

「今は？」

「それでも……………また、ブレットに会いたい。会えるなら、会って、今度は抱きしめてあげたい。私は、まだ彼にお礼を言っていないもの。彼が命がけで助けてくれたから、私はあの人に会えた。クララの母になれた……………そして、ここにいます。肉体のことは彼のせいじゃないもの。むしろ、そのことがなければ、あの人に前に、ブレットの思いに応えられていたかも知れない。」

「奇遇ね」

二本目の煙草に火を付け、ハンナは夜空を見上げた。

「実は……………私もよ。今なら、あの人の全てを受け入れてあげられる……………いえ、知っていればあの当時だって」

声にやや湿ったものが混じる。

「あなたを愛してるのに、このことを赦すまで一年かかった。あなたの幸せを心から祝福できるようになるまで、さらに半年かかった……………今じゃ、この

日が近づいているのに気づかなければ、先輩の顔も忘れてる。でも、やっぱり先輩にもう一度会いたい、そう思う夜があるのよ。今でもこの地下の扉を開けて、あの控室に行ったら、先輩が入ってきてあたしの眼帯を褒めてくれるんじゃないかって」

「そういえば、ブレット、ずっとあんなの眼のこと、気にしてたものね……………眼帯までプレゼントしたっけ」

「あれ、今でも持っているのよ……………あの事件があった以来、つけることはないけど」

「そういう所、ロマンチストね」

「……………あたしだって、鬼じゃないわ」

ふたりは並んで、空を見上げた。

ひとりだけ唯一恋した男性を。

もうひとりだけ、初めての恋の相手になったかも知れない相手のことを。

それぞれに想いながら。

このとき、同時刻、そして別の世界で起こることなど、まだ知りもせず。

☆

目覚めたとき、桂川マモルが見たものは、砕け散った装甲扉と、空っぽになった「因果律弾頭（コーサリテイ・ブレット）」の保管用小型金庫という事実だった。

「くそ！」

炸裂して燃え尽きた閃光手榴弾五個を蹴り飛ばし、マモルは何とか外に出た。

追わねばならない。

幸い、今日これから実行するつもりだったので装備品は全て身に纏っていた。

「せつかくあの弾頭用の銃も完成したっていうのに！」

「一年頑張ってきたんだ、悪党のために失敗してたまるか！」

自分自身に言い聞かせるようにして外に出る。廊下のあちこちで火災が発生していた。

強盗犯はこの世界のNUDE改めザ・ヒーローズ・ネットワーク・オブ・エンカウンター・リーグ

ル・アソシエイツこと、略称THE N R A（ゼンラ）

の本部に、衛星軌道上から七つの人工衛星のパーツ

とスペースデブリ四五〇〇個を落下させ、三四個を

命中させている

それだけに装備のマスクを着用してオーラトレーサーを起動させると、相手の興奮したオーラがすぐに識別できた。

「逃がして溜まるか！」

走る。

テレポーターションはオーラトレーサーを誤動作させてしまうので走るしかないのがもどかしいが、

やがて、敵は建物の中央の吹き抜けのさらに上に向かっているのが判った。

こうなれば話は早い。

一気にマモルはテレポーターした。

数メートルおきに、ほんの十回で相手に追いつく。

「そいつを返せ！」

だが、その細身の相手はマモルの声を無視して屋上を蹴って吹き抜けの上へ飛び出した。

テレポーターでそれを受け止めようとしたマモルは

「何か」にはじかれて、屋上に叩きつけられる。

「え？」

細い、針金人形そのままの人影は落下して……………

淡い光の粒子になって消えた。

「まさか……これ……」
センサーを変更する。

「……間違いない、これ……多次元トンネルだ！
やつめ、やつぱり『ワイヤーマン』か！」

マスクを跳ね上げて目をこらす。
よく見れば吹き抜けの始まりにうつすらと陽炎の
ようなものが見える。

「帰れる！」

「さて、ブレット！」
後から追いかけてきたらしい、別の仲間が声をあ
げた。

「その他次元トンネルは不安定だ、君の世界に戻る
どころか、どこか別の次元……いや、次元の狭
間を永遠にさまようことになるかもしれんぞ！」

彼のいた世界ではプロウジョブ側の戦闘要員だっ
た、昆虫そっくりなプロフェッサー・インセクトロ
ンが叫ぶ。

「構わないさプロフェッサー！ 解毒剤を持ってい
るのに、猛毒を放置するわけにはいかない」

振り向いてマモル………タイム・ブレットは微
笑んだ。

「一度死んだ命だ。それにタイム・ブレットはこう
見えてもヒーローなんだよ！」

そう言い置いて飛び降りた。

ACT2 思い出は銃弾と、友と娘に。

☆

二代目エイズワンダーこと、遙クララにとって、
「狙撃」という言葉には苦い思い出がある。

ついこの前、彼女は念力による弾丸という厄介な
能力をあやつる敵に、完膚なきまでに叩きのめされ
た。

しかも二回。

そのトラウマが残っている。

だが、そのトラウマに逃げ込むほど、弱い少女で
も無かった。

プロウジョブのメンバーがその日、落成されたば
かりのハイエンドタワーに立てこもり、付近の住人
を片っ端から狙撃して回っているという連絡を受け
たとき、彼女の胸に燃え上がったのは義憤であり、
恐怖をねじ伏せる勢いの正義感だった。

なによりも、負けず嫌いの性格が己の内側にある
恐れを克服したいと願っていたのである。

だから、駆けつけると同時に相手の射線を割り出
し、即座にその軸線上に自分を晒した。

重い、四〇ミリ口径の銃弾が彼女の交差した腕の
上で炸裂する。

（大丈夫……奴のとは違う！）

仲間達を傷つけ、自分を散々弄び、さらし者にし
たヴィラン、「ポイントブランク」の念弾攻撃とは違
う、物理攻撃だと言うことに安堵しながら、彼女は

そのまま銃弾の来た方角へ弾丸に負けぬ速度で飛翔
する。

☆

一瞬の落下が、横へ突き飛ばされたような動きに
変化し、タイム・ブレットはたたらを踏むようにし
て、何とかコンクリートの地面の上に降り立った。

「ここは……？」

首をひねったタイム・ブレットの背後から「ワイ
ヤーマン」の名前通り、直径三ミリ程度の太さの針
金をよじって作ったような人型の枠（アウトライン）
が襲いかかった。

首に絡みつき、締め上げるのを、ブレットは腰の
ナイフを抜いて迷うことなくその先端を針金を構
成する針金そのものに引っかけた。

「おおっとお！」

それを強く上に引き上げる前に、するりとワイヤ
ーマンは飛び上がりくねくねとうねって地面にわか
まると、素人の作った人形アニメのようまたスル
スルと立ち上がる。

「厄介な刃物持ってやがるぜ、ケケケツ」

宇宙飛行士になり損ねた街のチンピラが、液体金
属の実験室に潜り込むことで誕生した、変幻自在の
生きた金属で出来た悪党（ヴィラン）は出自の知れ
る耳障りな笑い声をたてた。

「このヤロー、三日もオレっちを待たせやがってよ
う……息子の為にもさっさと死にやがれ、ってんだ」

三日、という言葉に首をひねりながら、しかしブ
レットはヒーローらしい最後通牒を突きつける。

「因果律弾」を返せ、ワイヤーマン。この世界で使
おうにも、僕がいる限りは役に立たないぞ……返さ
なければ、実力行使する」

「だから、お前には死んで貰うのよ！ あの弾頭が
『世界の毒』になるためにな！」

言ってワイヤーマンはどこからともなくベレッタ
M12Sマシンガンを取り出した。

けたたましい銃声が轟き、弾丸を受けて周囲の壁
が砕け散る。

「相変わらず、派手好きだね、ワイヤーマン」

少年の声はその背後から聞こえた。

「レポーターに、そんなものを使うなら、タ
イミングを計らないと」

振り向くその首筋に、ワイヤーマンを切断できる硬度
と鋭さを持ったナイフが切り込んだ。

「持ってない……？」

一時的に仮死状態になって、ただの一本の針金に
変わったワイヤーマンをしばらく上下に振って、彼
の「ポケット」から落ちて来たガラクタの中に因果
律弾がないことを見て取る。

「さっき、三日って言ってたけど……ってことはも

うどこかに運んだあとなのか」

ぐるぐる巻き取ると、捕獲用の異次元ケースの中に放り込み、改めてプレットは周囲を見回した。

「ここは………何処だ？ 何となく見覚えがあるような、無いような……」

腰の無線機を取り出し、電源を入れる。

「オープンチャンネルD、こちら『タイム・プレット』、繰り返す、こちら『タイム・プレット』、NUDE戦術第四班、応答せよ、こちら『タイム・プレット』、登録ナンバー215……」

言いながら、周囲をさらに見回し、マスクのゴーグルに付属する望遠機能で遠くを観察すると、見覚えのあるシルエットが空中を、見たことも無い巨大なタワーへ向けて直進していくのが見えた。

「アテナ………エイスワンダー！」

一瞬、そう呟いたものの、微妙な違和感を感じる。

だが、それ以上に強い不安を感じたプレットはそのままテレポートで塔へと移動を開始した。

☆

NUDE本部、戦闘司令室。

「司令、変な通信が入ってます」

オペレーターのとおりが、タワーに立てこもった狙撃犯へ向けて飛行するエイスワンダーを監視カメラ越しに見守るハンナに告げた。

「なんだ？」

今回の敵は単なるチンピラクラスがエイスワンダーの消耗を狙ったこすっからい嫌がらせで行っているらしいと判断し、ハンナはオペレーターに尋ねる。

「それが………廃止になった緊急周波数でNUDE戦術第四班とか、『タイム・プレット』と名乗ってまして………そんなヒーロー、登録されてましたでしょうか？」

☆

「？」

自宅のテレビで、いつでも飛び出せるようにコスチュームを大慌てで着用し、はらはらしながら娘の活躍を見守っていたアテナは、エイスワンダーとしての超感覚で、懐かしい「現象の立てる音」を聞いた。

二十年以上前、絶えてしまったはずの「音」。

……短距離テレポートの起こす時空の震動と、質量分一気に押し出される空気の音を。

「そんな……まさか？ どうして今頃？」

思わず立ち上がり、周囲に感覚をさらに研ぎ澄まして「網」を張る。

短距離テレポートの気配が立てる「音」はそれから断続的にアテナの感覚に響いてきた。

「うそ………気のせいじゃない？！」

愕然と呟くと大慌てで庭に飛び出すと、地面を蹴った。

たちまちのうちにマツハを越えて娘の元へ向かう。

☆

相手がエイスワンダーだと知ってロケットランチャーを構えるのを、クララはすぐに目視したが、発射されたミサイルは彼女がかわずまでもなく、飛行中に消滅した。

「え？」

首をひねった瞬間、背中を巨人の足が蹴り飛ばすような衝撃と爆発音、そして高熱。

「きゃああああ！」

悲鳴をあげながら、クララは前へ向けて吹っ飛んだ。

さらに眼前に一発、

さしものNUDE謹製のエイスワンダーコスチュームもこうなるとその形状を維持できず、むしろ中身を保護するために急激に炭化する。

「！」

次に右殴りに来た一発で胸があらわになるのを慌てて両手で隠す。

集中が切れ、飛行能力の発動が停まったため、彼女は落下を始めた。

「しまったあああ！」

慌てて意識を集中しようとするが、さらに立て続けのミサイルが予想もしない方向から連続して出現して、彼女を炎の拳で弄ぶ。

とどめとばかりにタワーの内側から、指向性爆薬が爆発し、クララは嵐に飛ばされた木の葉のように空中を舞いながら気を失い、煙のみを身にまとい落ちていく。

☆

エイスワンダーが落下する先。

タワーの根元の地面が内側から盛り上がり、アスファルトが砕けて、大量の触手が生えた球体がわざわざと身を現した。

真つ黒のボディには金文字で「tentacle is

ooooooooooooooooo!! (触手、最っ高〜)」と描かれている。

(ヒイハア！)

球体の中から、下卑た男の声が響いた。

「エイスワンダーの処女、ゲットおっおっ！」

無数の、軟質樹脂で出来ていると思しい触手の先端がなめらかな三角形に膨らみ、先端に切れ込みが入るとじくじくと唾液のような粘液を分泌させた。

さらに球体ボディの一部が開き、特殊なポリマーリングル液に浸かった脳みそと、それに繋がる眼球がわざわざ耐爆ガラスケースに収められて顔を出す。

「オレはロケンロール・テンタクル！この特性発情

ジェルで、自分でお〇んこ開いてお願いされまくるまで攻めて攻めて攻めて、責め立ててやるぜええ

え！」

声はボディのスピーカーから轟いた。

「どうやら脳と眼球以外を全て触手に変換したサイボーグらしい。」

「この特殊ジェルはオレの精液の培養品だ、一発で妊娠させてやるぜえ、孕ませてやる、孕ませてやる、ジャスゴー・マリッジ！」

「どうしてこう、プロウジョブの触手系怪人つてのは下品なんだろう？」

溜息に混じって、特殊粘着シールつきのC9爆薬が、球状ボディのサイボーグの脳の収まった容器の表面にびっしりと装着された。

見上げたロケンロール・テナタクルの眼球が映したのは、細い、しなやかで中性的な体つきの人影。

身体には古くさいボディーマーとタクティカルベスト、小柄ながら長い手足には投擲用ダガーが何十本もケースごとぐるりと巻かれていて、右の太腿にはH&KのG3ライフルを切り詰めたと思しい銃が収まっている。

顔には金属のマスクとゴーグル。

「だ、誰だお前エ！」

答えはなく、その姿は瞬時にかき消え、同時にタワーの窓際に一斉に現れた。

「ロケンロール・テナタクル」を名乗ったサイボーグが次のひと言を発する前に、三秒リミットの信管が作動し、爆発する。

耐爆ガラスはそれでも何とか脳と眼球を守ったが、脳そのものは激しく容器の内側にぶつかり、脳震盪を起こしたサイボーグはよたよたと歩き回ったかと思ふとその場にひっくり返った。

☆

クララが目を醒ましたのはタワーの真下ではなく、どこかのリネン室だった。

柔らかな清潔なシートが身体を覆っている。

「ここは……」

「目が覚めた？」

低い声で、しなやかな体つきに、かなり古いデザインのタクティカルジャケット、太腿にライフルをぶった切ったような無骨な銃を装備した人物。

「ここはタワー近くのホテルのリネン室。出来ればもっと離れておきたかったけど、敵の展開が早すぎて、ここに逃げ込むのが精一杯だった」

「あなたは……」

「静かに」

ゴーグル状の仮面の口元に人差し指をあてて、相手はそう囁いた。

同時にクララの超感覚は、彼女の周囲に武装したプロウジョブの下級兵士がウロウロしていることに気づく。

さらに、空には巨大な飛行装置がとどまっている。

エンジン音からして、NUDEの物では無い。

となれば目の前の人物の言うことは事実だ。

それに全裸の状態で大立ち回りはまだしたくなかった。

「僕の名前は『タイム・プレット』。落下する君を助けてあげたのは僕……で、ふたつほど聞きたい」

中性的な体つきと声だったが、顔を覆うゴーグル状のマスクを上に跳ね上げると、美少女にしか思えない顔が現れた。

だが、クララはすぐに彼の骨格から、女性ではなくて男性だと見抜く……この辺はユニセックスな現代に生きる少女ならではた。

「ここは何処？ それと……エイスワンダーそっくりな顔と、格好をしている君は誰？」

☆

エイスワンダーの衣装に身を包んだアテナが、娘のいるタワーの手前、空に浮かぶ浮遊機械を見て、そのまま地面に降りたち、知覚能力を使って再観察

したのは、これまでのエイスワンダーとして培ってきた直感が囁いたからだ。

「いやな気配が『見え』るわ」

二十年以上前、彼女が見た因果律マシン。

あれと同じ周波数のエンジン音であり、周囲にまき散らされている粒子の残像。

「……」

内部を透視してみると、緑色の、五〇〇ミリリットルのペットボトルほどのサイズをした結晶体がこの浮遊機械の動力源であり、周囲に張り巡らされた奇妙な力場の源だと判る。

「どうして、因果律マシンがこんな所に……第一、あれはプロウジョブでも再生不能だったはずじゃ……」

もしも再生が可能なら、プロウジョブは彼女が現役時代に何度でも因果律マシンを使用したはずである。

ともあれ、あの装置の側に近づけば、昔のようにエイスワンダーとしての力を失い、無力化するの間違いはない。

（クララがいるのに……）

アテナは唇を囁んだ。

あのテレポートの「気配」も気になるが、それ以上に娘の身が案じられた。

装置のそば……恐らく半径三キロ以内……にいれば、間違いなくクララの能力は失われている、のみならず身動きすら出来ないかもしれない。

「アテナ！」

なじみのエンジン音がして、真っ黒のランドクルーザーに乗ったハンナたちが駆けつけてくる。

「やっぱりあなたもアレのことに気づいたの？」

「ええ、こっちの分析班からも報告があったわ。地下に居る『レイヤード・アイ』が因果律の歪みを感じたって」

今こちらのNUDEの基地へ来ている「盲目にし

て全てを見る」この出来る少女ヒーローの名をハンナは告げた。

「間違いない、あれはあの時に消えた因果律マシンの一部……ひよつとしたら新型かも知れない」

「効果範囲は？」

「恐らく二キロ……それと、昔と違って能力を無効化するのに二秒も掛からないわ。五千分の一秒、って話よ」

「……………あれの対処方法は、二十年前にダンナと話して思いついてるわ」

不敵な笑みをアテナは浮かべた。

「どういうこと？」

「あのマシンがゆがめられるのは因果律だけ、物理攻撃は全て周囲の武装で対処してる……………でしょ？」

「ええ。でもあの要塞を打ち破るのはしばらく掛かるわ」

「やつら、その間に無力化して動けなくなったクララを人質に取るか、殺すかしてしまおう……………だから、今度は先手を打つ」

アテナの姿がかき消えた。

突風が巻き起こり、ハンナは素早く腕で顔を覆って埃を避けた。

☆

「……………なんてことだ……………」

最初は信じなかったが、クララの差し出した、ホテルの従業員の忘れ物らしいタブレットを見ながら、タブレットは溜息をついた。

頭の中が混乱しそうになるが、同時にワイヤーマンの言った「三日間待った」という言葉の意味が理解出来る。

あの時、自分が時空の門へ飛び込むまでに二十秒ほどしか遅れていない。それが三日になるということは、こちらと向こう側の世界では時間の流れに差

があると言うことだろう。

「あれから二十年以上も経っているのか……………どうりで街の風景が見覚えがあるのに、変わってると思っただけだ」

それからじつとクララを見つめる。

「エイズワンダーが二代目になっても不思議じゃない」

「本当にあなた、二十年前のNUDEの人の？」

クララの疑問は当然で、NUDEの職員はほとんど女性で構成されている。

「一応、ヒーロー登録はされてる……………いや、もうされてた、かも。コードネームは『タイム・レット』」

一般戦闘班所属のC級だけだね……………僕のいた頃のNUDEにテレポーターの女性はまだいなかったから……………それに、最初に能力を発動したときに、助けてくれたのがNUDEだったし」

「C級？」

「ああ、やっぱりそれはもうなくなったのか……………先代のエイズワンダーが来る前まで、NUDEはヒーローの使える能力の数ごとに三段階にカテゴリー分けされてたんだ。テレポートと再生能力だけの僕がC級、君の先代、エイズワンダーは五つ以上あるからA級」

「ミス・マーズヴェリックは知ってる？」

「うん。ミス・マーズヴェリックとスターゲイザー、それと彼女（エイズワンダー）は特別だったよ……………あの頃から、世界でA級ヒーローは彼女たちを含めて十人もいれば良い方だったと思う、今は？」

「あまり変わらないわ」

頭の中できっと勘定してクララは答える。

「そうか……………世界はそんなに変わってないのか」

くすりとタブレットは微笑む。

「でも驚いたよ、プロウジョブはまだ存在しているのも、だけど、まさかエイズワンダーが二代目で、ゴジラの新作、ガンダムにスターウォーズの新作、

おまけにドクター・フーの新作……………二十年以上前と同じ文字が新聞や雑誌に並んでるなんて！」

思わずクララはくすつと笑ってしまふ。

「ようやく笑った」

にっこりとタイム・レットは微笑む。

「でも、少しは世界は良くなっているんだろ？ うねきつ……………こんな機械もあるし、それに君みたいな子がエイズワンダーの名前を継いでくれている」

「……………」

一瞬、きよとんとしたあと、クララは顔を真っ赤にした。

「いや、あのそんな……………あたしなんて、初代のエイズワンダーに比べたら……………すぐ裸にされちゃうし、格好悪くて……………」

「そんなことはないよ」

タブレットは頭の中で、今はどこにいるか判らない初代エイズワンダー、アテナに詫言ながら言った。

「初代エイズワンダーだって、最初の頃は君みたいに苦戦してた。あの当時のスーツは今よりも防弾製とか、衝撃に弱かったし、時にはスーツが高速移動に耐えきれなくて溶けてしまったりもしてた」

さすがに、敵に捕らわれてスーツ越しに兵器を弄られ、絶頂までした（しかもそれが生まれて初めてのこと、落ち込んで一週間自ら地下にドリルのように回転して潜り込み、出てこなかった）という話は口にしない。

「そのたびに、彼女は泣いたり落ち込んだりもしたけど、必ず立ち上がって、マントをなびかせて、悪に向かって胸を張って戦っていたよ」

自分にとってはつい一年前、この世界にとっては二十年以上も昔の話を、タブレットは語る。

「だから、君も負けない」

まっすぐに、クララの目を見て言った。

「……………あ、ありがとう」

真っ赤になって、クララはうつむいた。

「……………ひよっとして、あんまり直接褒められたこと、ないの？」

「……………」

こっくん、とクララは頷いた。

「わたし……ドジばかりで。一応なんとか敵はやっつけてるけど……それも多分、先代のエイスワンダーさんがフォローしてくれてるからだ、って思う」

「……彼女、無事なの！」

「この前……私が自棄になってある敵と戦おうとしたとき、助けてくれて……」

顔を赤らめ、少女は横を向いた。

それだけで、彼女が「エイスワンダー」という名前前に何を感じ、何を込めて口にかけているのかが痛いほど判る。

憧れ。

自分が抱いていたものよりも遙かに透明で純粹な、同性が同性に抱く尊敬と憧れ。

(アテナ……………君は、僕が居なくなっても変わらなかつたんだね)

そのことが少し嬉しかった。

二十年間の記録の中には幸せな引退は少なく、命を落とし、墮落し、あるいは零落したヒーローの姿もあつたからだ。

エイスワンダーだけは、その悲劇から逃れていたが、それは「記録が途絶した」というだけのこと、心配していたのだ。

「そうか、彼女は無事なんだ」

「うん。背中しか見えなかつたけど……………昔と変わらなかつたに格好良かった！」

「なら、良かった」

こくんと頷くと、ブレットは防弾ベストの背中側のジッパーを開けた。

防弾プレートの内側に入っているものを引っ張り

出す。

「後ろ向いているから二分でこれ着けて」

「え？」

そう言つてクララに手渡されたのはエイスワンダーの衣装だった。

「言つたでしょ、よく丸裸にされた、って。あの当時のNUDEの一般戦闘班で、エイスワンダーと一緒に作戦展開する隊員は全員これを持つのが義務だったんだ」

「知らなかつた……」

「多分、サイズは合うと思うよ」

「でも……」

以前、テレビのコメンテーターに「今のエイスワンダーの方が胸が小さい」と言われたことを覚えて

いるクララは躊躇したが、

「急いで、そろそろ敵がこっちに気づいたみたい」と言われて意を決してそれに袖を通した。

「あれ……………びつたりだ」

胸も腰もびつたりと衣装はあつらえたようにクララの身体にフィットする。

「そりゃあ、僕も一瞬見間違えたぐらいなもの……」

……………でも気をつけて、今のものよりも、作りはヤワだと思ふ」

「……………うん、判つた！」

よもや、二十年の時を過ぎてもエイスワンダーの衣装の素材構成が変わっていないとは、ふたりとも思いもしない。

「そういえば聞かせて、平行世界ってどうなの？」

最後にマントの位置を直しながらクララ。

「あまりこつちと変わらないよ。ただ、プロウジョブが減んでも悪党は跋扈してて、G35が共同で作ったTHERRA(ゼンラ)って組織にNUDEは発展解消してる」

「全裸？」

「略称って、どうしてこう奇妙な物になるんだろう

ね」

「そういえば、そつちには私……………エイスワンダーはいるの？」

「いや、ゼノビアとアルテミスって子がふたりで『ツイン・ワンダー』ってコンビのヒーローをしてるけどね」

「へえ……………仲いいの？」

「ゼノビアにはそこそこ。アルテミスには多分嫌われてる。彼女は多分、ゼノビアが好きだからね」

「あら……………」

「まあ、つまり世界に一人しか君は居ないってことさ。エイスワンダー」

苦笑しながら、ブレットはホルスターからS&W製M645自動拳銃を引き抜いて、ドアを蹴破る勢いで外に飛び出した。

銃声がひと連なりになって聞こえる。

数名のプロウジョブ下級戦闘員が足首を押さえて

転がる。

二十年前とは比べものにならない高性能の防弾装備も、可動する部分への45ACPの着弾衝撃を無効化するほどではない。

「ここを出る。僕と二メートル以上離れないようにしてくれない？」

「どうして？」

「それ以上離れたら、君は気を失うか、体中から力を失って倒れるから」

「え？」

「今空にいる機械は、そういう能力を持つてる……僕がこの世界から二十年、姿を消した理由はそのためだ」

複雑怪奇な説明を省いて、真相だけをブレットは口にしつつ、素早く弾倉を交換し、敵の武器(アサルトライフル)を奪う。

「基本はM4か……………てっきりG3のほうが残ると思つただけだな」

そう呟きながら装弾を確認し、予備弾倉も奪い、交換する。

「とりあえずあのマシンの効果範囲から撤退して、NUDEに合流、対策を立てる」

「それしか無いわよね」

「そういうこと……さあ、いこう！」

さしのべられた手を、クララは握った。

瞬間、世界が連続して消え、現れ、また消えることを数千回繰り返す。

☆

「動き出したか」

銀色の、輝く指がコンソールの上を走る。

「爺さんはどうやら無力化されてるらしいな」

背後で、大雑把な銀色の線で、背広を着けた男の、線だけで描かれた古くさいポリゴン絵として空中に描かれた男……二代目ワイヤーマンが腕を組んだ。

「仕方がねえだろう親父。爺ちゃんはそのタイム・プレットとは因縁あんだからよ」

銀色の指の持ち主はよく見れば驚くほど細い銀の線が寄り集まって「面」を構成しているだけで、やはり親父と呼ぶワイヤーマン二代目と同じく、針金のような身体で構成されていた……もちろん、こちらがワイヤーマン三代目である。

「俺らワイヤーマン一族からすれば、このままプロウジョブの中で下っ端扱いされ続けることから脱却することが重要だよ。あんなザコのC級ヒーロー、アレをエイズワンダーの中にぶち込んでからでも遅くねえ」

そう言つてワイヤーマン三代目は、親指で自分の背後を指し示す。

「親子三代、下っ端戦闘員の辛うじて上役、つてんじやあ泣けてくる、つてのは判るが、やっぱり応援をやった方が良くなかったか？」

「かまわねえさ、親父は輪郭線だけの存在だが、そ

の分ダメージから抜け出るのが早い。あと十分もすれば復活する。そしたら必ず奴を追いかけてくる。

後は親子の呼吸で何とかするさ……で、どうだ、エイズワンダーのオーラは動き出したか？」

「ああ、やっぱりあのC級野郎が一緒なだけに、能力はまだ無効化されてねえ」

「この結晶は奴の因果と存在時間そのものだからな……元の主には害をなさないってのは問題だ」

そう言つてワイヤーマン三世は後ろを振り向いた。背後には、初代ワイヤーマンが平行世界の隙間に潜り込んで奪ってきた、「因果律」の塊が弾頭となつたものが浮いている。

「奴を引き離すのはちよいと仕掛ければいいだけのことよ、それより、しくじるんじやねえぞ三代目（サード）。こいつは一発こきりだ」

「判つてる、どんな手段を使つても、こいつだけはあの小娘の土手っ腹に叩き込んでやるよ」

「おうさ、エイズワンダーさえ倒してしまえば俺たちは大出世、幹部………は無理としても、戦闘員管理部の役員クラスぐらいにはなれるつてもんだぜ！」

「そうすりや給料は三倍だ！」

大きいのか小さいのか判らない望みを口にしながら、親子のワイヤーマンたちは笑い合った。

☆

成層圏ギリギリの空に、初代エイズワンダーはい

た。

「さあて、行きますかね」

両の脇に抱えていたものうち、ひとつを空に放り投げ、もうひとつを小脇に抱え直して垂直に急降下を始めた。

☆

効果範囲の三分の二までの距離は、なんとか連続

テレポートで移動出来たが、プレットの体力はいったんそこで尽きた。

あとは徒歩移動になる。激しい銃撃戦になった。人気のなくなつた街中、

「このおお！」

どかん、とビルの壁の破片や駐車されていた自動車がプロウジョブの戦闘員たちが逃げ惑う中次々と投げつけられ、さらにそこから隠れて銃を撃とうとする連中をS&WM45の銃弾が狙い撃ちする。

クララは最初、プレットを抱えて空を飛ばうとしたが、その能力の効果範囲は最低でも半径数メートル必要なため、辛うじて爪先が浮く程度でどうしようもなかった。

だが、プレットから離れなければその基本的能力は失われないので、彼の盾になり、あるいはヒートビジョンで敵をなぎ払い、あるいは壁を砕いてそれを投げつけたりすることで敵を駆逐しながら移動する。

「さすがエイズワンダー！」

銃の弾倉を取り替えながらプレット。青ざめた顔は、冷や汗で濡れている。

「身体、大丈夫？」

「なんとかね」

微笑んだ。

以前「因果律マシン」のコア部分と共に数万回のテレポーションを繰り返して、次元の彼方に出た時は死ぬ覚悟だったから何とかだったが、今回はそうもいかない。

（死に怯えているのか、僕は）

自嘲する。

（もう、二十年も経つて……僕はもう死んでいるのも同じ存在だぞ？）

だが、体力が切れてしまったのはどうしようもない。

とりあえず、徒歩で行けるところまで行き、出来

ればそのまま、無理なら体力の回復を待つてもう一回、と考える。

因果律マシンはその特性から一度稼働するとその場所から動けなくなる。

追いかける心配は無かったが、プロウジョブの作業員たちは別だ。

雲霞のごとくわらわらと沸いてくる。

☆

「エイスワンダーを感知」

落ち着いた声が「因果律マシン」のシステムAIから発せられた。

「ど、ど、どこだ！」

ワイヤーマン三代目の声がうわずって響く。

「我々の真上、千メートル上空です。エイスワンダー、効果範囲外から何かを投擲しました」あと三十秒で接触します」

「た、対空防衛開始！ 打ち落とせ！」

「了解、対空装備解放、発砲開始します」

AIの声に重なって、この「因果律マシン」の各所が開いて、対空装備が解放され発射される銃声やミサイルのロケットモーターの作動する音が重なって響く。

「お、親父、ドウしよう?!」

「慌てるんじゃないやねえ、三代目」

腕組みして、安っぽいポリゴンのような二代目ワイヤーマンが浮き立つ息子を諫めた。

「若いエイスワンダーがピンチになると、古いほうが出てくるのは当然だ。いいか、そのまま計画通り、俺たちは慌てふためいて奴を相手に戦い、派手に負けるんだ……爺ちゃんもそろそろ復活する、お前は計画通りにやるんだ」

「お、親父、でも……」

「いいか、俺たち一族の給料と地位が掛かっている。博打は打たなきゃ駄目ってモンよ」

安っぽいポリゴンに不敵な笑みが浮かんだ。
「判った……親父、ここは任せるぜ」

「いいか、ギリギリまでここにアレがあると奴に思わせる必要がある、お前こそタイミングを間違えるんじゃないぞ」

「おうよ！」

そんな、感動的な親子の会話に水を差すように激しい震動が彼らの居場所を震わせ、いくつかの機能不全を示す表示が壁のモニターに表示され、AIが報告した。

「エイスワンダーの投擲物の迎撃を確認、建築資材用鉄骨だったと思われる」

「本人は？」

「鉄骨の後方三百メートルから落下を開始あと二十秒で接触します……迎撃システム稼働中ですが、先ほどの鉄骨の残骸で破壊された部分のカバーが出来ません。エイスワンダーはそこの中を突っ込んできます」

「効果範囲に入れば死にまじまじぞ！」

表情が僅かに明るくなるデラックスなフルポリゴンである息子、ワイヤーマン三代目をじろりと二代目が睨んだ。

「何か策があるんだ、あの女はいつもそうなんだ……だから息子よ、油断せず、計画通りにやるんだぞ」

「わ、判った親父！」

そして、「因果律マシン」の効果範囲ギリギリで軌道を変えて上昇を始めたエイスワンダーの背後に、もう一本の鉄骨があるとAIが告げ、その鉄骨が「因果律マシン」本体をぶち抜いたのはそのきっかり二十秒後のことである。

☆

「因果律マシン」を鉄骨が貫く二十秒前。

どすん、という音がブレットとクララの頭上からした。

「！」
上を見ると、ビルの上、先ほどブレットが脳震盪を起こさせたはずの「ロケンロール・テナタクル」が着地してこちらへ無数の触手を伸ばしてくる所だった。

「エイスワンダーのアナルバージングゲゲゲゲゲゲゲゲツットおおお！」

ひしゃげた外部スピーカーから甲高い声が叫ぶ。
「きゃあああ！」

クララの手足に触手が絡みつき、あつという間にブレットの側から連れ去る。

「いやああああ！」
形のいい太腿がぐいっと強制的に開かれた。

「ひひひひひひひひ！ くくくく、股布（股布…クロッチ、クロッチを、クロッチを破るよ破るよ、ややや破るよ！ ヒーハーア！」

M645を構えて何処を狙うか躊躇するブレットの目の前で、エイスワンダーのコスチュームの脚の付け根を覆う薄い布を引き裂いた。

「！」
思わず顔を背けるが、開かれた少女の秘められた場所は、先代のエイスワンダーに負けずに美しいという事実が網膜に焼き付くのは致し方ない。

「やめろ、馬鹿！」

「ううううううさい！ おおおおまえのおかげでまだ世界が、せか、せか、世界が揺れてるんだよおとおお！」

エイスワンダー相手とは違い、鋭く尖った槍となつた触手が飛び退いたブレットの足下のアスファルトをえぐり抜く。

「おおおとおおお、男、男シネええ！」

次々繰り出されてくる触手を避け、ブレットは奥歯を噛みしめてテレポートした。

体力が不十分な状態のままのテレポートで体温が下がり、急激な吐き気と共に口と鼻から鉄錆の味がする液体が噴き出すのを感じながら、ブレットは先ほどC4爆薬をしかけた透明な、脳と眼球を納めたカプセル部分の真上に立った。

指向性爆薬の連続爆破は、特殊な耐爆カプセルに僅かな亀裂を生じさせているのを、ブレットは知っている。

M645をその亀裂の交差点に向けて連射する。

二発目までは弾かれたが、三発目が透明なカプセルの表面に食い込み、ひと弾倉を撃ち尽くす頃には、弾丸はついにカプセルを打ち砕いた。

「ぎゃああああああ！ 脳が、脳がああああ！ 逃げる、逃げるうううううううう！」

脳と眼球を保持している特殊溶液があふれ、カプセルの表面を装甲版がさらに覆うと、ロケットモーターが作動して、脳と眼球を納めたカプセルを空中高く撃ちだした。

触手が力を失う中、地面に放り出されるクララ

二代目エイズワンダーを、ブレットは再びのテレポートで何とか受け止め、地面に膝を突いた。

「あ……ありがとう、ブレット」

片手で布地を引っ張り、股間を隠す少女の顔は真っ赤だ。

激しい疲労と朦朧とした意識が、少女の顔に、そっくり同じで微妙に違う別の少女の顔を重ねさせる。

「大丈夫だよ……アテ……ナ」

血を吐いたばかりの舌がくぐもった声を吐き出し、何とか笑顔を作る。

「え、今、なんて……」

「ごめん、クララ、ちよっとぼうつとしてる」

「血が……」

「大丈夫、行こう」

そう言って立ち上がるうとしたブレットの足首に何か絡みついた。

「！」

細い、金属の……針金。

腰の「簡易牢獄」に手をやると、そこからするとワイヤーマンの身体が出て行くのを指先で感じた。ブレットの銃を握る腕が針金で縛り上げられ、手首をひねりあげた。

「ワイヤーマン！ 再生には一日かかるんじゃないのか！」

「時代が変わったんだよ」

古くさいリーゼント姿のチンピラの外枠（アウトライン）に変化したワイヤーマンは高笑いした。

「あれから二十年以上経ってるんだ、俺だって進化する……おい、孫よ、今だ！」

「おうよ、爺ちゃん！」

声は、意外な程すぐ側……いつの間にか蓋が開いたマンホールの中から聞こえた。

そこから上半身だけを出した、着用した背広から肌まで同じ銀色で塗り込められた若者が、こちらへ向けてライフルを構えているのが見えた。

「！」

その銃口の奥に、ブレットは懐かしい「気配」を感じて戦慄した。

構えたライフルに装填されているのは、彼が二十年前、この世界で過ごすはずだった時間と運命が結晶になったもの……「因果律弾」。

「因果の塊が、その元になる存在を殺せば、俺らの望む世界最強の毒が手に入る！」

ワイヤーマン初代が、わざとらしい大声で叫んだ。

「やめろお！」

針金で腕がちぎれても構わない、という力を振り絞り、ブレットが銃をマンホールから銃を構える若者……ワイヤーマン三代目へと向けるよりも早く、

「ブレット！」

クララが飛び出して両手を広げ、立ちふさがった。「因果律マシン」が破壊されたのはその瞬間だ。

銃声が響いて、クララの身体がのけぞった。仰向けに倒れた少女の心臓の真上に、小さな穴が開いていた。

「やっつたああああ！」

ガツポーズを決めるワイヤーマン三代目の声をかき消すようなケダモノの咆哮が聞こえ、初代ワイヤーマンの悲鳴が重なった。

先ほど、ブレットがナイフで切断した箇所から引きちぎれるようにして、初代ワイヤーマンがバラバラになったのだ。

「きさまああああああああ！」

ブレットの拳が、ワイヤーマン三代目の顔面に叩き込まれ、引き抜かれたナイフが彼の身体をバラバラに切り刻むのは一瞬だった。

激しく血を吐き出し、ブレットは両膝を地面につきそうになったが、意志の力で立ち上がり、クララの元へ戻る。

少女は微かに息をしていた。

「良かった……即死じゃない」

安堵するその肩を、銃弾がかすめる。

生き残った他の下級戦闘員がまだいるのだ。反射的にM645を向けるが、スライドは後退しきついで、弾丸が尽きたことを示している。

仰向けにしたまま、ブレットは身体を丸め、クララの身体を守る。

防弾ジャケットに何発か弾丸が当たる。

「ウチの娘に、何すんのよっ！」

激しい怒声が頭上から降ってきて、懐かしいヒートビジョンが大気を斬り裂いて照射されるとき微妙な空気振動をブレットの耳が捕らえた。

「……え？」

よろよろと首を持ち上げ、頭を空に向ける。「……やっぱり、あなただったのね、ブレット」

大空にマントを翻し、彼女はそこにいた。

クララと同じく長かった髪は短くなっていて、胸も腰も、あの時とは比べものにならないほどにポリウムを増していたが、それはだらしなく贅肉がついたからでは無く、別の美しさに彼女が輝くようになっただけのこと。

何よりも、その顔は、あの頃のままの美しさだった。

「……アテナ……きみ……なの？」

「ええ、マモル。久しぶり」

そう言って微笑んだアテナ……初代エイズワンダーは、彼の知るあの優しく輝かしい笑顔そのままだった。

「よかった……」

〇級ヒーロー、タイム・ブレットはようやく桂川マモルとして微笑んだ。

同時に、自分が未だに彼女に恋をしているのだと確信する。

あとは、意識が遠のいて、消えた。

A C T 3 the 3 night 3 make love

☆

「あれはこの世界から消された僕のアカシックレコードの破片……因果律の塊なんだ」

桂川マモルことタイム・ブレットは溜息をついた。

「あの時、因果律マシンといっしょに時空の狭間に飛ばされて、ついた平行世界で色々調べて……何とか元の世界に帰れるように、と作ったのが因果律弾……僕が、この世界で送るはずだった全ての運命の塊」

数時間後、目を醒ました桂川マモルはNUDEの基地にある病院のベッドの上、コスチュームから普段着に着替えた初代エイズワンダーこと、遙アテナ

相手に事情を説明した。

応接セットはもちろん、完全防音まで施された高級個室である。

C級でもヒーローである。テレポードで疲労した肉体はほとんど回復していた。

クララに撃ち込まれた弾丸は、外科手術での摘出は不可能と診断された。

撃ち込まれた銃創はある、CTスキヤンやレントゲンによる調査でも弾丸は確認出来る。

だが、無敵の肉体を持つ少女の外科手術を行う道具は、さしものNUDEも保有しておらず、特殊な治癒能力を持つヒーロー、ヒロインたちを使っても

「弾丸」に触れることが出来なかった。

「見ることは出来ても存在をつかめない幻の弾丸」弱り果てたアテナが、マモルに相談したところ、彼は全てを明かしたのである。

「それを鍵にして、僕がこの世界に戻れば、因果と運命の欠落はふさがり、因果律弾は消え去って全て元通り……の筈だったんだ」

ところが、ワイヤーマンがどこをどうやってか、マモルの流れ着いた世界、ユニバース0422にやってきて、それを奪った。

時空の壁に穴を開けるのでなければ、因果律弾は簡易型の因果律マシンと同じ特性を持つ（というより、因果律マシンはその特性を拡大するための増幅装置に過ぎない）。

以前、ドクター・レザリアがこれを作り得たのは、偶然、ユニバース0422から流れ着いたもう一人のドクター・レグザリアを殺して作り上げたためで、それ故にプロウジョブも二度と同じものが作れなかった。

だが、この因果律の塊は、別の使い方が出来る、とマモルは告げた。

「ひとりの人間にふたり分の運命は受け入れられない。だから今のエイズワンダー、クララにそれを撃ち込めば、彼女の運命は飽和状態になって停止する」

「！」

「ワイヤーマンはきくと、因果律マシンの残骸を捜索しているうちに、因果律弾の存在に気づいて、まだ作動していた残骸を使って僕のいたユニバース0422に来たんだと思う。あと二秒、決断するのが遅かったらそのままゲートは閉じていた。でも、僕はワイヤーマンの使ったゲートを使い、ここに戻って来た」

「あ、あのつまり、それはクララはもう助からない、ってこと？」

「僕を殺す事に成功すれば多分、ね」

「因果律は、本来それが寄り添う筈だった本体、つまり僕に引き寄せられる。僕が生きている限り、あと七二時間……三日もすれば再結晶化して、クララの中から出てくるよ」

「じゃあ……」

「それでも少し、クララの運命と融合しているかも知れないけれど、僕が因果律弾を使って元の世界、つまりここ、マルチユニバース0244に戻れば、完全に分離される」

「待って、それ、どういうこと？」

「この因果律弾は一回だけ、僕にしか使えない平行世界の『鍵』なんだ。どんな形であれ、平行世界の扉を開けて、僕をその向こう側に送り込んだら消える……つまり、クララを助けるには、僕がこの世界からいなくなる必要がある、ってこと」

そう告げて、タイム・ブレットことマモルは微笑んだ。

二十年前と変わらない、優しい、どこか寂しげな笑み。

「だからアテナ、心配しないで。君の娘はちゃんと助かるから……ハンナ、じゃなかった司令にもこの事は伝えてある。大丈夫、逃げたりしないよ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「それまで、どうするの？」

「特に考えてないよ……病院の近くに宿を取って貰って、のんびりする。テレビを見て、二十年後のこの世界のことを色々調べて、映画を何本か見せて貰って、それから……マルチユニバース0244に戻る」

「会いたい人は？」

「ふたりだけ」

「誰？」

「その……さ、最後に君とあいたくて……アテナ」

「覚えてくれたんだ、私の名前」

「忘れるもんか、僕にとっては去年のことだもの」

「ありがとう、マモル」

「覚えていてくれたんだ」

「ええ、忘れるものですか、私の、初めてのヒーローの友達」

アテナはぎゅっと少年を抱きしめる。

二十年前と違って、一五センチは高くなった彼女にとつて、少年の顔はちょうど自分の胸に埋まる位置になった。

少年の心臓が高鳴るのが彼女の聴覚に聞こえる。

身体の中、血液が流れていく音。

「あ、あの……ひ、ひとりしてくれないかな？」

自分の身体をアテナの豊満な胸の中から押し出すようにして少年は離れようとする。

「こ、このままだとその、へ、変なこと言い出しそうだし」

「変なこと？」

「そ、その、あの……き、きみが、きみ、が……」

少年は真っ赤になり、ガタガタと震え始めた、

「きみ……み、が、す、好きだ、とか、そ、そういうの、あは、あは、あはははは」

何とか冗談めかそうとして、見事に失敗して少年は引きつった笑いをあげようとして、それまでしく

じった。

乾いた笑い声が途絶え、沈黙が落ちる。

「マモル……」

怯えたように、狼狽えるように、ベッドの上で少年はアテナを見つめる。

その目をのぞき込んだ瞬間、アテナの胸の奥がきゅうつと縮まった。

少年の目の中にある感情を、今度こそ彼女は正しく読み取った。

二十年たち、だらしな肉体になり果てた自分を、未だにこの少年は恋してくれている。

直感であり、確信だった。

頭の中を、ハンナが見せてくれたレポートの内容が過ぎる。

この少年は、増大した性欲に悩み、苦しんでいるのだ……未だに。

そして、ヒーローとして自分の娘を救おうとしている。

この世界における自分の居場所と引き替えに。そんな彼に、何が出来るか。

（あなた……ごめんさい）

一瞬だけ目を閉じて、アテナは今もこの世にいない夫に謝罪すると、少年の唇を奪った。

少年の身体が、固くこわばる。

軽く力を入れて抱きしめた。

「だ、駄目だよ……ごめん、ぼ、僕は……」

唇を離すと、少年は歓喜のなか、戸惑ったような、慌てたような顔をした。

「知ってるわ、あなたが、性欲を抑制していることも、そのために誰も傷つけまいとしてたことも」

「……どうして？」

「それに、これは浮気じゃないわ」
自分自身と、マモルに言い聞かせるようにアテナは囁く。

「私は未亡人なんだもの」

「……」

「そ、それとも、こんなおばさんになった私じゃ、イヤ？」

「そんなことない！」

マモルは声を荒げ、慌てて口をつぐんで横を向く。

「そんなこと……ない。今でもアテナは綺麗だ……それに、その……あの……本当を言うとその、少し……期待、してた。だから、その好きだ、とか……言ったんだ。このまま言わないで、いるの、辛かった……から」

真っ赤になってそういう少年が、アテナは愛おしかった。

二十年前気づくことなく、残酷に通り過ぎてしまった想いに、今全てを受け入れて、応えることが出来る喜びが、胸を震わせる。

まるで、少女のように。

「嬉しい……マモル」

そう言っ、アテナは細いうなじに唇を押し当て、ベッドから抱き上げると、服が燃えたりちぎれたりしない速度を維持しつつ、一気に病院施設から、転送装置まで駆け抜け、自宅のリビングへと戻った。

これからの出来事を、NUDEの施設の中でしたくはなかった。

「すこい、ね……」

抱きかかえられたまま、マモルが微笑む。

「僕のレポートよりも楽でいいや」

くすつとアテナも微笑む。

「ようこそ、私のお家へ」

そう言っ、少年を薄暗いリビングの床に降ろし、唇を重ねた。

「あ……」

少年が呻く。
入院用パジャマのボタンを素早く外し、細く、引

き締まった裸身をあらわにさせながら、ズボンの前を開ける。

下着のないその中へ躊躇せず手を差し込むと、固い金属のリングが指先に触れた。

そこから先は簡易式の時限ポケットに通じていて、何も無い。

「これ……外して」

「で、でも……」

「あなたと、最後に思い出を作りたいの。今の私ならきつとあなたを受け入れられる」

「……………」

数秒の躊躇のあと、少年の指先が、自分の男性器の根元に埋められた装置を解除した。

はあっ、と大きな息をつき、少年の白い裸身がピンク色に染まる。

リングが床に落ちながら、それまで装置が隠していたものをあらわにする。

「え……?」

アテナはそれを見て驚いた。

萎えた状態なのに、それは子供の手首ほどもある大きさだったからだ。

どくどくと血液が流し込まれ、硬直した海绵体が、みるみる下着を押し上げて、やがて覆いきれなくなつた薄い布地がずり落ちる。

「あ……………」

思わずアテナは声をあげた。

それほどまでに、少年の男性器は凶暴な大きさと硬度で天を突き抜ている。

びくん、びくんと心臓の鼓動に合わせて震えるたび、先端の切れ込みから先走りの液体が溢れて、肉の幹を濡らしていくのが、男性に触れたことも、触れたこともない身体には、溜まらなく愛おしい。

ごくり、と喉が鳴った。

高校生の娘を持つ、元スーパーヒーロインとして押さえ込んでいた女の、牝の欲求が身体をジクジクと

支配していくのが判る。

すでに自分の股間が濡れそぼっているのを感じる。だから、躊躇なくそれを口にくわえた。

少年があえぐ。

その声は天使の歌声。

人の肌のぬくもりを、熱さを、口に感じるのは、久しぶりの経験だった。

自分の夫以外の男を知らないアテナは、一心不乱に少年に奉仕した。

成熟した女性のテクニクに、童貞のマモルが耐えられる筈もない。

長いまつげを震わせ、腰をわななかせて、悲鳴のような声を上げながら、彼はアテナの頭を己の股間に押しつけ、瞬く間に射精した。

二十年ぶりの熱い粘液の味に、陶然となりながら、アテナはそれを飲み下し、飲みきれなくなると口の中に溜めた。

ぬぼお。

下品な音を立てて引き抜くと、上を向いて少年に口の中を見せる。

「……………」

これまで見たことのない熱っぽい、牝の視線を受けて、アテナの牝の部分が燃え上がる。

たつぷりと中に溜まった白濁液を見せつけて、それから彼女は口を閉じ、飲み干した。

粘液の名残が糸を引くまま、再び口を開けて飲み干したことを証明する。

「凄く……一杯出たね……マモル」

こくん、と少年は頷いた。

一度射精したにもかかわらず、少年のペニスに萎える気配はない。

アテナの脳裏に、ハンナが見せてくれた書類の内容がよぎる。

性欲を抑制しているという項目の続きに、細かい、少年の性欲処理のレポートが掲載されていた。

定期休暇の三日間での射精回数は数百回、出された精液の量は二十リットルを超えると。

（もしも……それが全部私の中に流し込まれたら……）

そう思うだけで、ジーンズの中、アテナの女が甘く疼く。

（クララに、妹か、弟が出来るかも……）

その危険性すら、発情した牝の思考の中では興奮材料にしか過ぎない。

口にくわえたときの質量と熱、そして射精の勢いが脳裏で再生され、思わず手が伸びて、灼熱した鉄の棒に薄くゴムをまいたような手触りのペニスを握りしめていた。

「寝室へ……行きましょう？ ね？」

まるつきり違うことを望みながら、それでも貞淑な妻だった頃の意識が思わずそう言わせていた。

「いやだ……」

自分の心の奥底が繋がったのか、それともエイズワルンダーとしての能力である共感能力が外に向けて発揮されたのか、少年は首を横に振った。

「ここで、今すぐ、アテナが欲しい」

中性的な顔立ちと体つきなのに、言葉は飢えた牝のものだった。

「私と……」

次の言葉を口にするのは少々ためられた。余りにも下品で、いやらしいから。

だが、燃え上がった性欲がその躊躇を押し切った。だが、ここで今ハメたいの？」

「私と、ここで今ハメたいの？」

言われた瞬間、マモルの身体が震えた。衝撃ではあったが、ネガティブなものではなく、自分の言葉がますます少年の性欲を刺激した証だと直感で理解する。

「私とオ○ンコしたいの？ このリビングで、娘と一緒にテレビを見たり、笑い合ったりするこの場所？ 獣みたいにセックスしたいの？」

自分の中に、こんな下品な言葉があることが不思議だった。

ひよっとしたら共感能力が暴走して、互いの頭の中にある記憶の断片の中から、最もいやらしい言葉を脳内で再構成しているのかも知れない。

それでも構わなかった。

肉欲で支配された今の自分たちには相応しい言葉だし、行為だから。

「ハメたいし、セックスしたい」

少女のような美しい外観を持った少年の、欲情のあまり乾いた声がアテナの耳に甘く響く。

たまらなかった。

もどかしくジーンズを脱ごうとして、引き裂く。

躊躇する主婦としての経済観念は消え去っているから、それをそのまま病室の隅に投げ捨て、三人掛けのソファの上に横たわり、片足を床へ、もう片足は背もたれへ引っかけられるようにして、濡れそぼった下着の股間を突き出すようにする。

「来て……マモル、プレット……あなたを頂戴。全部注ぎ込んで」

ゆらりと、マモルの身体が揺れて、そのままアテナの身体に覆い被さってきた。

ブラが引きちぎられ、二十年前の二倍以上の大きさになった乳房を食られた。

キスの嵐。今度は舌を絡め、互いの唾液が喉を濡らして光らせた。

明かりのついたリビングで、二人は互いを食る。胸の間で挟んで二回射精させた。

精液と唾液がまざったものが体中に塗りたくられ、アテナも少年の細い、引き締まった身体にそれを塗りたくる。

ぬめぬめ光るナメクジのようないやらしい裸身のふたりはさらに絡み合った。

少年は上下逆になって、アテナの性器を下着の上から食る。

声をあげながら、必死になってアテナはますます固く、熱くなっている男性器に舌と指で奉仕する。

こんなのはじめて、と何度も口走った。

夫の性器だつて口に含んだことはそんなにないに、マモルの性器を舐め尽くした。

根元の柔らかい袋まで丁寧な口に含み、転がし、少年が呻くのを聞いて喜びに身を震わせた。

その間に何度もアテナの女性器の奥は収縮し、軽い絶頂を何度も迎え、溢れる液体が白濁して少年の喉を潤す。

むっちりとした長い両脚を抱え上げ、少年は挿入しようとして、濡れすぎた女性器と、自分の性器に塗りたくられた唾液と先走りの汁のせいで何度も入り口を滑ったが、アテナは優しく握りしめて、中へ導く。

「はうおとおおとおおっ！」

中に潜り込んできた瞬間、その圧倒的な質量と熱に思わずはしたない声をあげた。

あとは獣のようにベッドの上で少年は腰を動かし、応じながらアテナはゆっくりと浮かび上がり始めた。

文字通り天にも昇る心地で、少年の嵐のような腰使いを受け入れ、少年はすぐにうめき声をあげながら射精した。

最初の時と変わらない量と勢いの精液が膈内にあふれかえり、子宮を満たして接合部からぼたぼたと漏れる。

それでも少年のペニスは萎えない。

構わずそのまま正常位でアテナの豊満な肉体を貫き続ける。

「いやあ……だめえ……」

言いながらも、その言葉とは裏腹にアテナは少年を抱きすくめ、長いむっちりとした両脚はその細い腰を包み奥へ奥へと導き、一滴たりともその命の滴を漏らすまいとする。

膈内での四度目の射精が、アテナの身体を深い、

最初の絶頂へと送り込んだ。

ひくひくと膈が蠢き、凹凸の激しい天井部が少年の亀頭をこすりあげるなか、通常の人間とは違う動きで子宮がペニスの先端にむしやぶりつくように降りてくる。

すてにばんばんに鳴っていた子宮がそれでも一滴とも残すまいと精液を吸い尽くす。

「あ……あ……」

満たされる想いに、アテナは涙を浮かべながら少年を抱きしめ、天井を眺めた。

（凄……こんなに凄いの……久しぶり……いえ……初めて……かも……）

「あ……アテナ……」

荒い息をつきながら、マモルが囁く。

「エイズワンダーの衣装、ある？」

その意味するところを理解して、アテナの背中をぞくぞくしたものが駆け上る。

この子は、エイズワンダーとしての自分を犯したい、と言っているのだ。

以前、夫であるB・M・シューターが生きていた頃は自分では恥ずかしくて決して受けなかったことを、要求している。

だが、今のアテナは二十年ぶりの快楽で脳が薄けきっていた……何よりも、少年が愛おしかった。

二十年前、内なる潔癖に苛まれて自分に想いを寄せながら時空の彼方に消えた少年が、変わらぬ想いを今の姿の自分に抱いてくれていることを。

「いい……わ」

自分が、驚くほどいやらしい女だと、牝だと自覚しながらアテナは、エイズワンダーとして頷いた。

「エイズワンダーと、ハメたいんでしょう？ 穴だらけに……したいんでしょう？ いいわ、かなえてあげる。あなたになら、穴だらけにされて、ハメラれてもいいもの」

微笑んで、アテナは唇を重ねると、今度は舌を絡

めた。

☆

「んおおおつ、ああああ！ あああつ！」

エイスワンダーの姿になったアテナは、寝室で、後ろから犯されていた。

獣の格好、ドギースタイルと呼ばれる後背位で。

エイスワンダーの衣装の脇の下から始まるきわどい切れ込みの折り返し部分、股布の部分をずらして、巨大な男性器が、白濁液まみれの膣穴に押し込まれていた。

尻肉を押しつぶされる勢いで、熱く硬い肉棒が激しく挿送されている。

腰ごとマントを掴まれ、貫かれると、不思議に身体が絶頂にあっても空を飛ばないことに、アテナは初めて気がついた。

「ああ、素敵だよ、アテナ……エイス……凄く熱くて、ドロドロしてて、でも、つぶつぶがこすり上げてくれて……」

「いやあ……言わないでえ……言わないでえ……それは、それは秘密にしてえ……」

「ああ、凄いやアテナ……こんなに大きなお尻で……あの頃よりもすく綺麗だ……」

「いやあ、違うのお、違うのお……」

後背位で七回目の射精が行われた。

主婦生活の中で鍛え上げた腹筋の内側が、あまりにも多い精液のせいで膨らむ。

「あ……だめ……もう……だめ……お腹が、子宮いっばい……でえ……」

少年はそう言われてようやく、まだ固いままのペニスを引き抜いた。

とたんに、これまで圧縮されていた精液が「ごぼごぼと溢れ、ベッドシートを濡らし、白い水溜まりになっっていく。

「ああ……凄いやアテナ……素敵だ……」

それでもなおマモルはアテナの身体を貪る。

「こんなにお尻も、おっぱいも大きくなって……いやらしいよ……」

豊富な乳房に掌を埋没させながらこねあげ、固く尖った乳首をしごき、愛液と精液をどくどく吐き出し続ける淫らな門の上、クリトリスをこね上げる。

そのやり方はアテナが教えたものの、すでに少年は自分のものにしていった。

「いやあ……言わない……で……」

あえぐアテナの唇を、少年が奪う。

ベッドの上、ふたりは絡み合う。

アテナはマモルの股間を握りしめた。

未だ熱く、まだ硬いペニスはあと数十回、データ通りなら数百回は射精できるだろう。

寡婦となって二十年弱、貯まりに貯まった彼女の欲求は、その全てを受け入れようと決意していた。

「マモル……前は初めてをあげられなかったけれど、後ろは……まだなの」

「……え？」

言葉を理解出来ない少年の前で、腰を高々とあげ、股間の布をさらに大きくずらしたアテナは恥ずかしそうにその上にある小さなすぼまりの周りの尻肉を広げて見せた。

「マモル……来て」

「……」

NUDEの常として、所属するスーパーヒーローの自宅周辺の安全警護は当然の任務である。

その内容には監視任務も入る。

だがその日、遙家の全てのモニターは、ハンナの執務室にのみ、直接転送され、他の部署には一切流されていない。

汗だくになりながら、交わり続けるふたりの姿を、ハンナは執務室の椅子に腰掛け、足組みしながら眺めていた。

気がつくくと親指の爪を噛み、組んだ足の付け根が細かく動いている。

各所にしかけられた隠しカメラと、遠距離からの透過機能カメラで捕らえられた二人の映像は、その激しいセックスを余すところなく映し出している。

少年にアナルを与えたアテナは、エイスワンダーの衣装のまま、ベッドの上で身もだし、ついにはシートを噛み千切りながら少年の直腸内への射精を受け入れた。

そのまま少年は二巡目に入る。

無敵の強さを誇る彼女の身体はじきにアナルセックスの痛みを快楽に変換し、快楽のあえぎ声を放つようになるだろう。

最初の一時間は流していた音声も今は消している。

それでも、次第に快楽にまみれていくアテナの声

が、その膣内の感触を賞賛しながら上り詰めていくマモルの声が聞こえて来そうだった。

「……」

やがて、後背位でアテナのむっちりとした太腿を抱え上げるようにして、マモルが腰を使い始める。

エイスワンダーの衣装越しに、豊満すぎると言われるようになった乳房が握りしめられ、衣装越しに尖った乳首がこねられる。

「あー、もう！」

短く叫んで、ハンナは立ち上がった。

「最高指揮官権限、遙家監視モニター全停止、音声、映像、通信傍受共にレベル一でこれを命じる」

『了解、全監視モニターを停止します。停止時間を指定してください』

スーパーヒーローと認定された人物の監視モニターの一時停止は出来るが、終了は出来ないのです、AIが尋ねる。

ハンナは腕時計に目を落とした。

「あと……四八、いえ四三時間後に再開」
『了解、四三時間後に再開します』

☆

目覚めている間は交わり、ふたりは家の中でセックスにふけた。

食事を取るときも互いの足で性器を刺激しあい、料理を片付ける素肌にエプロンだけをしたアテナの尻に欲情したマモルを立ったままのバックで受け入れ、フローリングの床を精液と愛液で汚し、濡らし、トイレでも放尿するマモルのペニスのアテナが握りしめ、尿道に残ったものをすすり上げた。

浴室では、互いの排泄物さえ与え合った。

最初は激痛を感じたアナルセックスも、その頃には内臓を引き出されるような快楽になっていて、アテナは何度もマモルの名を呼びながら尻を震わせ、少年もまた、熟女となったかつての初恋の相手の指を三本まで後ろの門に受け入れて射精するまでになっていた。

そうしてふたりは互いの身体で知らない部分はなくなっていて、気がつけば二度目の夜を迎えていた。

あと三二時間。

そう思うといっそう少年が愛おしい。

そして、アテナはベッドの上で少年に覆い被さりつつ、自分の娘の部屋のクローゼットに人の気配を感じ、壁の向こうに人影を透視した。

「……」

気づかぬフリをして、湯上がりの匂いのするバスローブ姿のマモルを抱きしめ、そっと囁く。

「……わかった」

マモルは頷き、アテナに抱きしめられ、ベッドの上で仰向けになりながらテレポトする。

「きやつ！」

ハンナの悲鳴を聞くのは二十年間無かった。

アテナは耳をそばだてて、壁の向こうの会話を聞く。

☆

「どうしたの、ハンナ？」

バスローブ姿のマモル……タイム・ブレットがいきなり現れて、ハンナは真つ赤な顔のまま、しどろもどろに視線をさまよわせた。

NUDEの強面の指揮官ではなく、かつてのヴィランでもなく、二十年以上前、彼の元で頑張っていた少女のままの顔で。

「あ、いえあの……先輩の様子を、見に来ただけです。あと三二時間後にはこの世界から去って貰わないと、エイスワンダーが……今のエイスワンダーが目覚めませんし、それではプロウジョブ相手の戦いに……」

「大丈夫だよ、ちゃんとこの世界から立ち去るから。僕もヒーローのひとりだよ。自分のやるべきことは忘れてない」

「そ、そうですよ、ええ……わ、私もそうは思うのですが責任者としては、い、一応……」

真つ赤になったハンナはちらちらとマモルの方を見ては、目をそらす。

「どうしたの？」

「あ、いえあの、その……」

「あーもう！」

ひよい、と全裸にバスタオルを巻き付けただけのアテナが超音速で移動してハンナの後ろに現れた。

「マモル！ この子、あなたの事が好きだったのよ。多分、私たちの様子をNUDEの本部でモニタリングして、我慢出来なくなってここに来たの！」

「……え？」

「あ、アテナ、あなた！」

文句を言おうとするハンナのタイトスカートを、一瞬でアテナはめくり上げた。

レースのふんだんにあしらわれたバックスタイルのブルーのショーツに、失禁にも似た染みがついていて、それがストッキングを通じて引き締まった太腿まで流れている。

「や、やめなさい……」

言いかけるハンナの唇を、アテナが奪った。

ぬちゅぬちゅと、二枚の舌が絡み合う。

その間にもアテナの手が、ハンナの乳房を下から上にもみ上げながら、ブラウスのボタンをするすると外した。

一唇が離れる。

「見たか、女子校で鍛えたこのテクニク！」

くたくたと、ハンナはその場に膝を突いた。

「正直になつたら？ あと三二時間で、永遠に会えなくなるかも知れないのよ？」

「……」

くつと隻眼の美女は乱れた胸元をかばいながらアテナを見上げたが、やがてがっくりと項垂れて溜息をついた。

「そうよ……せ、先輩が好きだったの。バカみたいだけど、この年齢（とし）になっても、まだ先輩のことが忘れられないのよ！ だから、だからモニタリングして、我慢出来なくなつて、でも、でも……」

ひとつだけ残ったハンナの目から涙が流れる。

「私はNUDEの司令官なのよ！ 誰からも恐れられ、敬意をもたれる司令官なの！ もう昔のヴィランでも無ければ、戦闘班の小娘じゃないわ！ だから……だから……」

叫ぶハンナの身体を、ぎゅつとマモルが抱きしめた。

「ごめんね、ハンナ」

叫ぶハンナの口が停まる。

「自分の事ばかりで、君の事にまで気づいてあげら

れなかった……」

「先輩……」

「ぼかんと眩き、ハンナはやがて「先輩」と繰り返しながらマモルの身体にしがみついて号泣した。」

A C T 4 グッバイ・マイ・ファーストワンダー

☆

「あ、あの……」

「寝室、シーツを取り替えたばかりのベッドの上で、髪をおろし、ブルーの下着姿になったハンナはおずおずと両脚を開いた。」

「あれから、色々あつて……アナルはもう処女じゃありませんけど、前だけは……先輩のために……」

「うん……でも、いいの？ 僕で」

「……はい」

「こつくりとハンナは頷いた。」

「みつしりと筋肉と脂肪のつたアテナの身体と違い、超人血清のおかげで二十代の若さを保つハンナの細く引き締まった太腿がマモルの視線を受けて紅潮していき、さらにショーツの股布部分の染みが広がる。」

「あの………思いっきり貫いて……ください。私、超人血清のせいで、再生能力が激しいので、しばらくは貫いてくれないと、処女膜が……なくならないかもしれない、ですから」

「う、うん……」

「戸惑いながらマモルはハンナの上に覆い被さる。」

「濡れて重くなったショーツを脱がせ、ブラを外すと大ききこそアテナには負けるが張りでは負けない乳房が揺れる。」

「ピンク色の乳首はすでに硬い。」

「ここで………いい？」

「自分の硬く、巨大なペニス、ハイレグの衣装をまとうためアンダーヘアを処理したアテナとは違い、小さく残した恥毛で飾られた臍口に押し当てて言うマモルに、

「はい………」

「とハンナは頷いた。」

「押し入ると同時に、ハンナは唇を噛み、マモルにしがみつく。」

「き………キツイ………」

「思わず呻くマモルの肉幹をつたい、ハンナの破瓜の血が辿り落ちてシーツに染みを作る。」

「へえ………本当にハンナ、処女だったんだ」

「気を利かせて部屋の外にいたはずのアテナが、結局部を見ながら声をあげた。」

「ば、バカ、なんでここに居るのよ！」

「いいじゃない、親友の処女喪失なんて、そうそう見れるもんじゃないし」

「ば、バカバカバカ！ 出て行ってよ！」

「いやよ、まったく………いっつもうちら親子のことをかき回してくれるんだもの、こういうときぐらい、あたしがかき回さないとね♪」

「オバハンみたいなこと言うなあ！」

「いいからいいから♪」

「そう言うと、アテナはマモルの後ろに回り、その腰に両手を当てた。」

「マモル、手伝ってあげるね」

「え………？」

「そうおれえ！」

「言うなり、アテナはマモルの腰を前後に動かし始めた。」

「うわっ、ああっ、だ、駄目だってアテナ！ 激しいっ！」

「だめえっ アテナ、止めて、停めてええっ！」

「大丈夫大丈夫、超人血清のおかげできつと身体が慣れてくるって！」

「エイスワンダーの力を十とすれば一も使っていないのだが、処女とつい昨日まで童貞だった少年には思いも寄らぬ荒い腰使いだ。」

「いひっ、ひいっ、あひっ………」

「仰向けに背中を反らせ、シーツを握りしめてハンナが叫ぶ。」

「あ………だめ、だめっ、アテナ、出ちゃう、出ちゃうっ！」

「いいのよ、出しちゃいなさい、出して、ハンナを自分のものにしちゃえばいいわ、あたしみたいにねっ！」

「えっ………」

「アテナの言葉の意味を理解するよりも早く、マモルの輸精管の中を、ドロドロの粘液が駆け抜けていく。」

「あくうううっ！」

「ハンナが初めての精液を膣内に受けてマモルの背中に爪を立てて叫ぶ。」

「先輩っ、先輩いいいいいっ！」

「すこい………やっぱり男の子って射精するとき、肛門がひくひくするのね………」

「観察していたアテナがそう言って、少年のアナルに唾液でたっぷり濡らした三本の指を押し込む。」

「あひいっ、あ、アテナあっ！」

「さらにもう片方の指をハンナの肛門に。」

「ひひやあっ！」

「まだ大丈夫でしょう？ マモル、今度はふたりともお尻の穴を弄られながらイッてみましょうよ」

「あ、アテナのばかあ！」

「ほら、ほらほらほらほら！」

「初代エイスワンダーの指がふたりの男女をベッドの上で踊らせる。」

「だめえっ。だめえっ、アナルほじられながら、ヴァギナに先輩いっばいで、だめええっ！」

「出る、出るううっ、また出るうっ！」

ふらふらと立ち上がり、まだあえぐ少年の口元まで移動すると、革製のパンティから生えている、萎えきったバイオデルドを突きつける。

「先輩……舐めてください、私のおチン〇……元気にして……ください」

うつろな目でそれを眺めていたマモルは、ゆっくりとそれを握りしめ、びちゃびちゃと水音を立てて自分のアナルを犯していた道具を舐め始めた。

「ああ……先輩が、先輩が私のオ〇ンポ舐めてるう……」

淫欲にあぶられて酔ったような声で言いながら、ハンナは自分の乳房を持ち上げ、舐め始めた。

しばらくして、アテナが目を醒ますと、ハンナは少年を組み敷いて、激しく犯している最中だった。

後背位から、対面座位に代わり、最後は後背座位でかつての後輩だった隻眼の美女に犯されているマモルは、可憐な少女のように美しかった。

それまでとは違う淫欲が、初代エイズワンダーの胸を焦がす。

「あああつ、イクつ、イクうううう！」

叫びながらマモルが、ハンナの疑似精液を受けて射精するのを全身に浴びたとき、アテナの心は決まっていた。

「ハンナ……私にも、その玩具を貸して」

ペろり、と豊富な乳房の上にまぶされた精液を指ですくって舐めとりながらアテナは言った。

「私も……マモルと、あなたを犯したい」

その目を見て、ぞくぞくと震えながら、しかしうつとりした表情でハンナは頷いた。

「ええ、喜んで……エイズワンダー……あなたに犯されたいわ」

マントが翻り、そして、股間に疑似ペニス装着したエイズワンダーが、ひとりの女とひとりの少年を弄び、犯し始めたのはそれから数分後のことだった。

さらに攻守所を変え、最後にはマモルのペニスから溢れる精液をふたりの熟女が先を争って飲み干すようになって、さらに十数時間後。

ようやくマモルのペニスは萎え、息も絶え絶えのふたりの美女は、別れの時が来たことを、ハンナの腕時計が鳴ることで知った。

☆

時間が来て、眠り続けるクララの上に、きらきらと輝きながら、細かいガラスのような粒子が破片になり、破片が塊に変わる。

そしてそれは、因果律弾の弾頭になった。

303ウエザビーマグナムそっくりな大きさと形状の弾頭をタイム・プレットはそとと手に取り、腰に下げたH&K G3を改造したレールガンライフルの薬室に装填した。

「これでいい」

そして、屋上にあがると、レールガンライフルを構え、引き金を引いた。

甲高い破裂音と共に、病院の屋上に虹色の波紋が広がり、やがて極彩色の「因果律の穴」が開く。

「じゃあ、行くね」

寂しさも、悲しみもない晴れ晴れとした顔でタイム・プレットは微笑んだ。

「いいの？ 他に会いたい人は……」

「いないよ。君たちふたりに会えただけでもいいんだ。それに二十年以上昔の亡霊にあって、喜ぶ人はいないだろうしね……僕も思い出のままがいい」

見送る者はアテナだけ、という状況で、エイズワンダーとこの世界を救った少年は言った。

「それに……君にもこの方がじっくりお別れが言えるもの」

少年はアテナの豊富な身体を抱きしめ、背伸びして頬にキスをする。

それは、つい数時間前までの愛欲の行為が終わり、それぞれに愛する人の元に、生活に戻るべきだという意味。

「出来ればハンナにもお別れを言いたかったんだけど」

「氣まずいのよ、あなたに対する思いとかその……犯しちゃったりしたこととか」

「気にすることないのに」

少年は吹っ切ったように微笑んだ。

「……プレット、本当にそれでいいの？」

アテナには、この近くにハンナがいることは判っている。

つれて来ようか、という意味が言葉の外にあった。

「いいんだ。彼女が決めたならそれで」

少年は微笑む。

「あなたは、本当にこのままここに居れなくていいの？」

「それに、クララはいい子だもの。アテナも悲しむ。そんなのはイヤだよ。ヒーローは、人の涙を救うものだしね」

「プレット……マモル」

「ありがとう、アテナ」

少年は初代エイズワンダーの手を握りしめた。

そして、アテナが感じたハンナの気配の方角へ視線を向けて、

「ハンナに伝えて。今度の平行世界で、君に会えたら、その子を必ず大事にするって。そして、またここに帰ってくる日が来たら、また愛し合おうって」

「ええ、マモル。必ず伝えるわ」

アテナは頷きながら泣いている自分に気がついて

いた。

「もうトシね……すっかり涙もろくなっちゃって……ごめんなさい、門出に涙は禁物なのに」

「いいさ。昔から君は泣き虫だったじゃないか、アテナ」

その涙を指先で拭い、ほんと、両肩を叩いてマモルは後ろに下がった。

別れの時が来たのだ。

「さようなら、僕のエイスワンダー」

少年の別れの言葉と微笑みが、アテナの目と耳に響く。

「僕の最初の謎（マイ・ファースト・ワンダー）。思い出をありがとう」

そういうと、少年は渦の中へ身を躍らせた。

「マモル！」

叫ぶ瞬間、運命の塊が生み出したゲートは閉じる。これで、この世界に生まれた歪んだ因果律は消失し、クララの目が覚めるだろう。

だが、娘が救われた喜びと同時に、悲しみがアテナの胸を染める。

「……………ハンナ、出てきなさいよ」

アテナが背後に移動した気配に対していうと、しばらく経ってからようやく光学迷彩が解除され、ハンナが姿を現した。

「帰ったわね、彼」

無言で振り返りもせず、アテナはハンカチを差し出す。

「泣いてないわよ」

「中に目薬入ってるわ。充血したまま部下の前には出られないでしょ？……まったく、素直じゃないんだから。今生の別れかも知れないんだからもっと抱きついたりキスしたりすれば良いのに。これじゃマモル、私に恋したままに見えるじゃない」

「い……………いいのよ、私はNUDEの司令としての立場があるんだから」

「……………いいじゃないの、DM転じてDS、憧れの先輩に処女をあげたあとに処女を奪っても……………彼、怒ってなかったわよ」

「そういうデリカシーのないことをいうからオバハンなのよ！」

「あー！　そういうことを言うの？　同年代のくせに！」

「あなたみたいにね、鈍感な人間じゃありませんから！」

「何言うのよ、あたしがお膳立てしてあげなけりや今でも処女のままじゃないの、超人血清だかなんだかしりませんけどね、葉で二十代の肉体を維持しても偉くも何ともないんですからね！」

「自分の腰回りと胸のサイズを言いなさいよ！　そろそろあなたのエイスワンダースーツ、サイズが限界だって評判よ！　股間から破れても文句言わないでよね！」

「な、なにいつてるのよ！　あんた達がケチだから私用のスーツ作ってくれないんでしょうが！　あ、それとウチのクリーニングとベッド、そっちで何とかしてよね！」

「どうしてそこまでしないとイケないのよ！　ちゃんとNUDEの部屋、使わせてあげたじゃない！」

「それはそれ、これはこれ！」

「都合のいいところで切り分けるなー！」

女ふたりの罵りあいはいはそれからしばらく続いたが、互いに一歩踏み出した瞬間、双方の腰で「ゴキ」と不気味に鳴った音と、腰を押さえるふたりのうめき声で終了した。

おおよそ三日間近くに及ぶ激しい「行為」の当然の結果である。

☆

「ん……………」

クララが病院で目を醒ますと、アテナが抱きしめてくれた。

「大丈夫、クララ？　ビックリしたわよ。この前の騒ぎの途中で階段から転落して三日も意識を失って

たなんて……………良かったわ、本当に、本当に良かったわ」

「あ、うん……………」

戸惑いながら、クララは病室のドアの向こうにハンナが唇を押し当ててる仕草をしているのを見て、上手くNUDEが誤魔化してくれたと理解する。

「ごめんね、母さん」

「いいのよ、事故だもの」

「そういえば、母さん」

クララはまだボンヤリしている頭で、とある人物の顔を思い出し、尋ねてみた。

「タイム・プレットっていうヒーロー、知ってる？」

その瞬間、母親の浮かべた寂しげな、そして何処までも優しい笑みの意味を、しばらくクララは考え、結論が出ないまましばらく忘れ去ることになる。

「ええ、あなたを助けてくれた人よ」

アテナはそう応えて娘の髪を撫でた。

このお母さんが

ウチのムスメに手を出すな！

母娘ヒロイン奮闘す

そんな目に！

少年画報社
月刊ヤングコミックにて
好評連載中！
単行本 1、2巻も絶賛発売中！！

ども、環です。

この同人誌は私が少年画報社刊「月刊ヤングコミック」にて連載させて頂いているちょいエロスーパーヒロインコミック「ウチのムスメに手を出すな!〜母娘ヒロイン奮闘す〜」の公式同人誌です。連載開始当初はこんなニッチな漫画俺以外の誰が喜ぶんだ、などと思っておりましたが、意外にも世には同好の志をもつ変態紳士(笑)が多く、好評を頂いております。そういった猛者達の強力な力添えを得てこたびの同人誌発行となりました。感謝をこめて執筆陣のご紹介をば。(掲載順)

●ブッチャーU様

成人向け漫画、PCゲーム原画で高い評価を得ておられるブッチャーU氏。「ウチムス」連載企画始動の際、最初に思い浮かべたのが氏の描かれているスーパーヒロイン受難ものでした。いわば「ウチムス」の生みの親です。一か八かお願いしたヴィラン・アルテミスデザインを快諾して下さいたときは嬉しかった〜!今回は本編中アルテミスが悪堕ちした経緯をコミカライズして下さいました!

●チバトシロウ様

成人向け漫画家としてだけでなく、アメコミファンとしても広く知られるベテラン漫画家さん。単行本や同人誌は何冊も読ませて頂いてるんですが、実はほとんど面識がなかったのです。ですがスーパーヒロイン同人誌を出すにあたってチバさんに描いて頂かないのは画竜点睛を欠くよなあ、と思いつめぐらせていたところ、「ウチムス」を読まれていると知り、これまた一か八か突撃して執筆して頂く運びに!できればそのうちチバさんにシーハルクみたいなムキムキヒロインをデザインして頂きたいなあ。

●タカスギコウ様

人気成人向け漫画家のタカスギさん。デビュー前からサイトにアップされていた絵を拝見していて、大好きな作家さんでした。これまたツイッターで「ウチムス」を読まれていると知り、散々迷ったあげく(嫁の強力な推薦もあって)突撃してみたところ、快諾を頂きました!おれ今回ホントこればかり(笑)。熟女の匂い立つ色香を描くタカスギさんの絵柄でアテナを、それも6Pも楽しめるなんて、随喜の涙がこぼれますよ、ええ!

●ナッピー様

作品のコンセプトの親がブッチャーさんなら、アテナのキャラ造形の親がこちらのナッピーさんです。ナッピーさんの描かれた同人作品「ウルトラマダム」シリーズなどの「太ましくたくましい肢体を駆使して戦う熟女」の姿を拝見してなかったら、今のアテナは生まれていません(断言!)。DL販売されている「ウルトラマダム」の他は、商業も同人活動もなさらずpixivでのみ作品を発表されているのですが、今回無理をお願いして描いて頂きました。ナッピー版アテナ、完璧です!

●776様

ツイッターで執筆陣募集をしたところ名乗りを上げて下さった猛者!以前から画像投稿SNSなどで絵を拝見していたので、一も二もなくお願いしました。今回は唯一ムスメ、クララを題材にされていますが、そこは名うての変態紳士(褒めてます)、一筋縄では生きませんでした(笑)。可愛い絵であれをやっちゃうギャップのすごさに負けました!ありがとうございます。

●もっちー様

古くからの漫画家仲間にして友人のもっちーくん。この人の描いた熟年魔女っ娘漫画の金字塔「プリティー美沙」が「ウチムス」に影響を与えていないなんていったら、地獄で閻魔様に舌を抜かれる事確実です。もっちーの描く超たらしめないアテナを観たいなあ、なんて夢想していたので、同人誌作ると行った時、真っ先に「描くよ〜」と言ってくれたのは嬉しかった〜。調子に乗ってデザインしてもらった悪堕ちアテナ「ディープスロート」のエロさといったら、もう…ね…。

●一本木蛮様

言わずと知れた私秘の師匠にして業界でのおっかさん。「ウチムス」外伝のヴィラン「ハニー・ザ・ハガー」のデザインをお願いしたのが縁で今回の原稿もお願いしました。も〜ね、師匠の描くアテナの脂の乗りきった感じがね(笑)。そういや先日師匠のアシで僕の弟子にあたるギソン君から「アテナって国から年金出てるんですよね?だとしたら貢献度から言ってかなり高額の手当…」というコメントが。さすがは元軍人、着眼点が違う!

●榊原瑞紀様

アメコミ系作家として国内有数の経歴を誇る方。「ミス・マーベリックにさからうな」でタグを組ませて頂き、その超絶画力に何度唖らされた事か。その後「TIGER&BUNNY」のコミカライズに抜擢された時も「いや、他の作家は考えられないよな」といった感じでした。今回原稿をお願いした時「私の描く女の子はエロくないって言われるんです…ちょっとがんばってみます」とおっしゃってましたが(笑)いやいやこのお母さんのお尻は素晴らしい!無理を言っすみませんでした!

●かのえゆうし様

こちらアメコミ大好きベテラン作家様。「リリィ・トゥリガー」で組ませて頂いた時はかのえさんのダンナ様も交えて、ず〜っとアメコミの話してました(笑)。続きを是非!と双方熱望しつつ、残念ながら今に至っています。今回の原稿、久々にエックスの面子が観れて嬉しかった〜!ちなみにかのえさんには、アテナを狙うヴィラン、ポイント・ブランドのデザインをお願いしました。描いて楽しい良いキャラです。

●神野オキナ様

これまた言わずと知れた人気ライトノベル作家。ホントに古くからの友人です。ある日突然電話がかかってきて「ウチムスの二次創作書いてみたので良かったら読んでみて下さい」と告げられ、送られてきたファイルの多さに愕然!ライトノベルの書式だと100Pはゆうに超える量でした(笑)。内容も拔群だったけど、こんだけの小説をいつ書いたの!「書かずにいられたので、環さんに読んで頂けたら後はどうにでも」などと言われたら、本にしらないわけにはいかないでしょー。という訳で、今回の同人誌を作るきっかけくれたのが彼なのです。

●仲間達

そしていつもの4人組です。今回はヴァンパイアバンドの同人誌じゃなくてちょっと勝手に違うけれど、楽しんで書いてくれたようです。次回はまたヴァンパイアバンド本かな?よろしくね〜。



MILF of STEEL

環屋&トリフィ堂

編集人 環望 (Twitterアカウント@tamakinozomu)

連絡先 tamakiya66@yahoo.co.jp

執筆者 環望 Gemma ティクラクラン 富士原昌幸

発行日 2014年12月30日

印刷所 POPLS

連載開始前ヤングコミックに掲載された

「ウチムス」の次回予告カット。

コスチュームもさることながら

アテナの体型が(笑)。

SPECIAL GUESTS

ブッチャーU

もっちー

ナッピー

タカスギコウ

チバトシロウ

774

うちのムスメに手を出すな！公式同人誌

MILF of STEEL

ミルフオブスティール

Don't
meddle in
my daughter!

TAMAKI NOZOMU
PRESENTS

かのえゆうし

榊原瑞紀

一本木蛮

神野オキナ

富士原昌幸

GEMMA

ティクラクラン

環望

2014 WINTER

環屋&トリファイ堂